

IBM® WebSphere® Commerce
for Solaris™ オペレーティング環境ソフトウェア



インストール・ガイド

(Oracle データベースを使用)

バージョン 5.4

IBM® WebSphere® Commerce
for Solaris™ オペレーティング環境ソフトウェア



インストール・ガイド

(Oracle データベースを使用)

バージョン 5.4

ご注意!

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、221 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書の内容は、新版で特に指定のない限り、IBM® WebSphere Commerce Professional Edition and Business Edition for Solaris Operating Environment ソフトウェア バージョン 5.4 以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。製品のレベルにあった版を使用していることをご確認ください。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。

<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは

<http://www.ibm.com/jp/manuals/> の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

原典： IBM® WebSphere® Commerce for Solaris™
Operating Environment software
Installation Guide
for use with an Oracle Database
Version 5.4

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2002.6

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 1996, 2002. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2002

目次

第 1 部 始める前に 1

第 1 章 WebSphere Commerce へようこそ 3

本書の表記規則	4
デフォルトのインストール・パス	4
WebSphere Commerce に付属する製品	4
代替の Web サーバー	5
代替のデータベース	5
サポートされている Web ブラウザー	6
サポートされている構成	6
単一層構成	6
2 層構成:	9
3 層構成:	11
WebSphere Commerce で使用されるポート番号	14
WebSphere Commerce で使用されるロケール ユーザー ID、パスワード、および Web アドレスの早見表	15

第 2 章 インストール前の要件 19

知識に関する要件	19
Oracle の知識	19
前提条件となるハードウェア	20
前提条件となるソフトウェア	21
Solaris カーネル構成パラメーターの更新	22
その他の要件	23
インストール前の要件のチェック	24

第 2 部 Oracle8i Database のインストール 25

第 3 章 Oracle8i Database のインストール および構成 27

Oracle8i Database のインストール	27
WebSphere Application Server、WebSphere Commerce、および WebSphere Payment Manager 用のデータベースの作成	28
WebSphere Application Server、WebSphere Commerce、および WebSphere Payment Manager 用の表スペースの作成	29

WebSphere Commerce 用のユーザー ID および表スペースの作成	29
WebSphere Application Server <i>ejsadmin</i> ユーザー用のユーザー ID および表スペースの作成	31
WebSphere Application Server <i>ejb</i> ユーザー用のユーザー ID の作成	32
Payment Manager 用のユーザー ID および表スペースの作成	33
<i>initSID.ora</i> ファイルの変更	34
Oracle8i Database インストールのテスト 次のステップ	34

第 3 部 Web サーバーのインストール 37

第 4 章 WebSphere Commerce のリモート側での IBM HTTP Server のインストールおよび構成 39

インストール手順	39
IBM HTTP Server 管理者用パスワードの作成	41
IBM HTTP Server のセットアップ	41
WebSphere Application Server プラグインのインストール	42
WebSphere Application Server eFix のインストール	44
インストール内容のテスト	44
次のステップ	45

第 5 章 Domino Web サーバーのインストール 47

インストール手順	47
WebSphere Application Server プラグインのインストール	48
Domino Web サーバーの構成	49
WebSphere Application Server eFix および FixPak のインストール	50
Sun JDK レベルのアップグレード	51
次のステップ	51

第 6 章 iPlanet Web サーバーのインストール	53
iPlanet Web サーバーのインストールおよび構成	53
WebSphere Application Server プラグインのインストール	54
iPlanet サブレットを使用不可にする	56
WebSphere Application Server eFix および FixPak のインストール	56
Sun JDK レベルのアップグレード	57
次のステップ	58

第 4 部 必要な WebSphere Commerce コンポーネントのインストール

第 7 章 WebSphere Application Server のインストール	61
この章のチェックリスト	61
同じマシンへの WebSphere Application Server と IBM HTTP Server のインストール	61
IBM HTTP Server 管理者用パスワードの作成	64
IBM HTTP Server 管理サーバーのセットアップ	65
代替リモート Web サーバーと一緒に使用する WebSphere Application Server のインストール	66
WebSphere Application Server の構成の完了	68
Oracle8i Database ユーザー用の WebSphere Application Server の構成	68
WebSphere Application Server eFix および FixPak のインストール	70
Sun JDK レベルのアップグレード	71
インストール内容のテスト	72
次のステップ	73

第 8 章 WebSphere Commerce のインストール	75
インストール手順	76
WebSphere Commerce ドキュメンテーションの入手方法	77
WebSphere Application Server および Sun JDK のバージョン・アップグレード	78
次のステップ	78

第 9 章 IBM WebSphere Payment Manager のインストール	79
インストールの前提条件	79
ソフトウェア要件	79
Payment Manager のインストール前に	80
Payment Manager のインストール	80
リモート・マシンでの Payment Manager の構成	82
次のステップ	84

第 5 部 WebSphere Commerce インスタンスの構成

第 10 章 構成前のステップ	87
インストール後スクリプトの実行	87
Oracle8i Database の構成前のステップ	88
始める前に	88
setenv.sh での Oracle8i Database 環境変数の設定	88
Domino Web サーバーで実行するためのファイル許可の変更	89
WebSphere Application Server の開始	89
次のステップ	90

第 11 章 構成マネージャーによるインスタンスの作成または変更	91
この章のチェックリスト	91
構成マネージャーの起動	92
インスタンス作成ウィザード	93
インスタンス	93
データベース	94
言語	95
Web サーバー	95
WebSphere	96
Payment Manager	97
ログ・システム	98
メッセージング	99
オークション	100
インスタンス作成の開始	100
インスタンス作成の検証	100
インスタンスの開始と停止	101
構成の追加オプション	101
インスタンス・プロパティ	101
コンポーネント	115
保護パラメーター	115
レジストリー	115

オークション	116
外部サーバー・リスト	116
Commerce アクセラレーター	116
ログ・システム	117
キャッシング・サブシステム	117
ストア・サービス構成	118
トランスポート	118
ライセンス・ユーザー管理	119
次のステップ	119

第 12 章 構成後のステップ 121

ローカル Web サーバーでの構成後のステップ	121
iPlanet Web サーバー構成の完了	121
Domino Web サーバーの構成の完了	122
テスト用のセキュリティ鍵ファイルの作成	124
WebSphere Commerce で実行するための Payment Manager の構成	125
別のマシンでの Oracle の構成	126
JavaServer Pages ファイルのコンパイル	127
リモート Web サーバーでの構成後のステップ	127
テスト用の SSL を使用可能化	128
IBM HTTP Server のインストールの完了	129
Domino Web サーバーの構成の完了	132
リモート iPlanet Web サーバー構成	134
iPlanet Web サーバーのインストールの完了	135
Web サーバーへの資産のコピー	136
WebSphere Commerce で実行するための Payment Manager の構成	137
別のマシンでの Oracle の構成	139
JavaServer Pages ファイルのコンパイル	139
次のステップ	140

第 6 部 オプション構成 143

第 13 章 サンプル・ストア・アーカイブからのストアの作成 145

ストア・アーカイブの作成	146
ストア・アーカイブの発行	147
ストア・サービスからのストア・アーカイブの発行	148
ストアでのテスト・オーダーの発行	150

第 14 章 IBM HTTP Server での実行のための SSL の使用可能化 151	
セキュリティについて	151
実動用のセキュリティ鍵ファイルの作成	152
認証局に対するセキュアな証明書の要求	153
Equifax ユーザー	153
VeriSign ユーザー	153
実動鍵ファイルの受け取りおよび現行鍵ファイルとしての設定	153
実動鍵ファイルのテスト	154

第 15 章 複数の WebSphere Commerce インスタンスの作成 157

仮想ホスト名を使用する複数インスタンス	157
前提条件	158
複数インスタンスの作成	159
インスタンスの開始	160

第 16 章 WebSphere Application Server のセキュリティの使用可能化 163

始める前に	163
LDAP ユーザー・レジストリーを使用したセキュリティの使用可能化	163
オペレーティング・システム・ユーザー・レジストリーを使用したセキュリティの使用可能化	165
WebSphere Commerce EJB セキュリティの使用禁止	167
WebSphere Commerce セキュリティ・デプロイメント・オプション	168

第 17 章 複製 171

水平複製	171
垂直複製	174

第 18 章 単一サインオン 177

前提条件	177
単一サインオンの使用可能化	177

第 7 部 管理用タスク 179

第 19 章 WebSphere Commerce コンポーネントの開始と停止 181

WebSphere Commerce の開始と停止	181
WebSphere Application Server の開始と停止	181
IBM HTTP Server の開始と停止	182
Payment Manager の開始と停止	183

Payment Manager アプリケーション・サーバーの開始	183
Payment Manager の開始	184
Payment Manager ユーザー・インターフェースの開始	184
Payment Manager の停止	185
Payment Manager アプリケーション・サーバーの停止	186
第 20 章 パスワードの設定と変更	187
構成マネージャー・パスワードの変更	187
暗号化された WebSphere Commerce 管理コンソール・パスワードの判別	188
WebSphere Commerce 管理コンソール・パスワードの更新	188
WebSphere Commerce 管理コンソール・パスワードの変更	189
IBM HTTP Server 管理者パスワードの設定	190
SSL 鍵ファイル・パスワードの変更	190
第 21 章 通常の管理用タスク	191
WebSphere Application Server へのポート・ホスト別名の追加	191
構成マネージャーの使用	191
WebSphere Commerce インスタンスの更新	192
WebSphere Commerce インスタンスの削除	193
コマンド行での構成作業	194
WebSphere Application Server 管理コンソールのオープン	195
WebSphere Commerce 管理コンソールの開始	195
IBM HTTP Server ホーム・ページへの接続	196
IBM HTTP Server での仮想ホスト名の使用	197
wasuser ユーザー ID へのデータベース特権の追加	197
WebSphere Application Server プラグインの設定を更新するための obj.conf ファイルの編集	197
Payment Manager のセットアップ	198
Payment Manager Cassette の使用	198
Payment Manager 管理者の役割	198
Payment Manager マシンのセットアップ	199

第 8 部 付録 201

付録 A. WebSphere Commerce コンポーネントのアンインストール	203
Payment Manager のアンインストール	203
WebSphere Commerce のアンインストール	204
WebSphere Application Server のアンインストール	205
IBM HTTP Server のアンインストール	205
WebSphere Commerce コンポーネントの再インストール	206

付録 B. トラブルシューティング	209
ダウンロード可能なツール	209
WebSphere Commerce Installation and Configuration Checker	209
ログ・ファイル	209
トラブルシューティング	210
WebSphere Application Server の問題	210
Web サーバーの問題	210
WebSphere Commerce の問題	211
Payment Manager の問題	212

付録 C. 詳細情報の参照先	213
WebSphere Commerce の情報	213
オンライン・ヘルプの使用	213
印刷可能なドキュメンテーションの入手方法	213
WebSphere Commerce Web サイトの閲覧	213
IBM HTTP Server の情報	214
Payment Manager の情報	214
WebSphere Application Server	215
Solaris オペレーティング環境ソフトウェアの情報	215
その他の IBM 出版物	215

付録 D. プログラム仕様と所定稼働環境 217

特記事項	221
商標	223

索引 225

第 1 部 始める前に

第 1 部の各章では、WebSphere Commerce の基本的な解説を述べてから、WebSphere Commerce のインストールを正常に完了するのに必要な前提条件のハードウェア、ソフトウェア、必要な知識、およびユーザー権限について説明します。各章に述べられているすべての要件がシステムで確実に満たされていれば、インストールを完了するための作業がかなり容易になります。

WebSphere Commerce のどのコンポーネントをインストールする場合でも、以下の章を事前に完了している必要があります。

- 3 ページの『第 1 章 WebSphere Commerce へようこそ』
- 19 ページの『第 2 章 インストール前の要件』

第 1 章 WebSphere Commerce へようこそ

本書は、Oracle データベースで使用する WebSphere Commerce 5.4 for Solaris™ オペレーティング環境 (Operating Environment™) ソフトウェアのインストールおよび構成方法について説明しています。対象となる読者は、システム管理者など、インストール作業と構成作業を実行する人です。

WebSphere Commerce Suite バージョン 5.1 がすでにインストールされている場合、*WebSphere Commerce* マイグレーション・ガイド に説明されているマイグレーションのステップに従ってください。この資料は、WebSphere Commerce Web ページの『Technical Libraries』セクションで入手できます。

最終的な製品に対する変更について調べたい場合は、WebSphere Commerce Disk 1 CD のルート・ディレクトリーにある README ファイルを参照してください。さらに、このマニュアルのコピーおよび更新版は、以下の WebSphere Commerce Web サイトの Library → Technical Library セクションから PDF ファイルの形式で入手できます。

- Business Edition:
http://www.ibm.com/software/webservers/commerce/wc_be/lit-tech-general.html
- Professional Edition:
http://www.ibm.com/software/webservers/commerce/wc_pe/lit-tech-general.html

本書の表記規則

本書では以下の強調表示規則を使用します。

- **太文字**は、コマンドまたは、フィールド名、アイコン、メニュー選択などのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) コントロールを示します。
- **モノスペース (monospace)** は、示されているとおりに入力するテキスト例、ファイル名、ディレクトリー・パスおよび名前を示します。
- **イタリック** は、語を強調するために使用します。イタリックは、ご使用のシステムの該当する値に置換しなければならない名前も示します。以下の名前が出てきたら、説明どおりに、ご使用のシステムの値に置換してください。

host_name

WebSphere Commerce Web サーバーの完全修飾ホスト名 (たとえば、`server1.torolab.ibm.com` という完全修飾名)。

instance_name

作業対象の WebSphere Commerce インスタンスの名前。



このアイコンは、ヒント (作業を完了するために役立つ追加情報) を表すマークです。

重要

このセクションは、特に重要な情報を強調しています。

警告

このセクションは、データの保護を目的とした情報に重点を置いています。

デフォルトのインストール・パス

このマニュアルでインストール・パスについて述べられている場合、デフォルトのパス名として次のものを使用します。

/opt/WebSphere/CommerceServer

WebSphere Commerce のインストール・パス

/opt/IBMHTTPD

IBM HTTP Server 1.3.19.1 のインストール・パス

/opt/WebSphere/AppServer

WebSphere Application Server 4.0.2 のインストール・パス

/opt/PaymentManager

IBM WebSphere Payment Manager 3.1.2 のインストール・パス

注: デフォルト・ディレクトリーでは、WebSphere Commerce だけがサポートされています。

WebSphere Commerce に付属する製品

WebSphere Commerce には以下の製品がパッケージされています。

- WebSphere Commerce コンポーネント
 - WebSphere Commerce Server
 - WebSphere Commerce Accelerator
 - WebSphere Catalog Manager
 - WebSphere Commerce 管理コンソール
 - 商品アドバイザー

- Blaze Rules Server および Blaze Innovator Runtime
- Macromedia LikeMinds クライアント
- IBM DB2 ユニバーサル・データベース 7.1.0.55
- IBM DB2 エクステンダー 7.1
- IBM HTTP Server 1.3.19.1
- WebSphere Application Server 4.0.2
- IBM WebSphere Payment Manager 3.1.2。これには、以下のものが含まれます。
 - Payment Manager SET Cassette 3.1.2
 - Payment Manager Cassette for CyberCash 3.1.2
 - Payment Manager Cassette for VisaNet 3.1.2
 - Payment Manager Cassette for BankServACH 3.1.2
- IBM WebSphere Commerce Analyzer 5.4
- Brio Broadcast Server 6.2
- IBM SecureWay Directory Server 3.2.1
- Segue SilkPreview 1.0™
- WebSphere Commerce 5.4 Recommendation Engine powered by LikeMinds™
- QuickPlace 2.9.8
- Sametime 2.5

代替の Web サーバー

WebSphere Commerce に付属している Web サーバーは IBM HTTP Server ですが、iPlanet Web サーバー Enterprise Edition 4.1.8 と、Lotus Domino Web サーバー 5.0.5、5.0.6、および 5.0.8 もサポートされます。

代替のデータベース

WebSphere Commerce とともに提供されているデータベースは IBM DB2 ユニバーサル・データベース 7.1.0.55 エンタープライズ・エディションですが、Oracle Database 8.1.7 Enterprise Edition または Standard Edition (Oracle 8i リリース 3 とも言います) も使用できます。Oracle Database 8.1.7 Enterprise Edition または Standard Edition ではなく DB2 ユニバーサル・データベースを使用する場合、*IBM WebSphere Commerce インストール・ガイド (DB2 ユニバーサル・データベースを使用)* を参照する必要があります。

サポートされている Web ブラウザー

WebSphere Commerce のツールとオンライン・ヘルプにアクセスするには、WebSphere Commerce のマシンと同じネットワーク上にある Windows® オペレーティング・システムを実行しているマシンで、Microsoft® Internet Explorer 5.5 を使用する必要があります (その他の方法でアクセスすることはできません)。Internet Explorer は、5.50.4522.1800 のフル・バージョンのもの (Internet Explorer 5.5 Service Pack 1 およびインターネット・ツール) あるいはそれ以降のもので、Microsoft 社による最新の重要なセキュリティ上の更新がなされているものを使用する必要があります。それより前のバージョンでは、WebSphere Commerce のツールが完全にはサポートされていません。

ショップパーは、以下のいずれかの Web ブラウザーを使用して Web サイトにアクセスできます。これらは、すべて WebSphere Commerce でテスト済みです。

- Netscape Communicator 4.6 以上でサポートされている Netscape Navigator のすべてのバージョン (Netscape Navigator 4.04 および 4.5 を含む)
- Macintosh 用の Netscape Navigator 3.0 および 4.0、またはそれ以降
- Microsoft Internet Explorer 4 および 5 またはそれ以上
- AOL 5 および 6 またはそれ以上

サポートされている構成

WebSphere Commerce とそのコンポーネント、および WebSphere Commerce でサポートされている代替ソフトウェアは、様々な構成でインストールできます。サポートされていて、本書で説明されている構成には、次のものがあります。

単一層構成

この構成では、WebSphere Commerce の全コンポーネントは 1 つのマシンにインストールされます。この構成をインストールするには、Web サーバーごとに概説されているステップを実行する必要があります。

IBM HTTP Server

1. データベースをインストールする (27 ページの『第 3 章 Oracle8i Database のインストールおよび構成』で説明)。このとき、データベース・クライアントをデータベース・サーバーと同じマシンにインストールするようにし、データベースのリモート作成に関する指示に従います。
2. WebSphere Application Server インストール・プログラムで IBM HTTP Server と WebSphere Application Server をインストールする (61 ページの『同じマシンへの WebSphere Application Server と IBM HTTP Server のインストール』に概略されています)。

3. WebSphere Commerce をインストールする (75 ページの『第 8 章 WebSphere Commerce のインストール』で説明)。必ず、wc54efixunix.sh スクリプトを実行してソフトウェア・レベルをアップグレードし、必要なすべてのフィックスを適用してください。
4. Payment Manager をインストールする (79 ページの『第 9 章 IBM WebSphere Payment Manager のインストール』で説明)。
5. 以下のタスクを実行する (87 ページの『第 10 章 構成前のステップ』で説明)。
 - wcpinstall.sh スクリプトの実行
 - Oracle の構成前のステップ
 - WebSphere Application Server の開始
6. WebSphere Commerce インスタンスを作成する (91 ページの『第 11 章 構成マネージャーによるインスタンスの作成または変更』で説明)。
7. 121 ページの『第 12 章 構成後のステップ』の「ローカル Web サーバーでの構成後のステップ」の項に述べられている以下のタスクを完了する。
 - テスト用に SSL を使用可能にする。
 - Payment Manager を WebSphere Commerce と共に作動するように構成する。
 - JavaServer Pages™ ファイルをコンパイルする。

iPlanet Web サーバー

1. データベースをインストールする (27 ページの『第 3 章 Oracle8i Database のインストールおよび構成』で説明)。このとき、データベース・クライアントをデータベース・サーバーと同じマシンにインストールするようにし、データベースのリモート作成に関する指示に従います。
2. iPlanet Web サーバーをインストールする (53 ページの『第 6 章 iPlanet Web サーバーのインストール』で説明)。
3. WebSphere Application Server をインストールする (66 ページの『代替リモート Web サーバーと一緒に使用する WebSphere Application Server のインストール』で説明)。
4. WebSphere Commerce をインストールする (75 ページの『第 8 章 WebSphere Commerce のインストール』で説明)。必ず、wc54efixunix.sh スクリプトを実行してソフトウェア・レベルをアップグレードし、必要なすべてのフィックスを適用してください。
5. Payment Manager をインストールする (79 ページの『第 9 章 IBM WebSphere Payment Manager のインストール』で説明)。
6. 以下のタスクを実行する (87 ページの『第 10 章 構成前のステップ』で説明)。
 - wcpinstall.sh スクリプトの実行
 - Oracle の構成前のステップ
 - WebSphere Application Server の開始

7. WebSphere Commerce インスタンスを作成する (91 ページの『第 11 章 構成マネージャーによるインスタンスの作成または変更』で説明)。
8. 121 ページの『第 12 章 構成後のステップ』の「ローカル Web サーバーでの構成後のステップ」の項に述べられている以下のタスクを完了する。
 - iPlanet Web サーバー構成を完了する。
 - テスト用の SSL を使用可能にする (表示される指示を参考にしてください。Web サーバーの資料に述べられている指示に従って、SSL を使用可能にする必要があります)。
 - Payment Manager を WebSphere Commerce と共に作動するように構成する。
 - JavaServer Pages ファイルをコンパイルする。

Domino Web サーバー

1. データベースをインストールする (27 ページの『第 3 章 Oracle8i Database のインストールおよび構成』で説明)。このとき、データベース・クライアントをデータベース・サーバーと同じマシンにインストールするようにし、データベースのリモート作成に関する指示に従います。
2. Domino Web サーバーをインストールする (47 ページの『第 5 章 Domino Web サーバーのインストール』で説明)。
3. WebSphere Application Server をインストールする (66 ページの『代替リモート Web サーバーと一緒に使用する WebSphere Application Server のインストール』で説明)。
4. WebSphere Commerce をインストールする (75 ページの『第 8 章 WebSphere Commerce のインストール』で説明)。必ず、wc54efixunix.sh スクリプトを実行してソフトウェア・レベルをアップグレードし、必要なすべてのフィックスを適用してください。
5. Payment Manager をインストールする (79 ページの『第 9 章 IBM WebSphere Payment Manager のインストール』で説明)。
6. 以下のタスクを実行する (87 ページの『第 10 章 構成前のステップ』で説明)。
 - wcpinstall.sh スクリプトの実行
 - Domino Web サーバーのファイル許可の変更
 - Oracle の構成前のステップ
 - WebSphere Application Server の開始
7. WebSphere Commerce インスタンスを作成する (91 ページの『第 11 章 構成マネージャーによるインスタンスの作成または変更』で説明)。
8. 121 ページの『第 12 章 構成後のステップ』の「ローカル Web サーバーでの構成後のステップ」の項に述べられている以下のタスクを完了する。
 - Domino Web サーバーの構成を完了する。

- テスト用の SSL を使用可能にする (表示される指示を参考にしてください。Web サーバーの資料に述べられている指示に従って、SSL を使用可能にする必要があります)。
- Payment Manager を WebSphere Commerce と共に作動するように構成する。
- JavaServer Pages ファイルをコンパイルする。

2 層構成:

この構成ではデータベース・サーバーは、他のすべての WebSphere Commerce コンポーネントとは別のマシンにインストールされます。この構成をインストールするには、Web サーバーごとに概説されているステップを実行する必要があります。

IBM HTTP Server

1. データベースをインストールする (27 ページの『第 3 章 Oracle8i Database のインストールおよび構成』で説明)。このとき、データベース・サーバーとは別のマシンにデータベース・クライアントをインストールするようにし、データベースのリモート作成に関する指示に従います。
2. WebSphere Application Server インストール・プログラムで IBM HTTP Server と WebSphere Application Server をインストールする (61 ページの『同じマシンへの WebSphere Application Server と IBM HTTP Server のインストール』に概略されています)。必ず、`wc54wasefixunix.sh` および `wc54jdkfixsun.sh` スクリプトを実行してソフトウェア・レベルをアップグレードし、必要なすべてのフィックスを適用してください。
3. WebSphere Commerce をインストールする (75 ページの『第 8 章 WebSphere Commerce のインストール』で説明)。
4. Payment Manager をインストールする (79 ページの『第 9 章 IBM WebSphere Payment Manager のインストール』で説明)。
5. 以下のタスクを実行する (87 ページの『第 10 章 構成前のステップ』で説明)。
 - `wcpostinstall.sh` スクリプトの実行
 - Oracle の構成前のステップ
 - WebSphere Application Server の開始
6. WebSphere Commerce インスタンスを作成する (91 ページの『第 11 章 構成マネージャーによるインスタンスの作成または変更』で説明)。
7. 121 ページの『第 12 章 構成後のステップ』の「ローカル Web サーバーでの構成後のステップ」の項に述べられている以下のタスクを完了する。
 - テスト用に SSL を使用可能にする。
 - Payment Manager を WebSphere Commerce と共に作動するように構成する。
 - リモート Oracle インストールを完了する。
 - JavaServer Pages ファイルをコンパイルする。

iPlanet Web サーバー

1. データベースをインストールする (27 ページの『第 3 章 Oracle8i Database のインストールおよび構成』で説明)。このとき、データベース・サーバーとは別のマシンにデータベース・クライアントをインストールするようにし、データベースのリモート作成に関する指示に従います。
2. iPlanet Web サーバーをインストールする (53 ページの『第 6 章 iPlanet Web サーバーのインストール』で説明)。
3. WebSphere Application Server インストール・プログラムで IBM HTTP Server と WebSphere Application Server をインストールする (66 ページの『代替リモート Web サーバーと一緒に使用する WebSphere Application Server のインストール』に概略されています)。必ず、wc54wasefixunix.sh および wc54jdkfixsun.sh スクリプトを実行してソフトウェア・レベルをアップグレードし、必要なすべてのフィックスを適用してください。
4. WebSphere Commerce をインストールする (75 ページの『第 8 章 WebSphere Commerce のインストール』で説明)。
5. Payment Manager をインストールする (79 ページの『第 9 章 IBM WebSphere Payment Manager のインストール』で説明)。
6. 以下のタスクを実行する (87 ページの『第 10 章 構成前のステップ』で説明)。
 - wcpinstall.sh スクリプトの実行
 - Oracle の構成前のステップ
 - WebSphere Application Server の開始
7. WebSphere Commerce インスタンスを作成する (91 ページの『第 11 章 構成マネージャーによるインスタンスの作成または変更』で説明)。
8. 121 ページの『第 12 章 構成後のステップ』の「ローカル Web サーバーでの構成後のステップ」の項に述べられている以下のタスクを完了する。
 - iPlanet Web サーバー構成を完了する。
 - テスト用の SSL を使用可能にする (表示される指示を参考にしてください。Web サーバーの資料に述べられている指示に従って、SSL を使用可能にする必要があります)。
 - Payment Manager を WebSphere Commerce と共に作動するように構成する。
 - リモート Oracle インストールを完了する。
 - JavaServer Pages ファイルをコンパイルする。

Domino Web サーバー

1. データベースをインストールする (27 ページの『第 3 章 Oracle8i Database のインストールおよび構成』で説明)。このとき、データベース・サーバーとは別のマシンにデータベース・クライアントをインストールするようにし、データベースのリモート作成に関する指示に従います。
2. Domino Web サーバーをインストールする (47 ページの『第 5 章 Domino Web サーバーのインストール』で説明)。

3. WebSphere Application Server インストール・プログラムで IBM HTTP Server と WebSphere Application Server をインストールする (66 ページの『代替リモート Web サーバーと一緒に使用する WebSphere Application Server のインストール』に概略されています)。必ず、wc54wasefixunix.sh および wc54jdkfixsun.sh スクリプトを実行してソフトウェア・レベルをアップグレードし、必要なすべてのフィックスを適用してください。
4. WebSphere Commerce をインストールする (75 ページの『第 8 章 WebSphere Commerce のインストール』で説明)。
5. Payment Manager をインストールする (79 ページの『第 9 章 IBM WebSphere Payment Manager のインストール』で説明)。
6. 以下のタスクを実行する (87 ページの『第 10 章 構成前のステップ』で説明)。
 - wcpinstall.sh スクリプトの実行
 - Domino Web サーバーのファイル許可の変更
 - Oracle の構成前のステップ
 - WebSphere Application Server の開始
7. WebSphere Commerce インスタンスを作成する (91 ページの『第 11 章 構成マネージャーによるインスタンスの作成または変更』で説明)。
8. 121 ページの『第 12 章 構成後のステップ』の「ローカル Web サーバーでの構成後のステップ」の項に述べられている以下のタスクを完了する。
 - Domino Web サーバーの構成を完了する。
 - テスト用の SSL を使用可能にする (表示される指示を参考にしてください。Web サーバーの資料に述べられている指示に従って、SSL を使用可能にする必要があります)。
 - Payment Manager を WebSphere Commerce と共に作動するように構成する。
 - リモート Oracle インストールを完了する。
 - JavaServer Pages ファイルをコンパイルする。

3 層構成:

この構成では、データベース・サーバーと Web サーバーが、それぞれ WebSphere Commerce サーバーや WebSphere Application Server とは別個のマシンにインストールされます。この構成をインストールするには、Web サーバーごとに概説されているステップを実行する必要があります。

IBM HTTP Server

1. データベースをインストールする (27 ページの『第 3 章 Oracle8i Database のインストールおよび構成』で説明)。このとき、データベース・サーバーとは別のマシンにデータベース・クライアントをインストールするようにし、データベースのリモート作成に関する指示に従います。
2. WebSphere Application Server インストール・プログラムを使って IBM HTTP Server をインストールする (39 ページの『第 4 章 WebSphere Commerce のリモート側で

- の IBM HTTP Server のインストールおよび構成』に概略されています)。必ず、wc54wasefixunix.sh および wc54jdkfixsun.sh スクリプトを実行してソフトウェア・レベルをアップグレードし、必要なすべてのフィックスを適用してください。
3. WebSphere Application Server インストール・プログラムを使って WebSphere Application Server をインストールする (66 ページの『代替リモート Web サーバーと一緒に使用する WebSphere Application Server のインストール』に概略されています)。必ず、wc54wasefixunix.sh および wc54jdkfixsun.sh スクリプトを実行してソフトウェア・レベルをアップグレードし、必要なすべてのフィックスを適用してください。
 4. WebSphere Commerce をインストールする (75 ページの『第 8 章 WebSphere Commerce のインストール』で説明)。
 5. Payment Manager をインストールする (79 ページの『第 9 章 IBM WebSphere Payment Manager のインストール』で説明)。
 6. 以下のタスクを実行する (87 ページの『第 10 章 構成前のステップ』で説明)。
 - wcpinstall.sh スクリプトの実行
 - Oracle の構成前のステップ
 - WebSphere Application Server の開始
 7. WebSphere Commerce インスタンスを作成する (91 ページの『第 11 章 構成マネージャーによるインスタンスの作成または変更』で説明)。
 8. 121 ページの『第 12 章 構成後のステップ』の「リモート Web サーバーでの構成後のステップ」の項に述べられている以下のタスクを完了する。
 - IBM HTTP Server のインストールを完了する。
 - Web サーバーに資産をコピーする。
 - テスト用に SSL を使用可能にする。
 - Payment Manager を WebSphere Commerce と共に作動するように構成する。
 - リモート Oracle インストールを完了する。
 - JavaServer Pages ファイルをコンパイルする。

iPlanet Web サーバー

1. データベースをインストールする (27 ページの『第 3 章 Oracle8i Database のインストールおよび構成』で説明)。このとき、データベース・サーバーとは別のマシンにデータベース・クライアントをインストールするようにし、データベースのリモート作成に関する指示に従います。
2. iPlanet Web サーバーをインストールする (53 ページの『第 6 章 iPlanet Web サーバーのインストール』で説明)。必ず、wc54wasefixunix.sh および wc54jdkfixsun.sh スクリプトを実行してソフトウェア・レベルをアップグレードし、必要なすべてのフィックスを適用してください。
3. WebSphere Application Server インストール・プログラムで IBM HTTP Server と WebSphere Application Server をインストールする (66 ページの『代替リモート

Web サーバーと一緒に使用する WebSphere Application Server のインストール』に概略されています)。必ず、`wc54wasefixunix.sh` および `wc54jdkfixsun.sh` スクリプトを実行してソフトウェア・レベルをアップグレードし、必要なすべてのフィックスを適用してください。

4. WebSphere Commerce をインストールする (75 ページの『第 8 章 WebSphere Commerce のインストール』で説明)。
5. Payment Manager をインストールする (79 ページの『第 9 章 IBM WebSphere Payment Manager のインストール』で説明)。
6. 以下のタスクを実行する (87 ページの『第 10 章 構成前のステップ』で説明)。
 - `wcpostinstall.sh` スクリプトの実行
 - Oracle の構成前のステップ
 - WebSphere Application Server の開始
7. WebSphere Commerce インスタンスを作成する (91 ページの『第 11 章 構成マネージャーによるインスタンスの作成または変更』で説明)。
8. 121 ページの『第 12 章 構成後のステップ』の「リモート Web サーバーでの構成後のステップ」の項に述べられている以下のタスクを完了する。
 - リモート iPlanet Web サーバーを構成する。
 - iPlanet Web サーバー構成を完了する。
 - Web サーバーに資産をコピーする。
 - テスト用の SSL を使用可能にする (表示される指示を参考にしてください。Web サーバーの資料に述べられている指示に従って、SSL を使用可能にする必要があります)。
 - Payment Manager を WebSphere Commerce と共に作動するように構成する。
 - リモート Oracle インストールを完了する。
 - JavaServer Pages ファイルをコンパイルする。

Domino Web サーバー

1. データベースをインストールする (27 ページの『第 3 章 Oracle8i Database のインストールおよび構成』で説明)。このとき、データベース・サーバーとは別のマシンにデータベース・クライアントをインストールするようにし、データベースのリモート作成に関する指示に従います。
2. Domino Web サーバーをインストールする (47 ページの『第 5 章 Domino Web サーバーのインストール』で説明)。必ず、`wc54wasefixunix.sh` および `wc54jdkfixsun.sh` スクリプトを実行してソフトウェア・レベルをアップグレードし、必要なすべてのフィックスを適用してください。
3. WebSphere Application Server インストール・プログラムで IBM HTTP Server と WebSphere Application Server をインストールする (66 ページの『代替リモート Web サーバーと一緒に使用する WebSphere Application Server のインストール』に

概略されています)。必ず、wc54wasefixunix.sh および wc54jdkefixsun.sh スクリプトを実行してソフトウェア・レベルをアップグレードし、必要なすべてのフィックスを適用してください。

4. WebSphere Commerce をインストールする (75 ページの『第 8 章 WebSphere Commerce のインストール』で説明)。
5. Payment Manager をインストールする (79 ページの『第 9 章 IBM WebSphere Payment Manager のインストール』で説明)。
6. 以下のタスクを実行する (87 ページの『第 10 章 構成前のステップ』で説明)。
 - wcpinstall.sh スクリプトの実行
 - Domino Web サーバーのファイル許可の変更
 - Oracle の構成前のステップ
 - WebSphere Application Server の開始
7. WebSphere Commerce インスタンスを作成する (91 ページの『第 11 章 構成マネージャーによるインスタンスの作成または変更』で説明)。
8. 121 ページの『第 12 章 構成後のステップ』の「リモート Web サーバーでの構成後のステップ」の項に述べられている以下のタスクを完了する。
 - Domino Web サーバーの構成を完了する。
 - Web サーバーに資産をコピーする。
 - テスト用の SSL を使用可能にする (表示される指示を参考にしてください。Web サーバーの資料に述べられている指示に従って、SSL を使用可能にする必要があります)。
 - Payment Manager を WebSphere Commerce と共に作動するように構成する。
 - リモート Oracle インストールを完了する。
 - JavaServer Pages ファイルをコンパイルする。

WebSphere Commerce で使用されるポート番号

以下に、WebSphere Commerce またはそのコンポーネント製品によって使用されるデフォルトのポート番号のリストを示します。WebSphere Commerce 以外のアプリケーションでは、これらのポートを使用しないようにしてください。システムにファイアウォールが構成されている場合には、これらのポートがアクセス可能になっていることを確認してください。

ポート番号	使用するソフトウェア
80	IBM HTTP Server 非セキュア Web サーバー
389	Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) Directory Server
443	IBM HTTP Server セキュア Web サーバー
900	WebSphere Application Server ブートストラップ

1099	WebSphere Commerce 構成マネージャー
1521	Oracle Listener (デフォルト)
2222	非ルート・ユーザーとして WebSphere Application Server 管理コンソールにアクセスする際のデフォルト・ポート
8000	WebSphere Commerce Tools
8080	WebSphere Test Environment for VisualAge [®] for Java [™]
8620	Payment Manager Cassette for SET [™]
8888	iPlanet Web サーバー Administration
9000	WebSphere Application Server Location Server
16999	WebSphere Commerce Cache Daemon (デフォルト)

WebSphere Commerce で使用されるロケール

WebSphere Commerce では、有効な Java のロケールだけが使用されます。使用する言語に該当するロケールがシステムにインストールされていることを確認してください。また、ロケールに関係するすべての環境変数には、WebSphere Commerce でサポートされているロケールを含めるようにしてください。WebSphere Commerce でサポートされているロケールのコードは、以下の表に示すとおりです。

言語	ロケール・コード	LC_ALL 値
ドイツ語	de_DE	de_DE.ISO8859-1
英語	en_US	en_US.ISO8859-1
スペイン語	es_ES	es_ES.ISO8859-1
フランス語	fr_FR	fr_FR.ISO8859-1
イタリア語	it_IT	it_IT.ISO8859-1
日本語	ja_JP	ja_JP.eucJP
韓国語	ko_KR	ko_KR.EUC
ポルトガル語 (ブラジル)	pt_BR	pt_BR.ISO8859-1
中国語 (簡体字)	zh_CN	zh_CN.GBK
中国語 (繁体字)	zh_TW	zh_TW.BIG5

ロケールを調べるには、次のコマンドを実行します。

```
echo $LANG
```

使用するロケールがサポートされていない場合には、ルート・ユーザーとして次のコマンドを実行することによって、ロケールのプロパティーを変更してください。

```
LANG=xx_XX
export LANG
```

xx_XX は、上記の表に示されている 4 文字のロケール・コードです。大文字小文字の別は、表のとおりでなければなりません。

ユーザー ID、パスワード、および Web アドレスの早見表

WebSphere Commerce 環境での管理には、さまざまなユーザー ID が必要です。それらのユーザー ID と、それに必要な権限のリストを、次の表に示します。WebSphere Commerce のユーザー ID に対して、デフォルトのパスワードが識別されます。

構成マネージャーのユーザー ID

構成マネージャー・ツールのグラフィカル・インターフェースを使用すれば、WebSphere Commerce の構成方法を変更できます。構成マネージャーのデフォルト・ユーザー ID およびパスワードは、webadmin および webibm です。構成マネージャーには、WebSphere Commerce マシンから、または WebSphere Commerce と同じネットワーク上の任意のマシンからアクセスできます。

IBM HTTP Server のユーザー ID

IBM HTTP Server を使用する場合、Web サーバーのホーム・ページには、Web ブラウザーをオープンし、以下の Web アドレスを入力することによってアクセスできます。

```
http://host_name
```

Web サーバーをカスタマイズした場合、ホスト名の後に Web サーバーのフロントページの名前を入力する必要があります。

WebSphere Commerce インスタンス管理者

インスタンス管理者のユーザー ID とパスワードは、以下の WebSphere Commerce ツールに適用されます。

- WebSphere Commerce Accelerator。Windows オペレーティング・システムが実行されているリモート・マシンから WebSphere Commerce Accelerator にアクセスするには、Internet Explorer Web ブラウザーを開いてから、以下の Web アドレスを入力します。

```
https://host_name:8000/accelerator
```

- WebSphere Commerce 管理コンソール。Windows オペレーティング・システムが実行されているリモート・マシンから WebSphere Commerce 管理コンソールにアクセスするには、Internet Explorer Web ブラウザーを開いてから、以下の Web アドレスを入力します。

```
https://host_name:8000/adminconsole
```

- ストア・サービス。ストア・サービスのページには、Web ブラウザーをオープンし、以下の Web アドレスを入力することによってアクセスできます。

`https://host_name:8000/storeservices`

- 組織管理コンソール。組織管理コンソールには、Web ブラウザーをオープンし、以下の Web アドレスを入力することによってアクセスできます。

`https://host_name/orgadminconsole`

インスタンス管理者のデフォルト・ユーザー ID は `wcsadmin`、デフォルト・パスワードは `wcsadmin` です。

注: `wcsadmin` ユーザー ID は、決して削除しないでください。また、それには常にインスタンス管理者の権限が付与されていなければなりません。

WebSphere Commerce では、ユーザー ID とパスワードが次の規則になっていることが必要です。

- パスワードの長さは最低 8 文字。
- パスワードには、少なくとも 1 つの数字が含まれなければなりません。
- パスワードには、同じ文字が 4 回を超えて出現してはなりません。
- パスワードには、同じ文字を 3 回を超えて繰り返すことはできません。

Payment Manager 管理者

Payment Manager をインストールすると、WebSphere Commerce 管理者 ID `wcsadmin` に Payment Manager 管理者役割が自動的に割り当てられます。Payment Manager の Realm Class を `WCSRealm` にまだ切り替えていない場合、これを行うには、79 ページの『第 9 章 IBM WebSphere Payment Manager のインストール』の指示に従ってください。

Payment Manager 管理者役割が割り当てられているユーザー ID では、Payment Manager の制御と管理が可能です。

第 2 章 インストール前の要件

この章では、WebSphere Commerce をインストールする前に行う必要のあるステップについて説明します。ここで説明されているステップを実行するには、root ユーザー・アクセスが必要です。

知識に関する要件

WebSphere Commerce をインストールおよび構成するには、以下のことに関する知識が必要です。

- 使用するオペレーティング・システム
- インターネット
- Web サーバーの運用と保守
- Oracle データベース
- オペレーティング・システムの基本的なコマンド

ストアまたはモールを作成しカスタマイズするには、以下のことに関する知識が必要です。

- WebSphere Application Server
- Oracle データベース
- HTML および XML
- 構造化照会言語 (SQL)
- Java のプログラミング

ストアまたはモールをカスタマイズする方法の詳細については、*WebSphere Commerce プログラマーズ・ガイド* を参照してください。WebSphere Commerce と WebSphere Commerce Studio には、いずれもこれらのマニュアルのコピーが付属しています。

Oracle の知識

このセクションでは、Oracle を WebSphere Commerce とともに使用する前に知っておく必要のある Oracle の重要な概念のいくつかを扱っています。これらの概念に関する情報は、Oracle システムに付属している *Oracle 8i Concepts* の資料で見つけることができます。Oracle システムのインストールとセットアップを行う前に、Oracle の製品に付属している Oracle 資料 (特に、概念、管理、およびインストールに関する情報) をお読みになり、理解しておくことをお勧めします。

Oracle システムを WebSphere Commerce とともに動作するよう構成する前に理解しておく必要のある概念として、以下の事柄があります。

- Oracle インスタンス
- データベース構造およびスペース管理。これには、以下のものが含まれます。
 - 論理データベース構造
 - 表スペース
 - スキーマおよびスキーマ・オブジェクト
 - データ・ブロック、エクステンツ、およびセグメント
 - 物理データベース構造
 - データ・ファイル
 - 再実行ログ・ファイル
 - 制御ファイル
- 構造化照会言語 (SQL)
- メモリー構造および処理
 - システム・グローバル域 (SGA)
 - プログラム・グローバル域 (PGA)
 - サーバーおよびバックグラウンド・プロセスを含む、Oracle プロセス・アーキテクチャー
- 通信ソフトウェアおよび Net8
- プログラム・インターフェース
- データベース管理者のユーザー名
 - SYS
 - SYSTEM
- システム ID (SID)
- データベース、表スペース、およびデータ・ファイル
 - SYSTEM 表スペース
 - 複数の表スペースの使用
 - 表スペース内のスペース管理
 - オンラインおよびオフラインの表スペース
 - 一時表スペース
 - データ・ファイル

前提条件となるハードウェア

WebSphere Commerce 5.4 をインストールする前に、以下の最低のハードウェア要件を満たしていることを確認しておかなければなりません。

- Solaris 8 Operating Environment (SPARC プラットフォーム版) ソフトウェアをサポートするプロセッサ (Sun SPARC または UltraSPARC ステーションなど) で、以下の仕様のもの。
 - 400 MHz のプロセッサ。
 - プロセッサ当たり 1GB 以上のランダム・アクセス・メモリー (RAM)。
 - それぞれの WebSphere Commerce インスタンスごとに、追加の 512 MB の RAM。
 - 必須コンポーネントとオプション・コンポーネントのすべてをインストールする場合は、6 GB 以上の空きディスク・スペース (以下のような、推奨されるファイル・サイズの割り振りを含みます)。
 - /opt: 4 GB
 - /export: 1 GB
 - 一時ディレクトリ: 1 GB
 - プロセッサ当たり 1 GB 以上のスワップ・スペース。
 - TCP/IP プロトコル・スタックを使用してネットワーク接続を確立する通信ハードウェア・アダプター。
 - CD-ROM ドライブ。
 - グラフィックス表示可能モニター。

注: WebSphere Commerce において、Solaris 8 Operating Environment (Intel プラットフォーム版) ソフトウェア はサポートされていません。

前提条件となるソフトウェア

WebSphere Commerce をインストールする前に、以下の最低のソフトウェア要件を満たしていることを確認しておかなければなりません。

- システムに Web ブラウザーがインストール済みであることを確認してください。
- WebSphere Commerce は、32 ビット・モードでのみサポートされています。64 ビット・モードは使用されていません。また、64 ビット・システムにおける 32 ビット互換モードの使用はテストされていません。
- Solaris 8 Operating Environment (SPARC プラットフォーム版) ソフトウェア がメンテナンス更新 5 (MU5) 以上で、最新の Solaris パッチ・クラスタを適用していることを確認してください。
- 以下の Solaris パッチで、示されているレベル以上のものがインストールされていることが必要です。
 - 108940-14
 - 108652-27
 - 108921-11

- 108434-01
- 109147-06
- 108827-01

パッチ・レベルは、`showrev -p` コマンドを使うことによって確認できます。
`showrev -p` コマンドの使用方法については、Solaris の資料をご覧ください。

Solaris カーネル構成パラメーターの更新

重要

Solaris カーネル・ファイルのパラメーターは、以下の図のように設定しなければなりません。複数層の構成を使用している場合、すべてのマシンでそれらのパラメーターが設定されていなければなりません。

Solaris カーネル・ファイル・パラメーターの設定を完了したら、変更内容を有効化するためにマシンを再起動する必要があります。

ユーザー ID `root` としてログインし、テキスト・エディターを使用して、Solaris カーネル・ファイル `/etc/system` に以下のパラメーターを追加してください。カーネル・パラメーターを設定するには、ファイル `/etc/system` の末尾に次のような行を追加します。

```
set parameter-name=value
```

カーネル・ファイルに入力するステートメントでは、末尾にスペースを入力しないようにしてください。システムに適用される構成に基づいて、以下のパラメーターの値を選択してください。

表 1. Solaris カーネル構成パラメーター (推奨値)

カーネル構成 パラメーター	物理メモリー			
	64 MB ~ 128 MB	128 MB ~ 256 MB	256 MB ~ 512 MB	512 MB+
<code>msgsys:msginfo_msgmax</code>	65535 (1)	65535 (1)	65535 (1)	65535 (1)
<code>msgsys:msginfo_msgmnb</code>	65535 (1)	65535 (1)	65535 (1)	65535 (1)
<code>msgsys:msginfo_msgmap</code>	130	258	258	258
<code>msgsys:msginfo_msgmni</code>	128	256	256	256
<code>msgsys:msginfo_msgssz</code>	16	16	16	16
<code>msgsys:msginfo_msqtql</code>	256	512	1024	1024
<code>msgsys:msginfo_msgseg</code>	8192	16384	32767 (2)	32767 (2)

表 1. Solaris カーネル構成パラメーター (推奨値) (続き)

カーネル構成 パラメーター	物理メモリー			
	64 MB ~ 128 MB	128 MB ~ 256 MB	256 MB ~ 512 MB	512 MB+
shmsys:shminfo_shmmax	134217728 (3)	268435456(3)	536870912(3)	4294967295(3)
shmsys:shminfo_shmseg	16	16	16	16
shmsys:shminfo_shmmni	256	256	256	256
semsys:seminfo_semmni	300	300	300	300
semsys:seminfo_semmsl	250	250	250	250
semsys:seminfo_semmns	256	512	1024	2048
semsys:seminfo_semopm	200	200	200	200
semsys:seminfo_seminfo	32767	32767	32767	32767

上記の値は、Oracle および Payment Manager の場合の必要最低限の値です。上記の値以上にしてもかまいません。

注:

1. msgsys:msginfo_msgmnb と msgsys:msginfo_msgmax の 2 つのパラメーターは、65535 以上に設定しなければなりません。
2. msgsys:msginfo_msgseg パラメーターは、32767 以下に設定しなければなりません。
3. パラメーター shmsys:shminfo_shmmax は、上記の表に示される推奨値か物理メモリーのバイト数の 200 % のうち、高い方の値を設定してください。たとえば、システムの物理メモリーが 256 MB の場合、パラメーター shmsys:shminfo_shmmax を 536870912 (つまり 256*1024*1024*2) に設定します。

注: Solaris カーネル・パラメーターを更新した後、マシンを再起動してください。

その他の要件

さらに、以下のことを実行する必要があります。

1. マシン上でロータス ノーツ (Lotus® Notes™) などのサーバーが実行されている場合には、そのサーバーを停止します。現在ポート 80、ポート 443、またはポート 8000 を使用している Web サーバーがマシン上にあれば無効にしてください。
2. WebSphere Commerce では IP アドレスとホスト名の両方が使用されるため、システムの IP アドレスがホスト名に対応付けされていなければなりません。IP アドレスを判別するには、コマンド・ウィンドウを開いて次のように入力します。

```
nslookup host_name
```

正しい IP アドレスで応答があれば、正常に設定されています。

3. IBM HTTP Server を Web サーバーとして使用する場合には、Web サーバーのホスト名中に下線 (_) を使用しないようにしてください。IBM HTTP Server は、ホスト名中に下線を使用したマシンをサポートしていません。

インストール前の要件のチェック

WebSphere Commerce Disk 2 CD には、システムをチェックして適切なオペレーティング・システム、前提条件ソフトウェア、プリインストール・ソフトウェアが実装されているかどうかを判別するスクリプトが入っています。インストールを開始する前にこのスクリプトを実行して、システムが WebSphere Commerce のすべての必要を満たしているかどうかを判別する必要があります。また、インストールの様々な時点でこのスクリプトを実行して、ソフトウェア・パッケージが適正にインストールされていることを確認することもできます。

このスクリプトを実行するには、以下のステップを実行します。

1. ユーザー ID root でログオンします。
2. 必要であれば、WebSphere Commerce Disk 2 CD をマウントします。これを行うには、以下を入力します。

```
mount CDROM_dir
```

CDROM_dir は、マウントされた CD として指定するディレクトリーです。

3. CD の *Software_Patches* ディレクトリーに移動します。
4. 以下のように入力して、スクリプトを実行します。

```
./wc54sunpreq.sh
```

第 2 部 Oracle8i Database のインストール

WebSphere Commerce は、DB2[®] データベースと Oracle データベースをサポートします。本書は、Oracle データベースとともに WebSphere Commerce をインストールする方法を説明しています。DB2 とともに WebSphere Commerce をインストールする場合の情報は、*WebSphere Commerce for Solaris* オペレーティング環境ソフトウェア インストール・ガイド (DB2 ユニバーサル・データベースを使用) を参照してください。他の WebSphere Commerce コンポーネントをインストールする前に、データベースをインストールする必要があります。データベースは、他の WebSphere Commerce コンポーネントと同じマシン上にインストールしても、またはリモート・マシンにインストールしてもかまいません。インストールするデータベースに該当する章を選択し、37 ページの『第 3 部 Web サーバーのインストール』に進んでください。

- 27 ページの『第 3 章 Oracle8i Database のインストールおよび構成』

第 3 章 Oracle8i Database のインストールおよび構成

この章では、Oracle8i Database を使用した WebSphere Commerce データベース・スキーマの作成について説明します。Oracle8i Database のインストールの詳細については説明していません。

注:

1. WebSphere Commerce 5.4 は、Oracle Database 8.1.7.2.0 Enterprise Edition または Standard Edition のみをサポートします。Oracle のレベルを 8.1.7 から 8.1.7.2.0 に上げるために必要なパッチは、以下のロケーションにあります。
`ftp://oracle-ftp.oracle.com/server/patchsets/`
2. この章の解説を活用するには、Oracle の高度な知識 (DBA レベル) が必要です。
3. Oracle について詳しくは、<http://www.oracle.com> にアクセスしてください。
<http://docs.oracle.com> からは、Oracle 資料のコピーを入手できます。Oracle ソフトウェアを入手する方法については、<http://technet.oracle.com> を参照してください。Oracle のインストールと構成に関するこの章の情報は、ガイドラインにすぎません。
4. Oracle の用語や概念について詳しくは、Oracle 製品に付属の *Oracle 8i Concepts* を参照してください。

Oracle8i Database のインストール

データベース管理システムとして DB2 の代わりに Oracle を使用する場合は、以下のステップを実行する必要があります。

1. Oracle のインストール時にカスタム・インストールを選択し、Oracle CD-ROM から以下の Oracle 製品をインストールします (推奨)。
 - 単一マシン上での 1 層式 Oracle インストールの場合:
 - Net8
 - Oracle8 Enterprise Server
 - Oracle UNIX[®] Installer
 - SQL*Plus
 - TCP/IP Protocol Adapter
 - JDBC[™] Thin Driver
 - JDBC/OCI Driver
 - 2 層式または 3 層式インストールにおける Oracle サーバー・マシンの場合:
 - Net8

- Oracle8 Enterprise Server
- Oracle UNIX Installer
- SQL*Plus
- TCP/IP Protocol Adapter
- JDBC Thin Driver
- JDBC/OCI Driver
- 2 層式または 3 層式インストールにおける Oracle クライアント (WebSphere Commerce サーバー) マシンの場合:
 - Oracle8 Enterprise Client
 - SQL*Plus
 - JDBC Thin Driver
 - JDBC/OCI Driver

インストール可能なオプションのコンポーネントが多数あります。オプションの項目のいずれかが必要かどうかを調べるには、Oracle インストール資料を参照するか、DBA にご相談ください。

注: パフォーマンス上の理由で、インストールの際に「Dedicated Server (専用サーバー)」オプションを選択するようお勧めします。

2. Oracle データベースを残りの WebSphere Commerce からリモート・インストールする場合は、WebSphere Commerce マシン上に Oracle クライアントをインストールする必要があります。

WebSphere Application Server、WebSphere Commerce、および WebSphere Payment Manager 用のデータベースの作成

WebSphere Application Server、WebSphere Commerce、および Payment Manager で使用するデータベースを作成します。それぞれのアプリケーションで独自のデータベースを使用するか、またはデータベースを共用することができます。作成するデータベースの数は、システムや要件によって異なります。データベースを共用するには、以下のステップで表スペースを作成する際に、同じデータベース SID に接続してください。

WebSphere Application Server、WebSphere Commerce、および Payment Manager で使用するすべてのデータベースには、以下のことが求められます。

- UTF-8 文字セットを使用する必要があります。
- 互換性パラメーターが 8.1.0 に設定されている必要があります。

WebSphere Application Server、WebSphere Commerce、および Payment Manager で使用するすべての開発用データベースに推奨される設定値を以下に示します。

- 共用プール・サイズ: 67108864

- ブロック・バッファ数: 16384
- ブロック・サイズ: 4096
- Cursor_sharing (カーソル共用): force (強制)

WebSphere Application Server、WebSphere Commerce、および Payment Manager で使用するすべての実動用データベースに推奨される設定値を以下に示します。

- チェックポイント間隔: 10000000
- 共用プール・サイズ: 67108864
- ブロック・バッファ数: 16384
- ログ・バッファ・サイズ: 524288
- ブロック・サイズ: 4096
- プロセス数: 150
- 再実行ログ・ファイル・サイズ: 10MB

注:

1. 命名規則と文字制限に関する情報については、Oracle の資料を参照してください。
2. このステップで作成する各データベース・インスタンスについて、Oracle システム ID (SID) をメモしておいてください。これらの SID は後のステップで必要になります。
3. WebSphere Commerce データベースのグローバル・データベース名と Oracle システム ID (SID) は、同じであるか、*SID.domain_name* の形式でなければなりません。ここで、*domain_name* は、Oracle サーバーの完全修飾ドメイン・ネームです。
4. データベースを作成すると、Oracle では各データベースごとに、*init.SID* または *initSID.ora* というファイルが、ディレクトリー \$ORACLE_BASE/admin/SID/pfile に作成されます。*init.SID* は最初に作成したデータベースについて作成され、*initSID.ora* はそれ以降に作成した各データベースについて作成されます。

WebSphere Application Server、WebSphere Commerce、および WebSphere Payment Manager 用の表スペースの作成

WebSphere Commerce 用のユーザー ID および表スペースの作成

WebSphere Commerce の Oracle ユーザー ID と WebSphere Commerce 用の表スペースを作成します。以下のステップで示されている設定は、提案にすぎません。ご使用の WebSphere Commerce インストールに必要な設定は、ここで使用されているものとは異なる場合があります。

このステップの一部になっているコマンドでは、以下の変数が使用されます。

full_path_to_wc_datafile

WebSphere Commerce データベースのデータ・ファイルへの完全修飾パス。新しいデータ・ファイルを作成するには、この値を単一引用符で囲まなければなりません。

wc_password

WebSphere Commerce Oracle ユーザーが使用するパスワード。このパスワードは、すべての Oracle パスワード規則とすべての WebSphere Commerce パスワード規則に従っていなければなりません。

wc_SID このユーザーと表スペースを使用する WebSphere Commerce データベース・インスタンスの Oracle システム ID (SID)。

wc_tablespace

データベース内に作成する WebSphere Commerce 表スペースの名前。

wc_user_ID

WebSphere Commerce Oracle ユーザーに割り当てる ID。

1. Oracle DBA アカウントにログインし、ターミナル・ウィンドウで以下のコマンドを実行して、SQL*Plus セッションを開始します。

```
sqlplus system/system_password@wc_SID
```

以下のステップで示されているコマンドはすべて、この SQL*Plus セッション内で実行されます。

2. 以下のコマンドを実行して、WebSphere Commerce 表スペースを作成します。

```
CREATE TABLESPACE wc_tablespace
  DATAFILE full_path_to_wc_datafile
  SIZE 4M
  REUSE
  AUTOEXTEND ON NEXT 2M
  MAXSIZE UNLIMITED;
```

3. 以下のコマンドを実行して、WebSphere Commerce Oracle ユーザーを作成します。

```
CREATE USER wc_user_ID
  IDENTIFIED BY wc_password
  DEFAULT TABLESPACE wc_tablespace
  QUOTA UNLIMITED ON wc_tablespace;
```

4. 以下のコマンドを実行して、作成した WebSphere Commerce Oracle ユーザーに特権を付与します。

```
GRANT create procedure to wc_user_ID;
GRANT create sequence to wc_user_ID;
GRANT create session to wc_user_ID;
GRANT create synonym to wc_user_ID;
GRANT create table to wc_user_ID;
GRANT create trigger to wc_user_ID;
```

```
GRANT create view to wc_user_ID;  
GRANT unlimited tablespace to wc_user_ID;  
GRANT create materialized view to wc_user_ID;  
GRANT query rewrite to wc_user_ID;
```

WebSphere Application Server *ejsadmin* ユーザー用のユーザー ID および表スペースの作成

WebSphere Application Server *ejsadmin* ユーザー用の Oracle ユーザー ID と、WebSphere Application Server 用の表スペースを作成します。以下のステップで示されている設定は、提案にすぎません。ご使用の WebSphere Commerce インストールに必要な設定は、ここで使用されているものとは異なる場合があります。

このステップの一部になっているコマンドでは、以下の変数が使用されます。

full_path_to_was_datafile

WebSphere Application Server データベースのデータ・ファイルへの完全修飾パス。

ejsadmin_password

WebSphere Application Server *ejsadmin* Oracle ユーザーが使用するパスワード。このパスワードは、すべての Oracle パスワード規則とすべての WebSphere Application Server パスワード規則に従っていなければなりません。

was_SID

このユーザーと表スペースを使用する WebSphere Application Server データベース・インスタンスの Oracle システム ID (SID)。

was_tablespace

作成しようとしている WebSphere Application Server 表スペースの名前。本書で使用されているデフォルトの表スペース名は *WAS* です。

1. Oracle DBA アカウントにログインし、ターミナル・ウィンドウで以下のコマンドを実行して、SQL*Plus セッションを開始します。

```
sqlplus system/system_password@was_SID
```

以下のステップで示されているコマンドはすべて、この SQL*Plus セッション内で実行されます。

2. 以下のコマンドを実行して、WebSphere Application Server 表スペースを作成します。

```
CREATE TABLESPACE was_tablespace  
  DATAFILE full_path_to_was_datafile  
  SIZE 4M  
  REUSE  
  AUTOEXTEND ON NEXT 2M  
  MAXSIZE UNLIMITED;
```

3. 以下のコマンドを実行して、WebSphere Application Server *EJSADMIN* Oracle ユーザーを作成します。

```
CREATE USER ejadmin
  IDENTIFIED BY ejadmin_password
  DEFAULT TABLESPACE was_tablespace
  QUOTA UNLIMITED ON was_tablespace;
```

4. 以下のコマンドを実行して、作成した WebSphere Application Server Oracle ユーザーに特権を付与します。

```
GRANT dba, connect, resource TO ejadmin;
```

WebSphere Application Server *ejb* ユーザー用のユーザー ID の作成

WebSphere Application Server *ejb* ユーザー用の Oracle ユーザー ID を作成します。以下のステップで示されている設定は、提案にすぎません。ご使用の WebSphere Commerce インストールに必要な設定は、ここで使用されているものとは異なる場合があります。

このステップの一部になっているコマンドでは、以下の変数が使用されます。

ejb_password

WebSphere Application Server *ejb* Oracle ユーザーが使用するパスワード。このパスワードは、すべての Oracle パスワード規則とすべての WebSphere Application Server パスワード規則に従っていなければなりません。パスワードの作成規則については、Oracle の資料を参照してください。

was_SID

このユーザーと表スペースを使用する WebSphere Application Server データベース・インスタンスの Oracle システム ID (SID)。

was_tablespace

以前に作成した WebSphere Application Server 表スペースの名前。

1. Oracle DBA アカウントにログインし、ターミナル・ウィンドウで以下のコマンドを実行して、SQL*Plus セッションを開始します。

```
sqlplus system/system_password@was_SID
```

以下のステップで示されているコマンドはすべて、この SQL*Plus セッション内で実行されます。

2. 以下のコマンドを実行して、WebSphere Application Server *ejb* Oracle ユーザーを作成します。

```
CREATE USER ejb
  IDENTIFIED BY ejb_password
  DEFAULT TABLESPACE was_tablespace
  QUOTA UNLIMITED ON was_tablespace;
```

3. 以下のコマンドを実行して、作成した WebSphere Application Server *ejb* Oracle ユーザーに特権を付与します。

```
GRANT connect, resource TO ejb;
```


Payment Manager 用のユーザー ID および表スペースの作成

WebSphere Payment Manager Oracle ユーザー ID と、WebSphere Payment Manager 用の表スペースを作成します。以下のステップで示されている設定は、提案にすぎません。ご使用の WebSphere Commerce インストールに必要な設定は、ここで使用されているものとは異なる場合があります。

このステップの一部になっているコマンドでは、以下の変数が使用されます。

full_path_to_wpm_datafile

Payment Manager データベースのデータ・ファイルへの完全修飾パス。単一引用符で囲みます。

wpm_password

WebSphere™ Payment Manager Oracle ユーザーが使用するパスワード。このパスワードは、すべての Oracle パスワード規則とすべての WebSphere Payment Manager パスワード規則に従っていなければなりません。

wpm_SID

このユーザーと表スペースを使用する WebSphere Payment Manager データベース・インスタンスの Oracle システム ID (SID)。

wpm_tablespace

データベース内に作成する WebSphere Payment Manager 表スペースの名前。

wpm_user_ID

WebSphere Payment Manager Oracle ユーザーに割り当てる ID。

1. Oracle DBA アカウントにログインし、ターミナル・ウィンドウで以下のコマンドを実行して、SQL*Plus セッションを開始します。

```
sqlplus system/system_password@wpm_SID
```

以下のステップで示されているコマンドはすべて、この SQL*Plus セッション内で実行されます。

2. 以下のコマンドを実行して、WebSphere Payment Manager 表スペースを作成します。

```
CREATE TABLESPACE wpm_tablespace  
  DATAFILE full_path_to_wpm_datafile  
  SIZE 4M  
  REUSE  
  AUTOEXTEND ON NEXT 2M  
  MAXSIZE UNLIMITED;
```

3. 以下のコマンドを実行して、WebSphere Payment Manager Oracle ユーザーを作成します。

```
CREATE USER wpm_user_ID  
  IDENTIFIED BY wpm_password  
  DEFAULT TABLESPACE wpm_tablespace  
  QUOTA UNLIMITED ON wpm_tablespace;
```

4. 以下のコマンドを実行して、作成した WebSphere Oracle Payment Manager ユーザーに特権を付与します。

```
GRANT connect, resource TO wpm_user_ID;
```

***initSID.ora* ファイルの変更**

作成した WebSphere Commerce SID ごとに、*initSID.ora* ファイルを以下のように変更します。ここで、*SID* はデータベースの Oracle システム ID (SID) です。

1. `$ORACLE_BASE/admin/SID/pfile` ディレクトリーに移動します。ここで、*SID* はデータベースの Oracle システム ID (SID) です (たとえば *wcs*)。ディレクトリーを見つけれない場合は、`$ORACLE_HOME/dbs` を調べてください。
2. *initSID.ora* ファイルをテキスト・エディターでオープンします。ここで、*SID* は、データベースの Oracle システム ID (SID) です。たとえば、WebSphere Commerce サーバー・データベースの *SID* が *wcs* である場合は、ファイル *initwcs.ora* をテキスト・エディターでオープンします。
3. Oracle8i Database 初期設定ファイル内の `cursor_sharing` を `force` に設定します。
4. Oracle8i Database 初期設定ファイル内の `open_cursors` を `1000` に設定します。
5. データベースを停止してから再始動すると、変更が有効になります。

Oracle8i Database インストールのテスト

Oracle をインストールしたら、Oracle データベースに正しく接続できるはずです。以下のようにしてこれをテストします。

注: 1 層構成の場合、Oracle クライアントと Oracle サーバーは同じマシンです。

1. Oracle サーバーで、ターミナル・ウィンドウに以下のコマンドを入力して、Oracle リスナーを始動します。

```
su - oracle
lsnrctl
start
quit
```

2. Oracle サーバーで、ターミナル・ウィンドウに以下のコマンドを入力して、Oracle インスタンスを始動します。

```
su - oracle
svrmgrl
connect internal
startup
quit
```

3. Oracle クライアントで、ターミナル・ウィンドウに以下のコマンドを入力します。

```
su - oracle
sqlplus wcs_user_ID/wcs_password@wcs_SID
sqlplus ejadmin/ejadmin_password@was_SID
sqlplus ejb/ejb_password@was_SID
sqlplus wpm_user_ID/wpm_password@wpm_SID
```

次のステップ

Oracle8i Database のインストールと構成を完了したら、Web サーバーをインストールして、インストール・プロセスを継続できます。37 ページの『第 3 部 Web サーバーのインストール』で示されている指示に従って、次に進んでください。

第 3 部 Web サーバーのインストール

WebSphere Commerce は、Web サーバーとして IBM HTTP Server、Domino Web サーバー、または iPlanet Web サーバーをサポートしています。Web サーバーは、他の WebSphere Commerce コンポーネントと同じマシン上にインストールしても、またはリモート・マシンにインストールしてもかまいません。

IBM HTTP Server を WebSphere Commerce と同じマシンにインストールする場合は、59 ページの『第 4 部 必要な WebSphere Commerce コンポーネントのインストール』に進んでください。

IBM HTTP Server を WebSphere Commerce からリモートの位置にインストールする場合や、Web サーバーとして Domino Web サーバーや iPlanet Web サーバーを使用する場合は、他の WebSphere Commerce コンポーネントをインストールする前に、該当する章に書かれている作業を行う必要があります。以下の章の説明に従って Web サーバーをインストールし、59 ページの『第 4 部 必要な WebSphere Commerce コンポーネントのインストール』に進んでください。

- 39 ページの『第 4 章 WebSphere Commerce のリモート側での IBM HTTP Server のインストールおよび構成』
- 47 ページの『第 5 章 Domino Web サーバーのインストール』
- 53 ページの『第 6 章 iPlanet Web サーバーのインストール』

第 4 章 WebSphere Commerce のリモート側での IBM HTTP Server のインストールおよび構成

この章では、WebSphere Commerce のリモート側に IBM HTTP Server 1.3.19.1 をインストールする方法を説明します。IBM HTTP Server を WebSphere Application Server や WebSphere Commerce と同じマシンにインストールする場合は、WebSphere Application Server のインストール・プログラムを通して IBM HTTP Server をインストールできます。59 ページの『第 4 部 必要な WebSphere Commerce コンポーネントのインストール』に進んでください。

この章のステップを実行するには、WebSphere Application Server, Advanced Edition CD が必要です。

インストール手順

IBM HTTP Server 1.3.19.1 をインストールするには、以下のようにします。

1. IBM HTTP Server をインストールするマシンのホスト名に下線文字 (_) が含まれていないことを確認します。IBM HTTP Server は、下線を含むホスト名はサポートしていません。
2. ユーザー ID root でログインします。
3. 必要であれば、WebSphere Application Server, Advanced Edition CD をマウントします。これを行うには、以下を入力します。

```
mount CDROM_dir
```

CDROM_dir は、マウントされた CD として指定するディレクトリーです。

4. コマンド行で以下を入力して、CD-ROM のインストール・ディレクトリーに移動します。

```
cd /CDROM_dir/sun
```

CDROM_dir は、CD-ROM がマウントされているディレクトリーです。

5. 次のコマンドを入力してインストール・プログラムを開始します。

```
./install.sh
```

6. 「Welcome to the IBM WebSphere Application Server Setup program (WebSphere Application Server のセットアップ・プログラムへようこそ)」ダイアログ・ボックスがオープンします。「次へ」をクリックして続行します。

7. 「Prerequisites Check (前提条件検査)」ウィンドウがオープンします。 WebSphere Application Server のインストール用の正しい前提条件製品があることを確認してから、「OK」をクリックします。
8. 「Install Options (インストール・オプション)」ダイアログ・ボックスがオープンします。「**Custom Installation (カスタム・インストール)**」を選択してから、「次へ」をクリックします。
9. 「Choose Application Server Components (Application Server コンポーネントの選択)」パネルが表示されます。以下のパッケージを選択します。
 - IBM HTTP Server 1.3.19
 - Web Server Pluginsすべてのパッケージを選択し終わったら、「次へ」をクリックします。
10. 「WebSphere plug-ins (WebSphere プラグイン)」パネルが表示されます。 IBM HTTP Server 用のプラグインを選択し、「次へ」をクリックします。
11. 「Select Destination Directory (宛先ディレクトリーの選択)」ダイアログがオープンします。「次へ」をクリックして続行します。
12. 「Install Options Selected (選択済みのインストール・オプション)」ダイアログ・ボックスがオープンします。表示内容が正しいことを確認してから「**Install (インストール)**」をクリックし、インストールを完了します。
13. 「Location of Configuration files (構成ファイルのロケーション)」ダイアログ・ボックスが開き、指定された Web サーバー構成ファイルへの絶対パス名 (/opt/IBMHTTPD/conf/httpd.conf) を入力するよう促すプロンプトが出されます。

重要:

この情報を入力する前に、別のコマンド・ウィンドウをオープンして、以下のコマンドを入力してください。

```
cd /opt/IBMHTTPD/conf
mv httpd.conf httpd.conf.orig
cp httpd.conf.sample httpd.conf
```

Web サーバー構成ファイルを入力して、「次へ」をクリックします。

14. 「Setup Complete (セットアップの完了)」ダイアログ・ボックスがオープンします。 README ファイルを見るには、「Yes, I want to view the ReadMe File (はい。README ファイルを読みます)」が選択されていることを確認してから、「**Finish (終了)**」をクリックします。これで、デフォルトのブラウザ・ウィンドウに README ファイルが表示されます。

IBM HTTP Server 管理者用パスワードの作成

管理サーバーは、すべての構成フォームを含むディレクトリーに対して認証が使用可能になった状態でインストールされます。つまり、管理サーバーは、インストールの後、ユーザー ID とパスワードが入力されなければページをサービスしません。これは、IBM HTTP Server と管理サーバーが正常にインストールされた直後の無許可アクセスから IBM HTTP Server の構成ファイルを保護することを目的としたものです。インストール時には、パスワード・ファイル (admin.passwd) が「空」になっているので、管理サーバー・パスワード・ファイル (admin.passwd) にユーザー ID とパスワードを入力するまでは、管理サーバーから IBM HTTP Server の構成ページにアクセスすることはできません。

IBM HTTP Server 1.3.19.1 用のユーザー ID とパスワードを作成するには、以下のステップを実行します。

1. `cd /opt/IBMHTTPD/bin` と入力します。
2. `./htpasswd -m ../conf/admin.passwd <user_ID>` と入力します。
3. パスワードの指定を求めるプロンプトが出され、次いでパスワードの確認を求めるプロンプトが出されます。

このユーザー ID とパスワードを使って、管理サーバーの構成 GUI にアクセスすることができます。このユーザー ID は、管理サーバーにアクセスするための ID として、固有なものでなければなりません。管理サーバーが指示する "User" と、管理サーバーにアクセスするためのユーザー ID は、同じにしないでください。

IBM HTTP Server のセットアップ

ユーザー ID やグループを作成し、様々な構成ファイルに対する許可を変更するセットアップ・スクリプトを、IBM HTTP Server に対して実行する必要があります。IBM HTTP Server をセットアップするには、以下のステップを実行してください。

1. `cd /opt/IBMHTTPD/bin` と入力します。
2. `./setupadm` を実行します。
3. プロンプトに対し、以下のように応答します。
 - 管理サーバーを実行するためのユーザー ID を指定します (ユーザー ID は、システム管理ツールを使って作成します)。ユーザー ID を入力してください (ログイン ID と同じにはできません)。 **Enter** をクリックします。
 - 管理サーバーを実行するグループ名を指定します (グループは、システム管理ツールを使って作成します)。グループ名を入力し、 **Enter** をクリックします。
 - 許可の変更が必要なファイルのあるディレクトリーを指定するよう、プロンプトが出されます。デフォルトは `/opt/IBMHTTPD/conf` です。デフォルトをそのまま使用するか、IBM HTTP Server 構成ファイルのパスを入力してください。

- 管理サーバーの構成ファイルを更新してもよいかどうかを確認するプロンプトが出されます。続行する場合は 1 を、中断する場合 (デフォルト) は 2 を入力します。
 - 管理サーバーと IBM HTTP Server を英語以外の言語で実行するかどうかを尋ねるプロンプトが表示されます。続行する場合は 1 を、中断する (デフォルト) 場合は 2 を入力します。別の言語を使用する場合は、言語の選択を求めるプロンプトが出されます。
4. 更新が実行され、setupadm プログラムが終了します。

WebSphere Application Server プラグインのインストール

Web サーバーに WebSphere Application Server のプラグインをインストールするには、次のようにします。

1. 必ず root のユーザー ID でログインします。
2. 必要であれば、WebSphere Application Server, Advanced Edition CD をマウントします。
3. コマンド行で以下を入力して、CD-ROM のインストール・ディレクトリーに移動します。

```
cd /CDROM_dir/sun
```

CDROM_dir は、CD-ROM をマウントしているディレクトリーです。

4. 次のコマンドを入力してインストール・プログラムを開始します。

```
./install.sh
```
5. 「Welcome to the IBM WebSphere Application Server Setup program (WebSphere Application Server のセットアップ・プログラムへようこそ)」ダイアログ・ボックスがオープンします。「次へ」をクリックして、次に進みます。
6. 「Prerequisites Check (前提条件検査)」ウィンドウがオープンします。WebSphere Application Server のインストール用の正しい前提条件製品があることを確認してから、「OK」をクリックします。
7. 「Install Options (インストール・オプション)」ダイアログ・ボックスがオープンします。「**Custom Installation (カスタム・インストール)**」を選択してから、「次へ」をクリックします。
8. 「WebSphere Install Packages (WebSphere インストール・パッケージ)」パネルが表示されます。以下のパッケージを選択します。
 - Web サーバー・プラグインそして、「次へ」をクリックします。
9. 「WebSphere Plugins (WebSphere プラグイン)」パネルが表示されます。IBM HTTP Server 用のプラグインを選択し、「次へ」をクリックします。

10. 「Install Options Selected (選択済みのインストール・オプション)」ダイアログ・ボックスがオープンします。表示内容が正しいことを確認してから「**Install (インストール)**」をクリックし、インストールを完了します。
11. 「構成ファイルのロケーション」ダイアログ・ボックスが表示され、指定した Web サーバー構成ファイルの絶対パス名を入力するようプロンプトで指示されます。
 - IBM HTTP Server: /opt/IBMHTTPD/conf/httpd.conf

重要:

この情報を入力する前に、別のコマンド・ウィンドウをオープンして、以下のコマンドを入力してください。

```
cd /opt/IBMHTTPD/conf
mv httpd.conf httpd.conf.orig
cp httpd.conf.sample httpd.conf
```

「次へ」をクリックします。

12. 「Setup Complete (セットアップの完了)」ダイアログ・ボックスがオープンします。README ファイルを見るには、「Yes, I want to view the ReadMe File (はい。README ファイルを読みます)」が選択されていることを確認してから、「**Finish (終了)**」をクリックします。これで、デフォルトのブラウザ・ウィンドウに README ファイルが表示されます。
13. 「WebSphere Application Server - First Steps (WebSphere Application Server - 最初のステップ)」ダイアログ・ボックスがオープンします。この GUI を使って、インフォセンター内の製品情報へのアクセス、管理サーバーの始動、管理コンソールの立ち上げ、またはアプリケーション・アSEMBリー・ツールの立ち上げを行うことができます。WebSphere を使用するには、先に Web サーバーを開始してから (おそらく) 構成する必要があるため、ひとまずこのダイアログをクローズします。後で「First Steps (最初のステップ)」GUI を立ち上げるには、`/opt/WebSphere/AppServer/bin` ディレクトリーに置かれている `firststeps.sh` スクリプトを実行します。
14. 以下を入力して、CD をアンマウントします。

```
cd /
umount CDROM_dir
```

CDROM_dir は CD をマウントする際に指定したディレクトリーです。

15. WebSphere Application Server, Advanced Edition CD を除去します。
16. 以下のコマンドを入力して Web サーバーを再始動します。

```
/opt/IBMHTTPD/bin/apachectl restart
```
17. ブラウザーを開始してから、ローカル・マシンの名前を URL で入力します。IBM HTTP Server の Web ページが表示されたら、サーバーのインストールと構成は正しく完了しているということです。

WebSphere Application Server eFix のインストール

WebSphere Commerce の要件を満たすためには、WebSphere Application Server をアップグレードする必要があります。そうするには、以下のようにします。

1. すでにインストールされている WebSphere Application Server eFix がある場合は、必ずそれらをすべて除去してください。
2. Web サーバーに関連したすべてのプロセスが停止していることを確認します。
3. 必要であれば、WebSphere Commerce Disk 2 CD をマウントします。これを行うには、以下を入力します。

```
mount CDRROM_dir
```

CDROM_dir は、マウントされた CD として指定するディレクトリーです。

4. CD の *Software_Patches* ディレクトリーに移動し、以下のコマンドを実行してください。

```
cp wc54webefixunix.sh.tar /tmp
cd /tmp
tar -xvf wc54db2efixunix.sh.tar
./wc54webefixunix.sh.tar
```

5. 以下のプロンプトに適切に応答します。
 - a. eFix のマウント・ポイントを入力します。これは CD ドライブ・ディレクトリーです。
 - b. WebSphere Application Server ホーム・ディレクトリーを入力します (デフォルトは */opt/WebSphere/AppServer* です)。
 - c. ソフトウェア・コンポーネントについてプロンプトが出されたら、オプション **4: WebServer** を選択します。
 - d. Enter を押して次に進みます。
 - e. Web サーバーについてプロンプトが出されたら、オプション **1: IBM HTTP Server** を選択します。
 - f. eFix をインストールしたいかどうかをたずねられたら、「Yes (はい)」を選択します。
 - g. ディレクトリー */tmp/WebSphere/eFixes* を作成したいかどうかをたずねられたら、「Yes (はい)」を選択します。
6. */tmp/wc54webefixunix.log* にエラーがリストされていないことを確認してください。

インストール内容のテスト

以下のようにして、IBM HTTP Server を開始します。

```
cd /opt/IBMHTTPD/bin
./apachectl start
```

Web サーバーが正しくインストールされていることを確認するために、以下の URL にアクセスしてこれをテストすることができます。

`http://host_name.domain`

ホスト名の前に `www` を付けないでください。IBM HTTP Server のホーム・ページが表示されるはずです。

次のステップ

以上で IBM HTTP Server 1.3.19.1 のインストールは完了しました。次に 61 ページの『第 7 章 WebSphere Application Server のインストール』の説明に従って WebSphere Application Server 4.0.2 をインストールすることができます。

第 5 章 Domino Web サーバーのインストール

WebSphere Commerce は Lotus Domino Web サーバーのバージョン 5.0.5、5.0.6、および 5.0.8 をサポートしています。

注:

1. Domino™ Web サーバーを使用するときは、キャッシングと cgi バイパスが使用できないので、パフォーマンスに影響が及ぶ可能性があります。
2. Domino Web サーバーは、1 つの非セキュア・ポートと 1 つのセキュア・ポートだけをサポートします。

インストール手順

Domino Web サーバーをインストールするには、必要に応じて Domino 資料を参照しながら以下のステップを実行します。

1. データベースがインストール済みであることを確認します。
2. Lotus の指示どおりに Domino Server をインストールします。
3. Lotus で指定されている手順に従って、Domino Web サーバー Administration Client をインストールします。インストール・プロセス中に、以下のオプションを選択する必要があります。
 - セットアップ・タイプを選択するようプロンプトで指示されたら、必ず「**Domino Administrator (Domino アドミニストレーター)**」を選択します。
 - コンポーネントを選択するようプロンプトで指示されたら、必ず「Domino Web Services (Domino Web サービス)」チェック・ボックスを選びます。
 - Domino Web サーバーを構成するときは、必ず Web ブラウザー・セクションの「HTTP」チェック・ボックスを選びます。

「**Domino Administrator (Domino アドミニストレーター)**」ウィンドウの「**Domino Administrator (Domino アドミニストレーター)**」。
4. Domino Server を始動します。
5. Lotus Domino Administrator を立ち上げます。
6. 「**File (ファイル)**」→「**Open Server (サーバーのオープン)**」を選択します。
7. サーバー名を入力します。たとえば、`host_name.domain_name` となります。
8. 「**OK**」をクリックして続行します。
9. 鍵リングを作成します。

WebSphere Application Server プラグインのインストール

Web サーバーに WebSphere Application Server のプラグインをインストールするには、次のようにします。

1. 必ず root のユーザー ID でログインします。
2. 必要であれば、WebSphere Application Server, Advanced Edition CD をマウントします。
3. コマンド行で以下を入力して、CD-ROM のインストール・ディレクトリーに移動します。

```
cd /CDROM_dir/sun
```

CDROM_dir は、CD-ROM をマウントしているディレクトリーです。

4. 次のコマンドを入力してインストール・プログラムを開始します。

```
./install.sh
```
5. 「Welcome to the IBM WebSphere Application Server Setup program (WebSphere Application Server のセットアップ・プログラムへようこそ)」ダイアログ・ボックスがオープンします。「次へ」をクリックして、次に進みます。
6. 「Prerequisites Check (前提条件検査)」ウィンドウがオープンします。WebSphere Application Server のインストール用の正しい前提条件製品があることを確認してから、「OK」をクリックします。
7. 「Install Options (インストール・オプション)」ダイアログ・ボックスがオープンします。「Custom Installation (カスタム・インストール)」を選択してから、「次へ」をクリックします。
8. 「WebSphere Install Packages (WebSphere インストール・パッケージ)」パネルが表示されます。以下のパッケージを選択します。
 - Web サーバーのプラグインその後、「次へ」をクリックします。
9. 「WebSphere Plugins (WebSphere プラグイン)」パネルが表示されます。Domino Web サーバー用のプラグインを選択し、「次へ」をクリックします。
10. 「Install Options Selected (選択済みのインストール・オプション)」ダイアログ・ボックスがオープンします。表示内容が正しいことを確認してから「Install (インストール)」をクリックし、インストールを完了します。
11. 「Location of Configuration files (構成ファイルのロケーション)」ダイアログ・ボックスが表示され、指定した Web サーバー構成ファイルの絶対パス名を入力するようプロンプトで指示されます。
 - Domino Web サーバー: /export/home/notes/notesdata/names.nsf「次へ」をクリックします。

12. 「Update WebSphere AS Configuration File (WebSphere AS 構成ファイルの更新)」ウィンドウで、Domino Notes.jar ファイルをブラウズします。デフォルトのロケーションは /opt/lotus/notes/latest/ibmpow/Notes.jar です。
13. 「Setup Complete (セットアップの完了)」ダイアログ・ボックスがオープンします。README ファイルを見るには、「Yes, I want to view the ReadMe File (はい。README ファイルを読みます)」が選択されていることを確認してから、「**Finish (終了)**」をクリックします。これで、デフォルトのブラウザー・ウィンドウに README ファイルが表示されます。
14. 以下を入力して、CD をアンマウントします。

```
cd /  
umount CDROM_dir
```

CDROM_dir は CD をマウントする際に指定したディレクトリーです。
15. WebSphere Application Server, Advanced Edition CD を取り出します。
16. Web サーバーを再始動します。
17. ブラウザーを開始してから、ローカル・マシンの名前を URL で入力します。Web サーバーのホーム・ページが表示されたら、サーバーのインストールと構成は正しく完了しているということです。

Domino Web サーバーの構成

Domino Web サーバーおよび WebSphere Application Server プラグインのインストール後には、Domino Web サーバーを構成する必要があります。

1. Domino アドミニストレーターをオープンします。
2. アドミニストレーター・データベースを選択します。
3. 「Configuration (構成)」タブを選択します。
4. サーバー・リストを拡張表示して、「**All Server Documents (すべてのサーバー文書)**」を選択します。
5. 構成したいサーバーを選択し、「**Edit Server (サーバーの編集)**」をクリックします。
6. 「Internet Protocols (インターネット・プロトコル)」タブを選択します。
7. 「HTTP」タブを選択します。
8. 「DSAPI Filter File Names (DSAPI フィルター・ファイル名)」フィールドに、`/opt/WebSphere/AppServer/bin/libdomino5_http.so` と入力します。
9. 「**Save and Close (保管してクローズ)**」をクリックします。
10. 更新されたサーバーの HTTP サービスを再始動します。

WebSphere Application Server eFix および FixPak のインストール

この項のステップを完了する必要があるのは、WebSphere Application Server を Domino Web サーバーからリモート・インストールする場合だけです。WebSphere Application Server を Domino Web サーバーと同じマシンにインストールする場合、後で WebSphere Application Server をアップグレードすることになります。

Domino Web サーバーを WebSphere Application Server からリモート・インストールしている場合、WebSphere Commerce の要件を満たすためにここで WebSphere Application Server コンポーネントをアップグレードする必要があります。48 ページの『WebSphere Application Server プラグインのインストール』にあるステップを完了してから、これを行う必要があります。そうするには、以下のようにします。

1. WebSphere Application Server、および Web サーバーに関連したすべてのプロセスが停止していることを確認します。
2. すでにインストールされている WebSphere Application Server eFix がある場合は、必ずそれらをすべて除去してください。
3. 必要であれば、WebSphere Commerce Disk 2 CD をマウントします。これを行うには、以下を入力します。

```
mount CDROM_dir
```

CDROM_dir は CD のマウント先に指定しようとしているディレクトリーです。

4. CD の *Software_Patches* ディレクトリーに移動し、以下のコマンドを実行してください。

```
cp wc54wasefixunix.tar /tmp
cd /tmp
tar -xvf wc54wasefixunix.tar
./wc54wasefixunix.sh
```

5. 以下のプロンプトに適切に応答します。
 - a. eFix のマウント・ポイントを入力します。これは CD ドライブ・ディレクトリーです。
 - b. WebSphere Application Server ホーム・ディレクトリーを入力します (デフォルトは `/opt/WebSphere/AppServer` です)。
 - c. ソフトウェア・コンポーネントに関するプロンプトが出されたら、**4: WebServer** のオプションを選択します。Enter を押して次に進みます。
 - d. Web サーバーについてプロンプトが出されたら、オプション **3: Domino** を選択します。
6. `/tmp/wc54webefixunix.log` にエラーがリストされていないことを確認してください。

Sun JDK レベルのアップグレード

ここで、WebSphere Commerce の要件を満たすように Sun JDK コンポーネントをアップグレードする必要があります。このアップグレードを行う前に、WebSphere Application Server eFix および FixPak をインストールしておかなければなりません。そうするには、以下のようにします。

1. WebSphere Application Server、および Web サーバーに関連したすべてのプロセスが停止していることを確認します。
2. 必要であれば、WebSphere Commerce Disk 2 CD をマウントします。これを行うには、以下を入力します。

```
mount CDROM_dir
```

CDROM_dir は CD のマウント先に指定しようとしているディレクトリーです。

3. CD の Software_Patches ディレクトリーに移動し、以下のコマンドを実行してください。

```
cp wc54jdkfixsun.sh /tmp  
cd /tmp  
./wc54jdkfixsun.sh
```

次のステップ

以上で Domino Web サーバーのインストールは完了しました。次に 61 ページの『第 7 章 WebSphere Application Server のインストール』の説明に従って、WebSphere Application Server 4.0.2 をインストールすることができます。

第 6 章 iPlanet Web サーバーのインストール

WebSphere Commerce には IBM HTTP Server 1.3.19.1 のコピーが含まれていますが、Web サーバーとして iPlanet Web サーバー Enterprise Edition 4.1.8 または Lotus Domino Web サーバー 5.0.6 も使用できます。iPlanet Web サーバーを使用する場合は、WebSphere Commerce の他のコンポーネントをインストールする前に、この章の該当するステップを完了する必要があります。

iPlanet Web サーバーのインストールおよび構成

Web サーバーとして iPlanet Web サーバー Enterprise Edition 4.1.8 を使用する場合は、以下のステップを完了してください。

1. iPlanet で指定されている手順に従って、iPlanet Web サーバーをインストールします。次のコンポーネントを確実にインストールしてください。

- iPlanet Web サーバー、Enterprise Server
- Server Core
- Java Runtime Environment
- Java Support
- SSJS Support
- SSJS Database Support

「Use Custom JDK™ (カスタム JDK を使用)」を選択しないでください。

2. 3 つの Web サーバーを確実に作成してください。SSL 以外の通信 (ポート 80) 用のサーバーを 1 つと、SSL 通信 (ポート 443 および 8000) 用のサーバーを 2 つです。
3. iPlanet の指定する手順に従って、認証局によって署名されたセキュア証明書をインストールします。

重要

デフォルトでは、外部ユーザーは iPlanet Web サーバーがサービスを提供できるどのファイルにもアクセスできます。セキュリティ上の理由から、Web ディレクトリーへのアクセスを制限する必要があります。ファイルおよびディレクトリーへのアクセスの制限については、iPlanet Web サーバーの資料を参照してください。さらに、obj.conf ファイルをオープンして NameTrans エントリーを探す必要があります。ターゲットのディレクトリー内のファイルが保護されていることを確認します。

WebSphere Application Server プラグインのインストール

Web サーバーに WebSphere Application Server のプラグインをインストールするには、次のようにします。

1. 必ず root のユーザー ID でログインします。
2. 必要であれば、WebSphere Application Server, Advanced Edition CD をマウントします。
3. コマンド行で以下を入力して、CD-ROM のインストール・ディレクトリーに移動します

```
cd /CDROM_dir/sun
```

CDROM_dir は、CD-ROM をマウントしているディレクトリーです。

4. 次のコマンドを入力してインストール・プログラムを開始します。

```
./install.sh
```
5. 「Welcome to the IBM WebSphere Application Server Setup program (WebSphere Application Server のセットアップ・プログラムへようこそ)」ダイアログ・ボックスがオープンします。「次へ」をクリックして、次に進みます。
6. 「Prerequisites Check (前提条件検査)」ウィンドウがオープンします。WebSphere Application Server のインストール用の正しい前提条件製品があることを確認してから、「OK」をクリックします。
7. 「Install Options (インストール・オプション)」ダイアログ・ボックスがオープンします。「Custom Installation (カスタム・インストール)」を選択してから、「次へ」をクリックします。
8. 「WebSphere Install Packages (WebSphere インストール・パッケージ)」パネルが表示されます。以下のパッケージを選択します。
 - Web サーバー・プラグインその後、「次へ」をクリックします。
9. 「WebSphere Plugins (WebSphere プラグイン)」パネルが表示されます。iPlanet Web サーバー用のプラグインを選択し、「次へ」をクリックします。
10. 宛先ディレクトリーの選択パネルが表示されます。プラグインを保管するディレクトリーを選択し、「次へ」をクリックします。このウィンドウには、WebSphere Application Server がこのディレクトリーにインストールされるという誤った通知が表示されることがあります。
11. 「Install Options Selected (選択済みのインストール・オプション)」ダイアログ・ボックスがオープンします。表示内容が正しいことを確認してから「Install (インストール)」をクリックし、インストールを完了します。

注: データベースのタイプは Oracle ではなく DB2 であると、WebSphere Application Server インストール・プログラムから誤った通知が出されることが

あります。その通知は無視してください。インストール中にデータベース・タイプをプロンプトでたずねられたときに Oracle を選択していれば、インストールは正しく進行します。

12. 「構成ファイルのロケーション」ダイアログ・ボックスが表示され、指定した Web サーバー構成ファイルの絶対パス名を入力するようプロンプトで指示されます。

iPlanet Web サーバーの場合、デフォルトは

`/usr/netscape/server4/server_name/config/obj.conf` です。ここで、*server_name* は、ポート 80 用に作成したサーバーの名前です。「次へ」をクリックします。

重要:

このプラグインは各サーバーごとに再インストールする必要があり、ポート 80 を使用するサーバーから開始し、ポート 443 のサーバー、ポート 8000 のサーバーの順に行います。

13. 「Setup Complete (セットアップの完了)」ダイアログ・ボックスがオープンします。README ファイルを見るには、「Yes, I want to view the ReadMe File (はい、README ファイルを読みます)」が選択されていることを確認してから、「**Finish (終了)**」をクリックします。これで、デフォルトのブラウザ・ウィンドウに README ファイルが表示されます。
14. ステップ 4 (54 ページ) ~ 13 を繰り返して、ポート 443 および 8000 上のサーバー用のプラグインのインストールを行います。
15. 以下を入力して、CD をアンマウントします。

```
cd /  
umount CDROM_dir
```

CDROM_dir は CD をマウントする際に指定したディレクトリーです。

16. WebSphere Application Server, Advanced Edition CD を除去します。
17. 以下のようして更新済み構成ファイルをロードします。

- a. ブラウザーで以下の URL を入力し、iPlanet Web サーバー・アドミニストレーターを立ち上げます。

```
http://host_name:8888/
```

- b. 使用可能なサーバーのリストから非セキュア・サーバーを選択して、「**Manage (管理)**」をクリックします。

注: iPlanet Web サーバーの構成によっては、警告メッセージが表示される場合があります。「**OK**」をクリックします。

- c. 右上隅の「**適用**」をクリックします。
- d. 「**Load Configuration Files (構成ファイルのロード)**」をクリックします。正常に行われたことを示すメッセージが表示されます。「**OK**」をクリックします。

- e. ドロップダウン・リストからもう一度サーバーを選択し、右上隅の「適用」をクリックします。
 - f. 「**Apply Changes (変更を適用)**」をクリックします。正常に行われたことを示すメッセージが表示されます。「**OK**」をクリックします。
 - g. 各セキュア・サーバーについて、ステップ 1 ~ 5 を繰り返します (ポート 8000 およびポート 443)。
18. 次のように入力して、Web サーバーを再始動します。
./usr/netscape/server4/server_name/restart
 19. Web ブラウザーをオープンし、Web サーバーのホーム・ページを立ち上げられることを確認してください。

iPlanet サブレットを使用不可にする

1. iPlanet Web サーバーを始動します。
2. iPlanet サブレットを使用不可にします。
 - a. 「iPlanet Console (iPlanet コンソール)」で、変更が必要なサーバーを選択します。
 - b. 「**Manage (管理)**」をクリックします。
 - c. 「**Servlets (サブレット)**」タブを選択します。
 - d. 「**Activate Servlet Engine (サブレット・エンジンをアクティブにする)**」で、「**No (いいえ)**」を選択します。
 - e. 「**OK**」をクリックします。
 - f. 「**Save and Apply (保管して適用)**」をクリックします。
 - g. このステップをすべての iPlanet Web サーバーに対して繰り返します。
3. ブラウザーを開始してから、ローカル・マシンの名前を URL で入力します。Web サーバーのホーム・ページが表示されたら、サーバーのインストールと構成は正しく完了しているということです。

WebSphere Application Server eFix および FixPak のインストール

このセクションのステップは、iPlanet Web サーバーからリモートの位置に WebSphere Application Server をインストールする場合にのみ実行する必要があります。WebSphere Application Server を iPlanet Web サーバーと同じマシンにインストールする場合、後で WebSphere Application Server をアップグレードすることになります。

iPlanet Web サーバーを WebSphere Application Server からリモートの位置にインストールする場合は、WebSphere Commerce の要件に合うように、この時点で WebSphere Application Server コンポーネントをアップグレードする必要があります。各 Web サーバーで 54 ページの『WebSphere Application Server プラグインのインストール』にあるステップを完了してから、これを行う必要があります。このセクションで eFix をイン

ストールした後に追加の Web サーバーを作成する場合は、197 ページの『WebSphere Application Server プラグインの設定を更新するための obj.conf ファイルの編集』の説明に従って Web サーバーの構成ファイルを変更する必要があります。

次のステップを完了してください。

1. WebSphere Application Server、および Web サーバーに関連したすべてのプロセスが停止していることを確認します。
2. すでにインストールされている WebSphere Application Server eFix がある場合は、必ずそれらをすべて除去してください。
3. 必要であれば、WebSphere Commerce Disk 2 CD をマウントします。これを行うには、以下を入力します。

```
mount CDRom_dir
```

CDROM_dir は、マウントされた CD として指定するディレクトリーです。

4. CD の Software_Patches ディレクトリーに移動し、以下のコマンドを実行してください。

```
cp wc54wasefixunix.tar /tmp
cd /tmp
tar -xvf wc54wasefixunix.tar
./wc54wasefixunix.sh
```

5. 以下のプロンプトに適切に応答します。
 - a. eFix のマウント・ポイントを入力します。これは CD ドライブ・ディレクトリーです。
 - b. WebSphere Application Server ホーム・ディレクトリーを入力します (デフォルトは /opt/WebSphere/AppServer です)。
 - c. ソフトウェア・コンポーネントについてプロンプトが出されたら、オプション **4: WebServer** を選択します。Enter を押して次に進みます。
 - d. Web サーバーについてプロンプトが出されたら、オプション **2: iPlanet Web Server** を選択します。
6. /tmp/wc54wasefixunix.log にエラーがリストされていないことを確認してください。

Sun JDK レベルのアップグレード

ここで、WebSphere Commerce の要件を満たすように Sun JDK コンポーネントをアップグレードする必要があります。このアップグレードを行う前に、WebSphere Application Server eFix および FixPak をインストールしておかなければなりません。そうするには、以下のようになります。

1. WebSphere Application Server、および Web サーバーに関連したすべてのプロセスが停止していることを確認します。

- 必要であれば、WebSphere Commerce Disk 2 CD をマウントします。これを行うには、以下を入力します。

```
mount CDROM_dir
```

CDROM_dir は、マウントされた CD として指定するディレクトリーです。

- CD の *Software_Patches* ディレクトリーに移動し、以下のコマンドを実行してください。

```
cp wc54jdkefixsun.sh /tmp
cd /tmp
./wc54jdkefixsun.sh
```

次のステップ

以上で iPlanet Web サーバーのインストールは完了しました。次に 61 ページの『第 7 章 WebSphere Application Server のインストール』の説明に従って、WebSphere Application Server 4.0.2 をインストールすることができます。

第 4 部 必要な WebSphere Commerce コンポーネントのインストール

データベースと Web サーバーのインストールが完了したら、WebSphere Application Server、WebSphere Commerce、および Payment Manager をインストールする必要があります。これらのタスクを実行する方法については、以下の章で説明します。

- 61 ページの『第 7 章 WebSphere Application Server のインストール』
- 75 ページの『第 8 章 WebSphere Commerce のインストール』
- 79 ページの『第 9 章 IBM WebSphere Payment Manager のインストール』

第 7 章 WebSphere Application Server のインストール

この章では、次の 2 つの異なるシナリオで WebSphere Application Server をインストールする方法について説明します。

- IBM HTTP Server が WebSphere Application Server および WebSphere Commerce と同じマシンにある。この場合、『同じマシンへの WebSphere Application Server と IBM HTTP Server のインストール』にある指示に従ってください。
- IBM HTTP Server が WebSphere Application Server および WebSphere Commerce からリモート位置にある、あるいは Domino Web サーバーまたは iPlanet Web サーバーを使用している。この場合、66 ページの『代替リモート Web サーバーと一緒に使用する WebSphere Application Server のインストール』にある指示に従ってください。

この章のステップを完了するには、WebSphere Application Server, Advanced Edition CD が必要です。

この章のチェックリスト

この章のステップを確実に正常完了するには、以下の要件を満たしていることを確認してください。

- 1. この章のステップを開始する前に、サポートされているデータベース・システムをあらかじめインストールしておく必要があります。
- 2. Domino Web サーバーまたは iPlanet Web サーバーを Web サーバーとして使用する場合は、それらを WebSphere Application Server のインストールの前にインストールしなければなりません。WebSphere Application Server をインストールする前に、その Web サーバーを手動で停止する必要があります。
- 3. IBM HTTP Server を WebSphere Application Server および WebSphere Commerce からリモート位置にインストールしている場合は、WebSphere Application Server のインストールの前に IBM HTTP Server をインストールしなければなりません。WebSphere Application Server をインストールする前に、その Web サーバーを手動で停止する必要があります。

同じマシンへの WebSphere Application Server と IBM HTTP Server のインストール

Web サーバーと同じマシン上に WebSphere Application Server をインストールするには、次のようにします。

1. 必ず root のユーザー ID でログインします。

- マシンの CD-ROM ドライブに CD を挿入した後で WebSphere Application Server, Advanced Edition CD をマウントします。そうするには、ターミナル・ウィンドウに以下のコマンドを入力します。

```
mount CDROM_dir
```

CDROM_dir は、CD ファイル・システムの割り振り時にマウント・ポイントと指定したディレクトリーです。

- コマンド行で以下を入力して、CD-ROM のインストール・ディレクトリーに移動します。

```
cd /CDROM_dir/sun
```

CDROM_dir は、CD-ROM がマウントされているディレクトリーです。

- 次のコマンドを入力してインストール・プログラムを開始します。

```
./install.sh
```

- 「Welcome to the IBM WebSphere Application Server Setup program (WebSphere Application Server のセットアップ・プログラムへようこそ)」ダイアログ・ボックスがオープンします。「次へ」をクリックして、次に進みます。
- 「Prerequisites Check (前提条件検査)」ウィンドウがオープンします。WebSphere Application Server のインストール用の正しい前提条件製品があることを確認してから、「OK」をクリックします。
- 「Install Options (インストール・オプション)」ダイアログ・ボックスがオープンします。「**Custom Installation (カスタム・インストール)**」を選択してから、「次へ」をクリックします。
- 「Choose Application Server Components (Application Server コンポーネントの選択)」パネルが表示されます。以下のパッケージを選択します。

- Server
- Admin
- Samples
- Application Assembly and Deployment Tools
- IBM HTTP Server 1.3.19
- Web Server Plugins

すべてのパッケージを選択し終わったら、「次へ」をクリックします。

- 「WebSphere plug-ins (WebSphere プラグイン)」パネルが表示されます。Web サーバー用のプラグインを選択し、「次へ」をクリックします。
- 「Database Options (データベース・オプション)」ダイアログがオープンします。以下の一連の指示を実行します。
 - 「Database Type (データベース・タイプ)」フィールドで、プルダウン・メニューから Oracle を選択します。

- b. WebSphere Application Server とは別のマシン上にデータベースが置かれている場合、必ず「Remote DB (リモート DB)」を選択します。
 - c. 「Database Name (Database SID) (データベース名 (データベース SID))」フィールドに、 28 ページの『WebSphere Application Server、WebSphere Commerce、および WebSphere Payment Manager 用のデータベースの作成』で作成した WebSphere Application Server データベースの名前を入力します。(たとえば *was_SID*)
 - d. 「DB Home (DB ホーム)」フィールドに ORACLE_HOME 環境変数の値を入力します。このパスは、Oracle ソフトウェアを収容し、oracle という名前のユーザーのホーム・ディレクトリーにするために作成したディレクトリーの絶対パス名にしてください。または、「参照」ボタンを使って、そのディレクトリーの絶対パス名を指定します。
 - e. 「DB URL」フィールドで、以下のデフォルト値を受け入れます。
`jdbc:oracle:thin:@host_name:port_number:database_name`
または、データベースへのアクセス用の別の URL を指定します。
 - f. 「Server Name (サーバー名)」フィールドに、データベースのインストール先のマシンの完全修飾ホスト名を入力します。これは「DB URL」フィールドに反映されている必要があります。
 - g. 「Port Number (ポート番号)」フィールドに、データベースへのアクセスに使用するポート番号を入力します。
 - h. 「Database User ID (データベース・ユーザー ID)」フィールドに、データベース・インスタンス所有者の名前 EJSADMIN を入力します。
 - i. 「Database Password (データベース・パスワード)」フィールドに、データベース・インスタンス所有者の現在のパスワードを入力します。
 - j. 「次へ」をクリックして、次に進みます。
11. 「Select Destination Directory (宛先ディレクトリーの選択)」ダイアログがオープンします。WebSphere Application Server のインストール先のディレクトリーを指定します。デフォルトの宛先ディレクトリーを受け入れることができます。または、絶対パス名を入力するか「参照」をクリックして別のディレクトリーを指定することもできます。注意すべきこととして、インストールの対象として IBM HTTP Server を選択した場合、宛先ディレクトリーを変更することはできません。「次へ」をクリックして、次に進みます。
12. 「Install Options Selected (選択済みのインストール・オプション)」ダイアログ・ボックスがオープンします。表示内容が正しいことを確認してから「Install (インストール)」をクリックし、インストールを完了します。

注: データベースのタイプは Oracle ではなく DB2 であると、WebSphere Application Server インストール・プログラムから誤った通知が出されること

があります。その通知は無視してください。インストール中にデータベース・タイプをプロンプトでたずねられたときに Oracle を選択していれば、インストールは正しく進行します。

- 「Location of Configuration files (構成ファイルのロケーション)」ダイアログ・ボックスが表示され、指定した Web サーバー構成ファイルの絶対パス名を入力するようプロンプトで指示されます。

```
/opt/IBMHTTPD/conf/httpd.conf
```

重要:

この情報を入力する前に、別のコマンド・ウィンドウをオープンして、以下のコマンドを入力してください。

```
cd /opt/IBMHTTPD/conf
mv httpd.conf httpd.conf.orig
cp httpd.conf.sample httpd.conf
```

「次へ」をクリックします。

- 「セットアップが完了しました。」ダイアログ・ボックスがオープンします。README ファイルを見るには、「Yes, I want to view the ReadMe File (はい。README ファイルを読みます)」が選択されていることを確認してから、「**Finish (終了)**」をクリックします。これで、デフォルトのブラウザ・ウィンドウに README ファイルが表示されます。
- 以下を入力して、CD をアンマウントします。

```
cd /
umount CDROM_dir
```

CDROM_dir は CD をマウントする際に指定したディレクトリーです。

- WebSphere Application Server, Advanced Edition CD を取り出します。
- 以下のコマンドを実行して、IBM HTTP Server を再始動します。

```
/opt/IBMHTTPD/bin/apachectl restart
```
- ブラウザを開始してから、ローカル・マシンの名前を URL で入力します。IBM HTTP Server の Web ページが表示されたら、サーバーのインストールと構成は正しく完了しているということです。

IBM HTTP Server 管理者用パスワードの作成

管理サーバーは、すべての構成フォームを含むディレクトリーに対して認証が使用可能になった状態でインストールされます。つまり、管理サーバーは、インストールの後、ユーザー ID とパスワードが入力されなければページをサービスしません。これは、IBM HTTP Server と管理サーバーが正常にインストールされた直後の無許可アクセスから IBM HTTP Server の構成ファイルを保護することを目的としたものです。インストール時には、パスワード・ファイル (admin.passwd) が「空」になっているので、管理

サーバー・パスワード・ファイル (admin.passwd) にユーザー ID とパスワードを入力するまでは、管理サーバーから IBM HTTP Server の構成ページにアクセスすることはできません。

IBM HTTP Server 1.3.19.1 用のユーザー ID とパスワードを作成するには、以下のステップを実行します。

1. `cd /opt/IBMHTTPD/bin` と入力します。
2. `./htpasswd -m ../conf/admin.passwd user_ID` と入力します。
3. パスワードの指定を求めるプロンプトが出され、次いでパスワードの確認を求めるプロンプトが出されます。

このユーザー ID とパスワードを使って、管理サーバーの構成 GUI にアクセスすることができます。このユーザー ID は、管理サーバーにアクセスするための固有 ID でなければなりません。

IBM HTTP Server 管理サーバーのセットアップ

ユーザー ID やグループを作成し、様々な構成ファイルに対する許可を変更するセットアップ・スクリプトを、IBM HTTP Server に対して実行する必要があります。IBM HTTP Server 管理サーバーをセットアップするには、以下のステップを実行してください。

1. `cd /opt/IBMHTTPD/bin` と入力して、HTTP Server ディレクトリーに移動します。
2. `./setupadm` を実行します。
3. プロンプトに対し、以下のように応答します。
 - a. 管理サーバーを実行するためのユーザー ID を指定します (ユーザー ID は、システム管理ツールを使って作成します)。ユーザー ID を入力してください (ログオン ID と同じにはできません)。 **Enter** をクリックします。
 - b. 管理サーバーを実行するグループ名を指定します (グループは、システム管理ツールを使って作成します)。グループ名を入力し、 **Enter** をクリックします。
 - c. 許可の変更が必要なファイルのあるディレクトリーを指定するよう、プロンプトが出されます。デフォルトは `/opt/IBMHTTPD/conf` です。デフォルトをそのまま使用するか、IBM HTTP Server 構成ファイルのパスを入力してください。
 - d. 変更を実行するか (1 を入力)、または変更せずに終了するか (2 を入力) を尋ねるプロンプトが出されます。1 を入力して変更を行ってください。
 - e. 管理サーバーの構成ファイルを更新するプロンプトが出されます。続行するか (1 を入力)、または終了します (2 を入力)。1 を入力して更新を行ってください。
 - f. 管理サーバーと IBM HTTP Server を英語以外の言語で実行するかどうかを尋ねるプロンプトが出されます。そうする場合は 1 を入力し、そうしないで終了する場合は 2 を入力します。別の言語を使用する場合は、言語の選択を求めるプロンプトが出されます。
4. 更新が実行され、`setupadm` プログラムが終了します。

代替リモート Web サーバーと一緒に使用する WebSphere Application Server のインストール

IBM HTTP Server が WebSphere Application Server および WebSphere Commerce からリモート位置にある場合、あるいは Domino Web サーバー や iPlanet Web サーバーを使用している場合に、 WebSphere Application Server をインストールするには、以下のようになります。

1. 必ず root のユーザー ID でログインします。
2. マシンの CD-ROM ドライブに CD を挿入した後で WebSphere Application Server, Advanced Edition CD をマウントします。そうするには、ターミナル・ウィンドウに以下のコマンドを入力します。

```
mount CDROM_dir
```

CDROM_dir は、CD ファイル・システムの割り振り時にマウント・ポイントと指定したディレクトリーです。

3. コマンド行で以下を入力して、CD-ROM のインストール・ディレクトリーに移動します。

```
cd /CDROM_dir/sun
```

CDROM_dir は、CD-ROM がマウントされているディレクトリーです。

4. 次のコマンドを入力してインストール・プログラムを開始します。

```
./install.sh
```
5. 「Welcome to the IBM WebSphere Application Server Setup program (WebSphere Application Server のセットアップ・プログラムへようこそ)」ダイアログ・ボックスがオープンします。「次へ」をクリックして、次に進みます。
6. 「Prerequisites Check (前提条件検査)」ウィンドウがオープンします。 WebSphere Application Server のインストール用の正しい前提条件製品があることを確認してから、「OK」をクリックします。
7. 「Install Options (インストール・オプション)」ダイアログ・ボックスがオープンします。「**Custom Installation (カスタム・インストール)**」を選択してから、「次へ」をクリックします。
8. 「Choose Application Server Components (Application Server コンポーネントの選択)」パネルが表示されます。以下のパッケージを選択します。

- Server
- Admin
- Samples
- Application Assembly and Deployment Tools

すべてのパッケージを選択し終わったら、「次へ」をクリックします。

9. 「Database Options (データベース・オプション)」ダイアログがオープンします。以下の一連の指示を実行します。
 - a. 「Database Type (データベース・タイプ)」フィールドで、プルダウン・メニューから Oracle を選択します。
 - b. WebSphere Application Server とは別のマシン上にデータベースが置かれている場合、必ず「Remote DB (リモート DB)」を選択します。
 - c. 「Database Name (Database SID) (データベース名 (データベース SID))」フィールドに、 28 ページの『WebSphere Application Server、WebSphere Commerce、および WebSphere Payment Manager 用のデータベースの作成』で作成した WebSphere Application Server データベースの名前を入力します。(たとえば *was_SID*)
 - d. 「DB Home (DB ホーム)」フィールドに ORACLE_HOME 環境変数の値を入力します。このパスは、Oracle ソフトウェアを収容し、oracle という名前のユーザーのホーム・ディレクトリーにするために作成したディレクトリーの絶対パス名にしてください。または、「参照」ボタンを使って、そのディレクトリーの絶対パス名を指定します。
 - e. 「DB URL」フィールドで、以下のデフォルト値を受け入れます。

```
jdbc:oracle:thin:@host_name:port_number:database_name
```

または、データベースへのアクセス用の別の URL を指定します。データベースが WebSphere Application Server と別のマシンにある場合、データベース・サーバーの完全修飾ホスト名を入力してください。
 - f. 「Server Name (サーバー名)」フィールドに、データベースのインストール先のマシンの完全修飾ホスト名を入力します。これは「DB URL」フィールドに反映されている必要があります。
 - g. 「Port Number (ポート番号)」フィールドに、データベースへのアクセスに使用するポート番号を入力します。
 - h. 「Database User ID (データベース・ユーザー ID)」フィールドに、データベース・インスタンス所有者の名前 EJSADMIN を入力します。
 - i. 「Database Password (データベース・パスワード)」フィールドに、データベース・インスタンス所有者の現在のパスワードを入力します。
 - j. 「次へ」をクリックして、次に進みます。
10. 「Select Destination Directory (宛先ディレクトリーの選択)」ダイアログがオープンします。WebSphere Application Server のインストール先のディレクトリーを指定します。デフォルトの宛先ディレクトリーを受け入れるか、あるいは、絶対パス名を入力するかまたは「参照」をクリックして別のディレクトリーを指定することもできます。注意すべきこととして、インストールの対象として IBM HTTP Server を選択した場合、宛先ディレクトリーを変更することはできません。「次へ」をクリックして、次に進みます。

11. 「Install Options Selected (選択済みのインストール・オプション)」ダイアログ・ボックスがオープンします。表示内容が正しいことを確認してから「**Install (インストール)**」をクリックし、インストールを完了します。

注: データベースのタイプは Oracle ではなく DB2 であると、WebSphere Application Server インストール・プログラムから誤った通知が出されることがあります。その通知は無視してください。インストール中にデータベース・タイプをプロンプトでたずねられたときに Oracle を選択していれば、インストールは正しく進行します。

12. 「セットアップが完了しました。」ダイアログ・ボックスがオープンします。README ファイルを見るには、「Yes, I want to view the ReadMe File (はい。README ファイルを読みます)」が選択されていることを確認してから、「**Finish (終了)**」をクリックします。これで、デフォルトのブラウザー・ウィンドウに README ファイルが表示されます。

13. 以下を入力して、CD をアンマウントします。

```
cd /  
umount CDROM_dir
```

CDROM_dir は CD をマウントする際に指定したディレクトリーです。

14. WebSphere Application Server, Advanced Edition CD を取り出します。

WebSphere Application Server の構成の完了

Oracle8i Database ユーザー用の WebSphere Application Server の構成

Oracle データベースを使用している場合、いくつかの構成ステップを手動で行って、WebSphere Commerce 内で WebSphere Application Server が完全に機能するようにする必要があります。これらのステップを開始する場合、Oracle ホーム・ディレクトリーの完全修飾パスをあらかじめ知っている必要があります。たとえば、`/opt/oracle/u01/app/oracle/product/8.1.7` などとなります。

WebSphere Application Server の手動構成を行うには、次のようにします。

1. root としてログインします。
2. ターミナル・ウィンドウで次のコマンドを実行して、WebSphere Application Server bin ディレクトリーに移動します。

```
cd /opt/WebSphere/AppServer/bin
```
3. `startupServer.sh` を `startupServer.sh.orig` にコピーします。
4. テキスト・エディターで `startupServer.sh` を開きます。
5. 次のようなテキスト・セクション (一部の行は読みやすいように形式変更されています) を見つけ出します。

```

if [ "${DB_TYPE}" != "DB2" ]
then
{
  LD_LIBRARY_PATH=$WAS_HOME/lib/odbc/lib:$WAS_HOME/bin:$WAS_HOME/lib:
$JAVA_HOME/lib:$DB_INSTANCE_HOME/lib:$LD_LIBRARY_PATH
  export LD_LIBRARY_PATH

  ${JAVA_EXE?} ¥
  -classpath $WAS_HOME/lib/bootstrap.jar:$CLASSPATH ¥
  -Dws.ext.dirs=$WAS_EXT_DIRS ¥
  -Djavax.rmi.CORBA.UtilClass=com.ibm.CORBA.iiop.Util ¥
  -Dcom.ibm.CORBA.iiop.noLocalCopies=true ¥
  -DDER_DRIVER_PATH=$DER_DRIVER_PATH ¥
  -Dserver.root=$WAS_HOME ¥
  -Xbootclasspath/a:$JAVA_HOME/jre/lib/ext/ibmorib.jar ¥
  com.ibm.ws.bootstrap.WSLauncher ¥
  com.ibm.ejs.sm.util.process.Nanny $WAS_HOME/bin/admin.config
}

```

このセクションを次のように変更します。新しい部分は太字のテキストで示されます。

```

if [ "${DB_TYPE}" != "DB2" ]
then
{
  ORACLE_HOME=$DB_INSTANCE_HOME
  export ORACLE_HOME
  LD_LIBRARY_PATH=$WAS_HOME/lib/odbc/lib:$WAS_HOME/bin:$WAS_HOME/lib:
  $JAVA_HOME/lib:$DB_INSTANCE_HOME/lib:$LD_LIBRARY_PATH
  export LD_LIBRARY_PATH
  NLS_LANG=LANGUAGE_TERRITORY.UTF8
  export NLS_LANG
  ${JAVA_EXE?} ¥
  -classpath $WAS_HOME/lib/bootstrap.jar:$CLASSPATH ¥
  -Dws.ext.dirs=$WAS_EXT_DIRS ¥
  -Djavax.rmi.CORBA.UtilClass=com.ibm.CORBA.iiop.Util ¥
  -Dcom.ibm.CORBA.iiop.noLocalCopies=true ¥
  -DDER_DRIVER_PATH=$DER_DRIVER_PATH ¥
  -Dserver.root=$WAS_HOME ¥
  -Xbootclasspath/a:$JAVA_HOME/jre/lib/ext/ibmorib.jar ¥
  com.ibm.ws.bootstrap.WSLauncher ¥
  com.ibm.ejs.sm.util.process.Nanny $WAS_HOME/bin/admin.config
}

```

LANGUAGE_TERRITORY は、以下のリストで選択したとおりの言語およびテリトリ一です。

- AMERICAN_AMERICA
- BRAZILIAN_PORTUGUESE_BRAZIL
- FRENCH_FRANCE
- GERMAN_GERMANY
- ITALIAN_ITALY

- JAPANESE_JAPAN
- KOREAN_KOREA
- SIMPLIFIED_CHINESE_CHINA
- SPANISH_SPAIN
- TRADITIONAL_CHINESE_TAIWAN

この値は、Oracle ユーザーの .profile 内の NLS_LANG 値に一致している必要があります。

6. 行った変更を保管し、テキスト・エディターを終了します。

WebSphere Application Server eFix および FixPak のインストール

Web サーバー、WebSphere Application Server、および WebSphere Commerce を同じマシンにインストールする場合、この項のステップを実行する必要はありません。

Web サーバーがリモート・マシン上にある場合、この項のステップを WebSphere Application Server マシン上で完了する必要があります。

以下のステップを完了してください。

1. WebSphere Application Server が停止していることを確認します。 WebSphere Application Server を停止するには、以下のようになります。
 - a. ターミナル・ウィンドウに次のように入力して、WebSphere Application Server 管理コンソールを開始します。

```
export DISPLAY=fully_qualified_host_name:0.0
cd /opt/WebSphere/AppServer/bin
./adminclient.sh
```

- b. WebSphere Application Server 管理コンソールで、短いホスト名を持つノードを選択します。
- c. 「Stop (停止)」 ボタンをクリックします。次のような警告メッセージが表示されます。

You are trying to stop the node that the console is connected to. (コンソールの接続先のノードを停止しようとしています。) This will cause the console to exit after the node is stopped. (停止すると、ノードの停止後にコンソールは終了してしまいます。) Do you want to continue? (続けますか)

「Yes (はい)」 をクリックして先に進みます。

- d. WebSphere Application Server 管理コンソールの後、ターミナル・ウィンドウで次のようなコマンドを発行して、 WebSphere Application Server 関連のプロセスがすべて停止したことを確認します。

```
ps -ef | grep AppServer
```

- e. このコマンドによって Java プロセスが戻された場合、 kill コマンドを発行してそれぞれのプロセスを停止します。

- すでにインストールされている WebSphere Application Server eFix がある場合は、必ずそれらをすべて除去してください。
- 必要であれば、WebSphere Commerce Disk 2 CD をマウントします。これを行うには、以下を入力します。

```
mount CDROM_dir
```

CDROM_dir は CD のマウント先に指定しようとしているディレクトリーです。

- CD の *Software_Patches* ディレクトリーに移動し、以下のコマンドを実行します。

```
cp wc54wasefixunix.tar /tmp
cd /tmp
tar -xvf wc54wasefixunix.tar
./wc54wasefixunix.sh
```

スクリプトがエラーなしでソフトウェアをアップグレードしたかどうかを検査するには、以下のエラー・ログを調べてください。

- /tmp/wc54efixunix.log
- /opt/WebSphere/AppServer/eFix/PQ54291/Extractor.Log
- /opt/WebSphere/AppServer/eFix/PQ57814/Extractor.Log
- /opt/WebSphere/AppServer/eFix/PQ58443/Extractor.Log

Sun JDK レベルのアップグレード

Web サーバー、WebSphere Application Server、および WebSphere Commerce を同じマシンにインストールする場合、この項のステップを実行する必要はありません。

Web サーバーがリモート・マシン上にある場合、このセクションのステップを完了する必要があります。

以下のステップを完了してください。

- WebSphere Application Server、および Web サーバーに関連したすべてのプロセスが停止していることを確認します。
- 必要であれば、WebSphere Commerce Disk 2 CD をマウントします。これを行うには、以下を入力します。

```
mount CDROM_dir
```

CDROM_dir は CD のマウント先に指定しようとしているディレクトリーです。

- CD の *Software_Patches* ディレクトリーに移動し、以下のコマンドを実行します。

```
cp wc54jdkfixsun.sh /tmp
cd /tmp
./wc54jdkfixsun.sh
```

インストール内容のテスト

この項では、WebSphere Application Server システムのインストールと構成をテストする方法について説明します。以下の解説では、サポートされている Web サーバー、データベース、および WebSphere Application Server コンポーネントをインストール済みであることを前提としています。

以下のステップを実行し、WebSphere Application Server のインストール内容をテストします。

1. 必ず、スーパーユーザー (root) 特権でマシンにログインしてください。
2. 次のような startupServer スクリプトを実行して WebSphere 管理サーバーを開始します。

```
cd /opt/WebSphere/AppServer/bin
./startupServer.sh &
```

3. /opt/WebSphere/AppServer/logs ディレクトリー内に置かれている tracefile という名前のファイルを調べて、管理サーバーの始動が正常に完了したことを確認します。サーバーの始動が正常に完了していれば、メッセージ Server_adminServer open for e-business (e-business 用の Server_adminServer がオープンします) がそのファイルに示されます。
4. 以下のように adminclient スクリプトを実行して、管理コンソールを始動します。

```
cd /opt/WebSphere/AppServer/bin
./adminclient.sh &
```

5. メッセージ Console Ready (コンソールは作動可能) が表示されたら、次のようなステップを行ってアプリケーション・サーバーを管理します。
 - a. 管理コンソールがオープンすると、ツリー・ビューが表示されます。
「**WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)**」エントリーの横の正符号 (+) をクリックし、ビューを拡張表示します。
 - b. 「**Nodes (ノード)**」エントリーを拡張表示します。
 - c. ご使用のホスト・マシンの名前を確認してから、エントリーのビューを拡張表示します。
 - d. 「**Application Servers (アプリケーション・サーバー)**」エントリーのビューを拡張表示します。
 - e. 「**Default Server (デフォルト・サーバー)**」エントリーを選択してから、ツールバー上にある「**Start (開始)**」アイコンをクリックします。通知ウィンドウがオープンし、サーバーが始動したことが知らされます。「**OK**」をクリックして通知ウィンドウをクローズします。

WebSphere Application Server AdminServer を再始動すると、デフォルト・サーバーはその以前の状態に戻ります。停止していた場合は停止したままであり、実行していた場合は再始動します。

6. Web サーバーが別のマシンにインストールされている場合は、
`/opt/WebSphere/AppServer/config/plugin-cfg.xml` を WebSphere Application Server
マシンから Web サーバー・マシンにコピーします。

重要:

デフォルト・サーバーは、テストの目的でのみ使用されます。テストが終了したら、これを停止または除去することができます。ご使用のサイトにセキュリティ障害をもたらす可能性があるため、実動システムでこれを実行したままにすべきではありません。

7. Web サーバーが実行中であることを確認してください。 Web サーバーが実行されていなければ、開始してください。
8. ブラウザーを始動してから、デフォルトでインストールされているサンプル・サーブレットである次のようなスヌープ・サーブレットの URL を入力します。

`http://machine_name/servlet/snoop`

`/servlet/snoop` に関する解説が表示されます。

次のステップ

以上で WebSphere Application Server のインストールが完了したので、次に 75 ページの『第 8 章 WebSphere Commerce のインストール』のステップに従って WebSphere Commerce をインストールすることができます。

第 8 章 WebSphere Commerce のインストール

この章では、WebSphere Commerce のインストール方法について説明します。この章に示されている手順を完了するには、WebSphere Commerce Disk 1 CD と WebSphere Commerce Disk 2 CD が必要です。

重要:

WebSphere Commerce 5.4 をインストールする前に以下のタスクを実行する必要があります。

- 以下をインストール済みであることを確認してください。
 - Web サーバー
 - Oracle8i Database
 - WebSphere Application Server
 - Sun JDK
- この時点で Intallation and Configuration Checker を実行するようお勧めします。このツールを使えば、WebSphere Commerce のサポートのためにインストールするソフトウェアが正しいレベルであることを確認することができます。このツールは、以下からダウンロードします。

ツールは、以下の URL にアクセスしてオンラインでダウンロードすることができます。

 Business

www.ibm.com/software/webservers/commerce/wc_be/support-tools.html

 Professional

www.ibm.com/software/webservers/commerce/wc_pe/support-tools.html

IC Checker の使用に関する解説は、ダウンロードしたパッケージに添付されています。

インストール手順

WebSphere Commerce をインストールするには、以下のようにします。

1. ユーザー ID `root` でログオンします。
 2. 必要であれば、WebSphere Commerce Disk 1 CD をマウントします。
 3. `root` のユーザー ID で、次のようなコマンドを入力して管理ツールを始動します。
`/bin/admintool&`
 4. 「**Browse (ブラウズ)**」プルダウン・メニューで、「**Software (ソフトウェア)**」を選択します。「Admintool: Software (Admintool: ソフトウェア)」ウィンドウが表示されます。
 5. 「**Edit (編集)**」プルダウン・メニューで「**Add (追加)**」を選択します。「Admintool: Set Source Media (Admintool: ソース・メディアの設定)」ウィンドウがオープンします。
 6. Volume Manager がインストールされている場合、「**Software Location (ソフトウェア・ロケーション)**」フィールドの「**CD with Volume Management (ボリューム管理を装備した CD)**」を選択します。次に「**CD Path (CD パス)**」フィールドに、`/cdrom_dir/WebSphereCommerce` と入力します。`cdrom_dir` は、CD-ROM ドライバーのマウント・ポイントです。「**OK**」をクリックします。
 7. Volume Manager がインストールされていない場合、「**Software Location (ソフトウェア・ロケーション)**」フィールドの「**CD without Volume Management (ボリューム管理を装備していない CD)**」を選択します。次に「**Mount Point (マウント・ポイント)**」フィールドに、`/cdrom_dir/WebSphereCommerce` と入力します。`cdrom_dir` は、CD-ROM ドライバーのマウント・ポイントです。「**OK**」をクリックします。
 8. パッケージ・リストで以下を選択します。
 - WebSphere Commerce - runtime
- 注: WebSphere Commerce は自動的に `/opt/WebSphere/CommerceServer` にインストールされますが、そのディレクトリー内でしかサポートされません。
9. 「**追加**」をクリックします。「Admintool: Add Software (Admintool: ソフトウェアの追加)」ウィンドウがオープンし、インストールしようとしているパッケージのスクロール・リストが表示されます。
 10. 各パッケージのインストールを先に進めてよいかどうかをたずねられたら、各プロンプトに対して `y` と返答します。
 11. すべてのパッケージのインストールが完了したら、**Enter** キーを押してすべての Admintool ウィンドウをクローズします。

WebSphere Commerce ドキュメンテーションの入手方法

WebSphere Commerce ドキュメンテーションをインストールするには、以下のようになります。

1. ユーザー ID `root` でログオンします。
2. 必要であれば、WebSphere Commerce Disk 1 CD をマウントします。
3. `tar` でアーカイブされ圧縮されたドキュメンテーション・パッケージを CD からシステムにコピーして、`tar` ファイルを解凍・展開します。以下のようにします。

重要:

この `tar` ファイルをコピーして解凍・展開するには、約 1.2 GB の一時スペースが必要です。ドキュメンテーションのインストールが終わったら、これらのファイルを削除できます。この作業を始める前に、十分なスペースが存在することを確認してください。

```
cd cdrom_dir/WebSphereCommerce
cp wcdocs.tar.Z /tmp
cd /tmp
uncompress wcdocs.tar.Z
tar -xvf wcdocs.tar
```

ここで、`/tmp` はシステム上の任意のディレクトリーで、少なくとも 1.2 GB のスペースが必要です。

4. `root` のユーザー ID で、次のようなコマンドを入力して管理ツールを始動します。
`/bin/admintool&`
5. 「**Browse (ブラウズ)**」プルダウン・メニューで、「**Software (ソフトウェア)**」を選択します。「Admintool: Software (Admintool: ソフトウェア)」ウィンドウが表示されます。
6. 「**Edit (編集)**」プルダウン・メニューで「**Add (追加)**」を選択します。
「Admintool: Set Source Media (Admintool: ソース・メディアの設定)」ウィンドウがオープンします。
7. 「ソフトウェア・ロケーション」フィールドの「**Hard Disk (ハード・ディスク)**」を選択します。「ディレクトリー」フィールドに、`/tmp` と入力します。「**OK**」をクリックします。
8. 以下のパッケージを選択します。
 - WebSphere Commerce - docs
9. 「**追加**」をクリックします。「Admintool: Add Software (Admintool: ソフトウェアの追加)」ウィンドウがオープンし、インストールしようとしているパッケージのスクロール・リストが表示されます。
10. 各パッケージのインストールを先に進めてよいかどうかをたずねられたら、各プロンプトに対して `y` と返答します。

11. すべてのパッケージのインストールが完了したら、**Enter** キーを押してすべての Admintool ウィンドウをクローズします。
12. WebSphere Commerce Disk 1 CD をアンマウントして取り出します。

WebSphere Application Server および Sun JDK のバージョン・アップグレード

このセクションのステップは、Web サーバーを WebSphere Commerce サーバーと同じマシン上にインストールした場合にのみ実行する必要があります。その他のすべてのインストール・シナリオに関しては、これらの製品はすでにアップグレード済みです。

以下のステップを完了してください。

1. 必要であれば、WebSphere Commerce Disk 2 CD をマウントします。
2. WebSphere Application Server が停止中で、Web サーバーに関連したすべてのプロセスも停止中であることを確認します。
3. /opt/WebSphere/CommerceServer/bin に移動します。
4. ./wc54efixunix.sh と入力します。
5. プロンプトが表示されたら、CD ドライブの場所を入力します。
6. プロンプトが表示されたら、WebSphere Application Server ホーム・ディレクトリーを入力します (デフォルトは /opt/WebSphere/AppServer)。
7. これ以降も一連のプロンプトに応じて入力し、アップデートを完了します。

スクリプトがエラーなしでソフトウェアをアップグレードしたかどうかを検査するには、以下のエラー・ログを調べてください。

- /tmp/WC54efixunix.log
- /opt/WebSphere/AppServer/eFix/PQ54291/Extractor.Log
- /opt/WebSphere/AppServer/eFix/PQ57814/Extractor.Log
- /opt/WebSphere/AppServer/eFix/PQ58443/Extractor.Log

次のステップ

以上で WebSphere Commerce のインストールは完了しました。次に 79 ページの『第 9 章 IBM WebSphere Payment Manager のインストール』の説明に従って、Payment Manager をインストールすることができます。

第 9 章 IBM WebSphere Payment Manager のインストール

この章では、Payment Manager をローカル WebSphere Commerce マシン上に、または WebSphere Commerce マシンからリモートになっているマシン上にインストールして構成する方法について説明します。この章に示されている手順を完了するには、IBM Payment Manager 3.1.2 の CD が必要です。

Payment Manager の構成に関するその他の詳細は、以下を参照してください。

- Payment Manager CD 上の *IBM WebSphere Payment Manager for Multiplatforms* インストール・ガイド、バージョン 3.1。
- Payment Manager CD 上の *IBM WebSphere Payment Manager for Multiplatforms* 管理者ガイド、バージョン 3.1。
- インストールを完了したら、WebSphere Commerce オンライン・ヘルプにある情報を参照し、Payment Manager を WebSphere Commerce ストアと共に作動するように構成してください。

インストールの前提条件

Payment Manager を WebSphere Commerce マシンにインストールする場合、Payment Manager のインストール前提条件のほとんどはすでに満たされています。80 ページの『Payment Manager のインストール前に』に直接進んで、Payment Manager をインストールしてください。

WebSphere Commerce からリモートの位置にあるマシンに Payment Manager をインストールする場合は、以下にリストする、マシンのハードウェアおよびソフトウェアの前提条件を満たす必要があります。

ソフトウェア要件

Payment Manager では、以下のソフトウェアがインストールされている必要があります。

1. データベース製品。IBM DB2 ユニバーサル・データベース 7.1.0.55 および Oracle8i Database がサポートされています。Payment Manager をインストールしているマシンに、データベース・サーバーまたはクライアントがインストールされていなければなりません。
2. WebSphere Application Server 4.0.2

3. Web サーバー。(IBM HTTP Server 1.3.19.1 は、WebSphere Application Server 4.0.2 をインストールするとデフォルトでインストールされます。) サポートされている Web サーバーについては、WebSphere Application Server の資料を参照してください。

Payment Manager のインストール前に

1. 最新の README ファイル `readme.framework.html` をお読みください。これには、Payment Manager の Web サイト <http://www.ibm.com/software/websphere/paymgr/support/index.html> および Payment Manager CD-ROM 上のドキュメンテーション・リンクからアクセスします。
2. 33 ページの『Payment Manager 用のユーザー ID および表スペースの作成』内のステップは、Payment Manager データベースを作成した後に行う必要があります。Payment Manager が実行中でなければなりません。
3. インストール中は必ず WebSphere Application Server 管理サーバーを実行中にしておいてください。また、WebSphere Application Server には、別の目的で構成された WebSphere Payment Manager という名前のアプリケーション・サーバーがないことを確認してください。もしすでに構成済みなら、その名前を変更するか、または削除してください。
4. WebSphere Application Server セキュリティーが使用可能になっている場合、Payment Manager または決済カセットをインストールする前に使用不可にします。WebSphere Application Server セキュリティーが使用可能になっているかどうかを調べるには、次のようにします。
 - a. WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。
 - b. 「コンソール」メニューから「コンソール」を選択し、「**Security Center (セキュリティ・センター)**」タスクをオープンします。
 - c. 「一般」タブで、「**Enable Security (セキュリティを使用可能にする)**」チェック・ボックスのチェックを外します。

Payment Manager のインストール

IBM Payment Manager 3.1.2 をインストールするには、以下のようになります。

1. ユーザー ID `root` でログインします。
2. 必要であれば、IBM Payment Manager 3.1.2 の CD をマウントします。 これを行うには、以下を入力します。

```
mount CDROM_dir
```

CDROM_dir は CD のマウント先に指定しようとしているディレクトリーです。

3. 次のような `Install` コマンドを実行し、Payment Manager インストール・プログラムを立ち上げます。

./Install

4. 「Payment Manager Install (Payment Manager のインストール)」画面で、「次へ」をクリックします。
5. ライセンス契約を読み、ご使用条件を納得したら了承します。
6. デフォルトの宛先ディレクトリーを受け入れるか、あるいは他のディレクトリーを入力します。
7. WebSphere Application Server がどの Sun JDK を使用しているかをインストール・プログラムが判断できないと、Sun JDK ディレクトリーのロケーションを入力するように求められます。表示されたロケーションが正しければ、「次へ」をクリックします。そうでない場合は、正しいロケーションを入力してから「次へ」をクリックします。
8. Payment Manager で使用するデータベース (**DB2 ユニバーサル・データベース**または **Oracle8i Database** のいずれか) を選択し、「次へ」をクリックします。
9. 以下の情報を求めるプロンプトが出されます。
 - Oracle JDBC ドライバー・クラス名。デフォルトは `oracle.jdbc.driver.OracleDriver` です。
 - JDBC クラスの位置。JDBC クラスのデフォルト位置は `Oracle_home/jdbc/lib/classes12.zip` です。
 - JDBC 共用ライブラリー・パスの位置。JDBC 共用ライブラリー・パスのデフォルト位置は `Oracle_home/jdbc/lib` です。

ここで、`Oracle_home` は、Oracle のホーム・ディレクトリーです。(たとえば `/opt/oracle/u01/app/oracle/product/8.1.7`)
10. データベース名を求めるプロンプトが出されたら、Payment Manager で使用するために作成したデータベースを指定します。データベースは、WebSphere Commerce データベースとして使用しているものと同じにすることも、別にすることもできます。
11. 「Payment Manager Database Access Information (Payment Manager データベース・アクセス情報)」画面で、次のような該当する値を入力します。
 - データベース所有者ユーザー ID (33 ページの『Payment Manager 用のユーザー ID および表スペースの作成』のステップを参照)
 - データベース管理者のユーザー ID
 - データベース管理者のパスワード
 - Payment Manager データベースの Oracle システム ID (SID)
 - データベース・ホスト名 (完全修飾)
 - データベース・サービス TCP ポート
12. 「Payment Manager WebSphere Configuration Information (Payment Manager WebSphere 構成情報)」のページで、デフォルト・ノード名をそのまま受け入れるか(ただしマシンに対して正しいものである場合)、あるいは必要に応じて短いホスト

名を入力します。ノード名は、使用するマシンのノード名として WebSphere Application Server 管理コンソールに表示されるものと同じでなければなりません。

13. 「Installation Summary (インストールの要約)」画面で、選択されているパラメータを確認します。「次へ」をクリックしてインストールを続行します。

注: インストール中に、進行状況表示バーが停止したように見えることがあります。それでもインストールは継続していますので、終了しないでください。システム・リソースの状態に応じて、進行状況表示バーが再び動くようになります。

14. README ファイルを読みたいかどうかをたずねられます。「Yes (はい)」を選択し、「次へ」をクリックします。
15. 以下を入力して、CD をアンマウントします。

```
cd /  
umount CDRROM_dir
```

CDROM_dir は CD をマウントする際に指定したディレクトリーです。

16. IBM Payment Manager 3.1.2 の CD を除去します。

CustomOffline と OfflineCard が自動的に Payment Manager とともにインストールされます。Payment Manager が WebSphere Commerce と同じマシンにインストールされると、OfflineCard は自動的に構成されます。これらのカセットをテストに使用できますが、オンライン・トランザクションを処理することはできません。

Payment Manager SET Cassette 3.1.2、Payment Manager Cassette for BankServACH 3.1.2、Payment Manager Cassette for VisaNet 3.1.2、および Payment Manager Cassette for CyberCash 3.1.2 は、WebSphere Commerce 5.4 に付属するオンライン・トランザクション処理カセットですが、デフォルトではインストールされません。実動用にサイトをオープンする前に、オンライン・トランザクションの処理で使用する決済カセット (複数可) をインストールする必要があります。決済カセットのインストールについては、インストールするカセット用の補足資料をご覧ください。これら資料の入手先に関する詳細は、214 ページの『Payment Manager の情報』を参照してください。カセットをインストールする前に、WebSphere Application Server を稼働させ、Payment Manager アプリケーション・サーバーを停止しておく必要があることに注意してください。

リモート・マシンでの Payment Manager の構成

WebSphere Commerce のあるシステムに Payment Manager をインストールするときには、WCSRealm クラスが自動的にシステムに構成されます。Payment Manager をリモート・マシンにインストールしているときは、サポートしているデフォルト・レルムとして PSDefaultRealm が提供されます。

Payment Manager がインストールされているリモート・マシンで WCSRealm を使用する場合には、WebSphere Application Server 管理コンソールを使って Payment Manager を手動で構成する必要があります。以下のようにします。

1. Payment Manager マシンで WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。
2. WebSphere Commerce アプリケーション・サーバーが稼働中であることを確認してください。
3. 以下のようにして、Payment Manager アプリケーション・サーバーを停止します。
 - a. 「**WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)**」を拡張表示します。
 - b. 「**Nodes (ノード)**」を拡張表示します。
 - c. 「*node_name*」を拡張表示します。
 - d. 「**Application Servers (アプリケーション・サーバー)**」を拡張表示します。
 - e. 「**WebSphere Payment Manager**」を選択します。「**停止**」ボタンをクリックして、Payment Manager アプリケーション・サーバーを停止します。
4. Payment Manager アプリケーション・サーバーが停止した後、「**JVM Settings (JVM 設定)**」タブを選択します。「System Properties (システム・プロパティ)」ボックスで、wpm.RealmClass 初期化パラメーターを選択して値を変更します。
 - com.ibm.etill.framework.payserverapi.PSDefaultRealm を com.ibm.commerce.payment.realm.WCSRealm に置き換えます。値を変更したら、「**適用**」をクリックします。
5. Payment Manager システムで SSL を使用可能にする場合、191 ページの『WebSphere Application Server へのポート・ホスト別名の追加』の説明に従って、WebSphere Application Server 管理コンソールの default_host ウィンドウに *.443 エントリーを追加します。

注: SSL を使用可能にしない場合は、WebSphere Commerce インスタンスの作成時に、WebSphere Commerce 構成マネージャーの Payment Manager 設定ページ内で、WebSphere Commerce サーバーが非 SSL Payment Manager クライアントを使用するよう構成しなければなりません。インスタンスを作成した後で Payment Manager 設定を変更することもできますが、変更内容を有効にするために、インスタンスを再始動する必要があります。

6. Payment Manager ディレクトリーの WCSRealm.properties ファイルをオープンします。このファイルには、WCSHostName と WCSWebPath の定義が含まれています。WCSHostName には、WebSphere Commerce がインストールされているリモート・マシンの完全修飾ホスト名を入力します。(このデフォルトは、Payment Manager がインストールされているシステムのホスト名です。) WCSWebPath のプロパティを変更する必要はありません。

7. WebSphere Application Server 管理コンソールから、Payment Manager アプリケーション・サーバーを再始動します。

次のステップ

以上で、IBM Payment Manager 3.1.2 のインストールは完了しました。次に、以下のことを行います。

- 85 ページの『第 5 部 WebSphere Commerce インスタンスの構成』の手順に従って、WebSphere Commerce インスタンスを作成します。

第 5 部 WebSphere Commerce インスタンスの構成

必須のソフトウェアのインストールと、使用する予定の任意のソフトウェア・パッケージのインストールが完了したら、WebSphere Commerce インスタンスを作成することができます。このインスタンスは、構成マネージャーで作成できます。

第 5 部は、次のような章で構成されています。

- 87 ページの『第 10 章 構成前のステップ』
- 91 ページの『第 11 章 構成マネージャーによるインスタンスの作成または変更』
- 121 ページの『第 12 章 構成後のステップ』

正しく WebSphere Commerce インスタンスを作成するためには、すべてのユーザーが、87 ページの『第 10 章 構成前のステップ』と 121 ページの『第 12 章 構成後のステップ』、および 91 ページの『第 11 章 構成マネージャーによるインスタンスの作成または変更』の中にある、該当するステップを実行する必要があります。

第 10 章 構成前のステップ

この章には、WebSphere Commerce インスタンスを構成する前に完了する必要がある作業のリストが載せられています。以下のリストの該当する項を完了してください。

- wcpoinstall.sh スクリプトの実行
- Oracle の構成前のステップ (すべての Oracle データベース・ユーザー)
- Domino Web サーバーで作業するためのファイル許可の変更
- WebSphere Application Server の開始 (すべてのユーザー)

インストール後スクリプトの実行

WebSphere Commerce および必要なコンポーネントをすべてインストールした後、インストール後スクリプトを実行する必要があります。これを実行すると、非ルート・ユーザーとして WebSphere Application Server、Payment Manager、および WebSphere Commerce を実行できるユーザー ID `wasuser` が作成されます。スクリプトを実行するには、以下のステップを完了します。

1. WebSphere Application Server が停止中で、Web サーバーに関連したすべてのプロセスも停止中であることを確認します。
2. `/opt/WebSphere/CommerceServer/bin` に移動します。
`cd /opt/WebSphere/CommerceServer/bin`
3. `./wcpoinstall.sh` と入力します。
4. 画面のプロンプトに従い、非ルート・ユーザーとして実行するかどうかを尋ねられたら、必ず「はい」を選択してください。

注:

- a. 新規ユーザーの作成ではなく既存ユーザーの使用を選択する場合、そのユーザーのホーム・ディレクトリーは `/export/home` でなければなりません。
- b. `wcpoinstall.sh` スクリプトに提示されているデフォルトのグループ名とユーザー名、およびデフォルト・ポート番号を使用することを強くお勧めします。別の名前やポート番号を選択する場合は、この資料全体にわたって、それらの名前に置き換える必要があります。
- c. グループやユーザーの名前は、以下のガイドラインに沿ったものでなければなりません。
 - 8 文字以内にする
 - 特殊文字は使用しない (英数字のみ)
 - すべて小文字にする

このスクリプトの実行を完了した後、一部のツールの立ち上げや一部のアプリケーションの開始と停止の際には、このスクリプトに指定したポート番号を指定する必要があるかもしれません。これに関する詳細は、本書での該当タスクの説明箇所に併記されています。

root ユーザーおよび wasuser プロファイルの更新

インストール後スクリプトの実行後に、以下の情報を追加することによって、 root と wasuser の両方の .profile ファイルを更新する必要があります。

```
PATH=$PATH:/usr/ucb
export PATH
```

この情報を追加しないと、WebSphere Commerce 構成マネージャーは開始しません。

Oracle8i Database の構成前のステップ

始める前に

Oracle8i Database の構成前ステップを行う前に、Oracle8i Database インストールに関する以下の情報を把握しておく必要があります。

- Oracle8i Database のホーム・ディレクトリー。たとえば
/opt/oracle/u01/app/oracle/product/8.1.7。
- WebSphere Commerce データベースの Oracle8i Database システム ID (SID)。たとえば、o817。

これらの情報を見付ける方法については、お手元の Oracle8i Database 資料を参照してください。

setenv.sh での Oracle8i Database 環境変数の設定

データベースとして Oracle8i Database を使用する場合は、WebSphere Commerce インスタンスを構成する前に、以下の変更を行う必要があります。

1. root としてログインします。
2. ターミナル・ウィンドウで次のコマンドを入力して、WebSphere Commerce bin ディレクトリーに移動します。

```
cd /opt/WebSphere/CommerceServer/bin
```

3. テキスト・エディターで setenv.sh をオープンします。
4. ORACLE_HOME という行を検索して、それを以下のように置換します。

```
export ORACLE_HOME=Oracle_home_directory
```

ここで、Oracle_home_directory は Oracle がインストールされているホーム・ディレクトリーです。(たとえば、/opt/oracle/u01/app/oracle/product/8.1.7)。

5. ファイルの末尾に、以下のような行が存在することを確認します。


```
NLS_LANG=LANGUAGE_LOCALE.UTF8
export NLS_LANG
CLASSPATH=$ORACLE_HOME/jdbc/lib/classes12.zip:$CLASSPATH
CLASSPATH=$ORACLE_HOME/jdbc/lib/nls_charset12.zip:$CLASSPATH
export CLASSPATH
```

存在しない場合は、これらの行を追加してください。ロケール値は、15 ページの『WebSphere Commerce で使用されるロケール』にリストされている、サポートされるロケールのいずれかでなければなりません。

Domino Web サーバーで実行するためのファイル許可の変更

Domino Web サーバーを使用している場合は、機密漏れを防ぐため、以下にリストされているようにファイル許可を変更する必要があります。WebSphere Commerce マシンで以下のステップを実行する必要があります。

1. コマンド・ウィンドウで、/bin/admintool & と入力します。
2. 「参照」 → 「Groups (グループ)」を選択します。リストから wasgroup を選択してください。「編集」 → 「変更」を選択し、「メンバー」リストから Domino Web サーバーのユーザー (デフォルトは notes) を除去します。
3. /opt/WebSphere/AppServer/logs ディレクトリーに移動し、コマンド chmod 646 native.log を実行します。
4. /opt/WebSphere ディレクトリーに移動し、コマンド chmod 755 CommerceServer を実行します。
5. WebSphere Application Server と同じマシンに Domino Web サーバーがインストールされている場合、ディレクトリーに移動し、コマンド chmod 755 libwccache.achmod 755 libwccache.so を実行します。WebSphere Application Server に対してリモートのマシンに Domino Web サーバーがインストールされている場合は、これは「構成後のステップ」の章で実行します。
6. /opt/WebSphere/AppServer/bin ディレクトリーに移動し、コマンド chmod 755 libdomino5_http.achmod 755 libdomino5_http.so を実行します。

WebSphere Application Server の開始

WebSphere Application Server を開始します。87 ページの『インストール後スクリプトの実行』で作成したユーザー ID wasuser としてログインし、以下の事柄を確認してから、以下のように入力します。

1. データベース・サーバーが実行中であることを確認します。
2. Web サーバーが実行中であることを確認します。
3. ターミナル・ウィンドウで次のコマンドを入力します。

```
su - wasuser
DISPLAY=fully_qualified_host_name :0.0
cd /opt/WebSphere/AppServer/bin
./startupServer.sh &
```

次のステップ

この章に示されている必要なステップがすべて完了したら、以下の章のステップを行うことによって、構成マネージャーを使ってインスタンスを作成できます。

- 91 ページの『第 11 章 構成マネージャーによるインスタンスの作成または変更』

第 11 章 構成マネージャーによるインスタンスの作成または変更

この章では、構成マネージャーを使用してインスタンスを作成または変更する方法について説明します。87 ページの『第 10 章 構成前のステップ』で説明されている手順を先に完了しないと、インスタンスを作成することはできません。

注:

1. IBM WebSphere Payment Manager 3.1.2 を使用してインスタンスのオンライン・トランザクションを処理するには、インスタンスを作成する前に Payment Manager をインストールしなければなりません。インスタンスは、自動的に Payment Manager を処理するように構成されます。Payment Manager をインストールする方法については、79 ページの『第 9 章 IBM WebSphere Payment Manager のインストール』を参照してください。
2. XMLConfig ファイル (通常 /opt/WebSphere/AppServer/bin ディレクトリーにある) をカスタマイズしてある場合は、構成マネージャーを実行する前に、そのカスタマイズを除去する必要があります。除去しないと、WebSphere Application Server 中の WebSphere Commerce アプリケーション・サーバーのセットアップが失敗します。
3. WebSphere Application Server 4.0.2 では、単一の WebSphere Commerce サーバーは、インストールされた EJB モジュール、および 1 つ以上のストアへのクライアント要求の役割を果たす、インストールされた Web モジュールから構成されます。WebSphere Commerce 構成マネージャーでは、個々の WebSphere Commerce インスタンスは、インスタンス・ツリー中の別々のルート・カテゴリーとして表示されます。WebSphere Application Server のトポロジー・ビューでは、WebSphere Commerce インスタンスは、別個の WebSphere Commerce アプリケーション・サーバーとしてノード・エントリーの下に表示されます。

この章のチェックリスト

- システムで使用されているロケールは、サポートされているものでなければなりません。15 ページの『WebSphere Commerce で使用されるロケール』をご覧ください。
- Korn シェルを実行する必要があります。
- データベース・サーバーが実行中であることを確認します。
- Web サーバーが WebSphere Commerce と同じマシンにインストールされている場合は、Web サーバーが実行中であることを確認します。
- WebSphere Application Server が開始されていることを確かめます。

重要: WebSphere Application Server セキュリティーをオンにしている場合は、インスタンスを作成する前に使用不可にしなければなりません。

構成マネージャーの起動

構成マネージャーを始動するには、以下のステップを行います。

1. ターミナル・ウィンドウをオープンします。
2. 87 ページの『インストール後スクリプトの実行』で作成された WebSphere Application Server ユーザーとしてログオンしていることを確認します。

```
su - wasuser
```

3. WebSphere Commerce マシンで作業している場合でも、次のようにして表示内容をエクスポートします。

```
export DISPLAY=fully_qualified_host_name:0.0
```

システムが Can not open DISPLAY= と応答する場合、 WebSphere Commerce マシンで次のコマンドを実行します。

```
xhost +host_name
```

host_name は、構成マネージャーのアクセス元にするマシンの完全修飾ホスト名です。

4. 以下のコマンドを発行します。

```
cd /opt/WebSphere/CommerceServer/bin
./config_server.sh
```

注:

- a. `config_server.sh` コマンドを入力したターミナル・ウィンドウは閉じないでください。閉じると、構成マネージャー・サーバーが停止してしまいます。
 - b. 構成マネージャー・サーバーをバックグラウンド・プロセスとして実行しないでください。これはセキュリティ上の潜在的な危険になります。
5. 次のメッセージを待ちます。Registry created. CMServer bound in registry.
 6. ターミナル・ウィンドウをもう 1 つオープンします。
 7. 87 ページの『インストール後スクリプトの実行』で作成された WebSphere Application Server ユーザーとしてログオンしていることを確認します。

```
su - wasuser
```

8. WebSphere Commerce マシンで作業している場合でも、次のようにして表示内容をエクスポートします。

```
export DISPLAY=fully_qualified_hostname:0.0
```

9. 以下のコマンドを発行します。

```
cd /opt/WebSphere/CommerceServer/bin
./config_client.sh &
```

10. 構成マネージャーのユーザー ID とパスワードを入力するウィンドウが表示されます。構成マネージャーのデフォルト・ユーザー ID は `webadmin`、デフォルト・パスワードは `webibm` です。

11. 初回ログイン時に、パスワードを変更するよう促されます。

インスタンス作成ウィザード

インスタンスを作成するには、WebSphere Commerce 構成マネージャーで以下のようにします。

1. ホスト名を拡張表示します。
2. 「インスタンス・リスト」をマウスの右ボタンでクリックします。
3. 表示されるポップアップ・メニューで、「インスタンスの作成」を選択します。
4. 「インスタンス作成ウィザード」がオープンします。以下の各パネルのフィールドに入力してください。

インスタンス

インスタンス名

インスタンスのために使用する名前。デフォルトの名前は `demo` です。

インスタンスのルート・パス

WebSphere Commerce インスタンスに関連するすべてのファイルを保存するパスを入力します。デフォルトのパスは、
`/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/instance_name` です。

マーチャント・キー

これは、構成マネージャーが暗号鍵として使用する 16 桁の 16 進数です。
「マーチャント・キー」フィールドには、**ユーザー独自の鍵を入力してください**。特に実動サーバーの場合、サイト保護に十分な鍵を入力するようにしてください。ストアを作成した後は、この鍵を変更できるのは、**データベース更新ツール**を使用する場合だけです。このツールを使用するには、構成マネージャーにアクセスし、データベース・ノードをマウスの右マウス・ボタン・クリックして、「データベース更新ツール」を選択します。

PDI 暗号化

このチェック・ボックスは、`ORDPAYINFO` と `ORDPAYMTHD` のテーブルに指定された情報を暗号化することを指定するのに使います。このチェック・ボックスを選択すると、支払い情報がデータベースに暗号化された形式で保管されます。

PVC ヘッダー使用可能

将来のリリースのために予約済み。

URL マッピング・ファイル

URL マッピングのために使用するファイルのパスを入力します。デフォルトのファイル `/opt/WebSphere/CommerceServer/xml/mapping/urlmapper.xml` をそのまま使用することもできます。

データベース

データベース名

データベースに割り当てる名前を入力するか、またはデフォルトを受け入れません。

Oracle の場合は、Oracle のインストール時に定義した WebSphere Commerce グローバル・データベース名を入力します (たとえば o817)。

Oracle SID

28 ページの『WebSphere Application Server、WebSphere Commerce、および WebSphere Payment Manager 用のデータベースの作成』のセクションで、WebSphere Commerce サーバーが使用するために作成した、データベースの SID を入力します。

データベース・タイプ

ドロップダウン・リストから、使用する予定のデータベース管理システムの名前を選択します。

Oracle インスタンス・ユーザー ID

Oracle コマンドを発行するユーザーのシステム ID を入力します。

データベース・ユーザー名

Oracle の場合は、27 ページの『第 3 章 Oracle8i Database のインストールおよび構成』で作成した Oracle ユーザー ID を使用します。

データベース・ユーザー・パスワード

上記のデータベース・ユーザー名に関連したパスワードです。

ステージング・サーバーの使用

「ステージング・サーバーの使用」を選択すると、構成マネージャーは、このデータベースをステージング・サーバーで使用するものとして定義します。ステージング・サーバーについては、WebSphere Commerce のオンライン情報をご覧ください。(その情報にアクセスする方法については、213 ページの『オンライン・ヘルプの使用』を参照してください。)

アクティブ・データベースとして設定

WebSphere Commerce インスタンスでこのデータベースを使用する場合、このオプションをオンにします。インスタンスとして別のデータベースを使用する場合は、このオプションを使用不可にします。

リモート・データベースの使用

データベース・サーバーが WebSphere Commerce とは異なるノード上にある場合は、このチェック・ボックスを使用可能にします。

注: WebSphere Commerce と異なるノードにデータベース・サーバーをインストールしている場合 (たとえば、2 層または 3 層環境を構成する場合)、このチェック・ボックスを選択する必要があります。

データベース・サーバー・ホスト名

このフィールドは、「リモート・データベースの使用」を選択した場合に使用可能です。データベースが存在するノードの完全修飾ホスト名を入力します。

データベース・サーバー・ポート

このフィールドは、「リモート・データベースの使用」を選択した場合に使用可能です。Oracle のデフォルト・ポートは、1521 です。

言語

構成マネージャーの「言語」パネルは、必要なすべての言語をサポートするようにデータベースを構成する場合に使います。ドロップダウン・リストからデフォルトの言語を選択します。デフォルトの言語に一致する `wcs.bootstrap_multi_xx_XX.xml` ファイルが「選択言語」ウィンドウに表示されるはずですが、追加言語へのサポートをデータベースに追加するには、以下のステップを完了します。

1. 「使用可能な言語」ウィンドウから、該当する言語の `.xml` ファイルを選択します。`.xml` ファイルは、`wcs.bootstrap_multi_xx_XX.xml` という形式です (`xx_XX` は選択する言語の 4 文字のローケル・コード)。
2. 「選択言語」ウィンドウを指す矢印をクリックします。選択した言語が「選択言語」ウィンドウに表示されます。
3. ステップ 1 と 2 を、サポートの必要な言語ごとに実行します。

注: 複数の言語をサポートするストア、たとえば英語でもスペイン語でも使用可能なストアを作成しようとする場合、ストアがサポートするすべての言語を選択する必要があります。その場合、「選択言語」ウィンドウに英語とスペイン語の両方が示されていなければなりません。WebSphere Commerce に付属しているサンプル・ストアは複数の言語をサポートしています。「言語」パネルで言語を 1 つしか選択しない場合、複数の言語をサポートしていないサンプル・ストアの部分は表示されません。

Web サーバー

リモート Web サーバーの使用

Web サーバーを WebSphere Commerce サーバーとは別のマシンにインストールする場合は、このチェック・ボックスを選択します。このボックスが選択されると、Web サーバーは構成マネージャーでは構成されません。

注: WebSphere Commerce とは異なるノードに Web サーバーをインストールする場合 (たとえば、3 層環境を構成する場合)、このチェック・ボックスを選択する必要があります。

ホスト名

デフォルトを受け入れるか、または Web サーバー・マシンの完全修飾ホスト名を入力します (完全修飾名は `hostname.domain.com` という形式です)。デフォルトは、WebSphere Commerce マシンのホスト名です。ホスト名のフィール

ドに `www` 接頭部は入力しないでください。デフォルト・ホスト名を受け入れる場合は、そのデフォルト・ホスト名が完全修飾名であることを確認してください。

Web サーバー・タイプ

ドロップダウン・リストから、使用する予定の Web サーバー・ソフトウェアを選択します。

1 次文書ルート

Web サーバーの文書ルートのパスとして、デフォルトをそのまま受け入れるか、または入力します。入力するパスは、既存のパスでなければなりません。

サーバー・ポート

WebSphere Commerce サーバーで使用するポート番号を入力します。デフォルト値は、80 です。

認証モード

この WebSphere Commerce インスタンスで使用する認証モードを選択します。選択肢は以下のとおりです。

基本 認証は、カスタム証明書を使って実行されます。

X.509 認証は、X.509 証明書規格を使って実行されます。

セキュア・サーバー構成パス

セキュア Web サーバー (ポート 443) 用の `obj.conf` ファイルのディレクトリー・パスを入力します。このフィールドは、Web サーバーとして Netscape iPlanet を使用する場合のみ表示されます。リモート Web サーバーをご使用の場合には、このフィールドは表示されません。

非セキュア・サーバー構成パス

非セキュア Web サーバー (ポート 80) 用の `obj.conf` ファイルのディレクトリー・パスを入力します。このフィールドは、Web サーバーとして Netscape iPlanet を使用する場合のみ表示されます。リモート Web サーバーをご使用の場合には、このフィールドは表示されません。

セキュア・ツール・サーバー構成パス

このフィールドは、Netscape iPlanet を Web サーバー (ポート 8000) として選択した場合のみ表示されます。Netscape iPlanet セキュア・ツール・サーバーの `obj.conf` ファイルの絶対パスを入力します。リモート Web サーバーをご使用の場合には、このフィールドは表示されません。

WebSphere

データ・ソース名

WebSphere Commerce が作業するデータベースにアクセスするための接続プールのセットアップに使用します。

ポート番号

87 ページの『インストール後スクリプトの実行』で指定されているとおり、WebSphere Application Server が listen するポート・アドレスを入力します。デフォルトは 2222 です。

JDBC ドライバーの場所

JDBC ファイル (classes12.zip) の位置を入力します。

ストア Web アプリケーション

WebSphere Application Server において WebSphere Commerce Server の下にデフォルトのストア Web アプリケーションを構成する場合、これを選択します。

ツール Web アプリケーション

WebSphere Application Server において WebSphere Commerce Server の下にデフォルトのツール Web アプリケーションを構成する場合、これを選択します。

ツールのポート番号

WebSphere Commerce の管理ツールへのアクセスに使用されるポート番号。デフォルト・ポート番号は、8000 です。Domino Web サーバーをご使用の場合は、このポート番号を 443 に変更する必要があります。

WebSphere Catalog Manager

このチェック・ボックスを選択すると、WebSphere Catalog Manager WebEditor がインストールされます。これには、https://host_name:8000/wcm/webeditor からアクセスすることができます。これはデフォルトでインストールされます。

Payment Manager

ホスト名

Web サーバー・マシンの完全修飾ホスト名を入力します。デフォルトは、WebSphere Commerce のホスト名です。Payment Manager または Web サーバーを WebSphere Commerce からリモート・インストールした場合、その Payment Manager が使用する Web サーバー・マシンの完全修飾ホスト名をこのフィールドに必ず入れてください。

プロファイル・パス

WebSphere Commerce Payment Manager Cashier の標準のプロファイルの保存先ディレクトリーの絶対パス名。デフォルト値は `/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/instance_name/xml/ payment` です。

非 SSL Payment Manager クライアントの使用

WebSphere Commerce に非 SSL Payment Manager クライアントを使用して Payment Manager サーバーと通信させる場合は、このチェック・ボックスをオ

ンにします。それにより、WebSphere Commerce は、SSL を使わずに Payment Manager と通信できるようになります。

Web サーバー・ポート

Payment Manager が使用する Web サーバーの TCP ポートを入力します。
「非 SSL Payment Manager クライアントの使用」チェック・ボックスを選択した場合、このフィールドのデフォルト値は 80 (非セキュア・ポート) です。
「非 SSL Payment Manager クライアントの使用」チェック・ボックスをオンにしなかった場合、このフィールドのデフォルト値は 443 (SSL ポート) です。

Socks サーバーの使用

WebSphere Commerce が Payment Manager にアクセスするために Socks サーバーが必要な場合、このチェック・ボックスをオンにします。

Socks ホスト名

このフィールドは、「**Socks サーバーの使用**」チェック・ボックスを選択した場合に使用可能になります。Socks サーバーの完全修飾ホスト名を入力してください。

Socks ポート番号

このフィールドは、「**Socks サーバーの使用**」チェック・ボックスを選択した場合に使用可能になります。Socks サーバーが使用するポート番号を入力してください。

ログ・システム

トレース・ファイルの場所

これは、デバッグ情報の収集先となるファイルの場所です。その中には、英語のデバッグ・メッセージが入れられます。注: 「トレース・ファイルの場所」が「メッセージ・ファイルの場所」と同じときは、それらのファイルの内容はマージされます。

トレース・ファイル・サイズ

これは、トレース・ファイルの最大サイズ (MB) です。トレース・ファイルがこのサイズに達すると、別のトレース・ファイルが作成されます。

メッセージ・ファイルの場所

これは、WebSphere Commerce システムの状態を記述するメッセージの収集先ファイルの場所です。メッセージは、ロケールに依存します。注: 「トレース・ファイルの場所」が「メッセージ・ファイルの場所」と同じときは、それらのファイルの内容はマージされます。

メッセージ・ファイル・サイズ

これは、メッセージ・ファイルの最大サイズ (MB) です。メッセージ・ファイルがこのサイズに達すると、追加のメッセージ・ファイルが作成されます。

アクティビティー・ログ・キャッシュ・サイズ

アクティビティー・ログのキャッシュの最大サイズを入力します。

通知使用可能

エラー・レベル・メッセージが通知されるようにする場合には、このチェック・ボックスを選択します。それらのメッセージを受け取るには、WebSphere Commerce 管理コンソールでも通知情報を変更する必要があります。

メッセージング

ユーザー・テンプレート・ファイル

これは、新しいインバウンド XML メッセージがシステムでサポートされるようにするための XML メッセージ・テンプレート定義ファイルの名前です。このファイルには、サポートする新しい XML メッセージごとに 1 つのアウトラインを追加する必要があります。テンプレート・パス・ディレクトリーに保存されるデフォルトの `user_template.xml` を使用することをお勧めします。

インバウンド・メッセージ DTD パス

これは、インバウンド XML メッセージのすべての DTD ファイルの保存先となるパスです。デフォルトは `/opt/WebSphere/CommerceServer/xml/messaging` です。

WebController ユーザー ID

これは、すべての WebSphere Commerce MQSeries® アダプター・インバウンド・メッセージを実行するために WebSphere Commerce が使用する ID です。この ID は、サイト管理者権限が付与されたものでなければなりません。デフォルトは `wcsadmin` です。ユーザー・テンプレート・ファイルとシステム・テンプレート・ファイルを更新するための権限は、許可された人だけに付与されるようにしてください。というのは、この ID の使用により WebSphere Commerce コマンドを実行するためにインバウンド XML メッセージをマッピングできるからです。

システム・テンプレート・ファイル

これは、WebSphere Commerce MQSeries アダプターによってサポートされるすべてのインバウンド XML メッセージのアウトラインを含む XML メッセージ・テンプレート定義ファイルの名前です。このファイルは、メッセージを該当する WebSphere Commerce コントローラー・コマンドにマッピングし、メッセージ内の各フィールドをそのコマンドの該当するパラメーターにマッピングすることにより、各メッセージのデータ・フィールドを定義します。テンプレート・パス・ディレクトリーに保存されるデフォルトの `sys_template.xml` を使用することをお勧めします。

テンプレート・パス

これは、ユーザー・テンプレート・ファイルとシステム・テンプレート・ファイルの保存先のパスです。デフォルトは `/opt/WebSphere/CommerceServer/xml/messaging` です。

インバウンド・メッセージ DTD ファイル

これは、インバウンド XML メッセージのための DTD および組み込みファイルのリストです。新しいインバウンド XML メッセージを追加する場合は、それをこのフィールドに追加する必要があります。

オークション

オークションを使用可能にする

オークションを使用可能にする場合、「使用可能」チェック・ボックスを選択します。

SMTP サーバー

E メール・メッセージを受け取るのに使う SMTP サーバーを定義します。

応答 E メール

送信側の E メール情報を定義します。

インスタンス作成の開始

すべてのパネルに必要な情報を入力したなら、「終了」ボタンが使用可能になります。「終了」をクリックすると、WebSphere Commerce インスタンスが作成されます。

Oracle データベースを取り込むかどうか尋ねられます。データベースを取り込む場合は「はい」を、データベースを取り込まない場合は「いいえ」を選択します。

システムの速度によって、インスタンスの作成に数分から数時間かかることがあります。インスタンス作成が開始されると進行状況表示バーが表示されます。プロセスが完了すると、そのことが進行状況表示バーに示されます。インスタンスが作成されると WebSphere Commerce は、そのインスタンスに関連する WebSphere Commerce Server の開始を試行します。この試行が正常に完了したら、「OK」をクリックして、「インスタンス作成」ウィザードをクローズしてから、コンピューターを再始動します。

インスタンス作成の検証

インスタンスが正しく作成されたことを確認するには、以下のファイルを調べます。

- /opt/WebSphere/CommerceServer/instances/*instance_name*/xml/*instance_name.xml*。このファイルには、作成される WebSphere Commerce インスタンスについての構成情報がすべて入れられます。
- /opt/WebSphere/CommerceServer/instances/*instance_name*/logs/createdb.log。このファイルには、WebSphere Commerce データベース作成に関する情報が入れられます。
- /opt/WebSphere/CommerceServer/instances/*instance_name*/logs/populatedb.log。このファイルには、WebSphere Commerce データベース移植処理に関する情報が入れられます。

- /opt/WebSphere/CommerceServer/instances/*instance_name*/logs/WASConfig.log。このファイルには、WebSphere Application Server 中の新規 WebSphere Commerce インスタンスのインストールと構成に関する情報が入れられます。
- /opt/WebSphere/CommerceServer/instances/*instance_name*/logs/sec_check.log。このファイルには、機密漏れの可能性に関する情報が入れられます。
- /opt/WebSphere/CommerceServer/instances/*instance_name*/logs/wcs.log。このファイルには、WebSphere Commerce アプリケーション・サーバーの操作に関する情報が記録されます。このログを使用して、サーバーが正しく開始されたことを確認してください。

インスタンスの開始と停止

インスタンスが作成されると、インスタンスは自動的に開始されます。あとでインスタンスを変更する場合は、WebSphere Application Server 管理コンソールで、インスタンスの停止と再始動を行う必要があります。そのためには、以下のステップを完了します。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。
2. **WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)** を拡張表示します。
3. 「ノード」を拡張表示します。
4. ホスト名を拡張表示します。
5. 「**Application Servers (アプリケーション・サーバー)**」を拡張表示します。
6. 「**WebSphere Commerce Server**」 - 「*instance_name*」を選択し、右マウス・ボタン・クリックします。必要に応じて「**開始**」または「**停止**」を選択します。

構成の追加オプション

基本インスタンスを作成して開始したら、以下のノードで、WebSphere Commerce をさらに構成することができます。

インスタンス・プロパティ

インスタンス作成ウィザードで使用可能だったすべてのパネルが、「構成マネージャー」の「インスタンス・プロパティ」ノードの下に表示されます。以下のパネルは新規のものか、または「インスタンス作成ウィザード」パネルから変更されたものです。

データベース

構成マネージャーの「データベース」パネルを使用して、WebSphere Commerce を特定のデータベースで作業するように構成します。以下のようにフィールドに入力します。

データベース管理者名

データベース管理者の名前を入力します。

データベース管理者パスワード

データベース管理者のパスワードを入力します。

データベース名

このインスタンス用に作成するデータベースの名前を入力するか、または作成するインスタンスに関連付ける既存のデータベースの名前を入力します。

データベース・タイプ

データベース管理システムとして使用する製品を選択します。

Oracle インスタンス・ユーザー ID

このフィールドは、データベースとして Oracle を選択した場合のみ使用可能です。 Oracle コマンドを発行するユーザーのシステム ID を入力します。

データベース・ユーザー名

このデータベースのユーザー名を入力します。データベース管理システムとして Oracle を使用する場合は、データベースのインストール時に作成したユーザー名を入力します。

データベース・ユーザー・パスワード

このデータベースのユーザー名に関連付けられているパスワードを入力します。

ステージング・サーバーの使用

このデータベースをステージング・サーバーに使用する場合は、このチェック・ボックスを選択します。

アクティブ・データベースとして設定

このデータベースが WebSphere Commerce インスタンスで使用するデータベースの場合は、このチェック・ボックスを選択します。インスタンスの作成後、追加のデータベースを複数作成して、インスタンスで使用するものを選択することができます。

リモート・データベースの使用

データベース・サーバーが WebSphere Commerce とは異なるノード上にある場合は、このチェック・ボックスを使用可能にします。

注: WebSphere Commerce と異なるノードにデータベース・サーバーをインストールしている場合、このチェック・ボックスを選択する必要があります。それはたとえば、2 層または 3 層環境を構成する場合です。

データベース・サーバー・ホスト名

このフィールドは、「リモート・データベースの使用」を選択した場合に使用可能です。データベースが存在するノードの完全修飾ホスト名を入力します。

データベース・サーバー・ポート

このフィールドは、「リモート・データベースの使用」を選択した場合に使用可能です。Oracle のデフォルト・ポートは、1521 です。

WebSphere

構成マネージャーの「WebSphere」パネルを使用して、WebSphere Application Server が WebSphere Commerce と対話する方法を構成します。以下のようにフィールドに入力します。

データ・ソース名

WebSphere Commerce が作業するデータベースにアクセスするための接続プールのセットアップに使用します。

ポート番号

WebSphere Application Server が接続されているポート・アドレスを入力します。87 ページの『インストール後スクリプトの実行』で指定されているとおり、WebSphere Application Server が listen するポート・アドレスを入力します。デフォルトは 2222 です。WebSphere Application Server の開始時に別のポートを指定していなければ、デフォルトを受け入れることができます。

JDBC ドライバーの場所

JDBC ファイル (名前は classes12.zip) の場所を入力します。

ストア Web アプリケーション

WebSphere Application Server において WebSphere Commerce Server の下にデフォルトのストア Web アプリケーションを構成する場合、これを選択します。

ツール Web アプリケーション

WebSphere Application Server において WebSphere Commerce Server の下にデフォルトのツール Web アプリケーションを構成する場合、これを選択します。

ツールのポート番号

WebSphere Commerce の管理ツールへのアクセスに使用されるポート番号。デフォルト・ポート番号は、8000 です。Domino Web サーバーをご使用の場合は、このポート番号を 443 に変更する必要があります。

WebSphere Catalog Manager

このチェック・ボックスを選択すると、WebSphere Catalog Manager WebEditor がインストールされます。これには、`http://host_name:8000/webeditor` でアクセスすることができます。これはデフォルトでインストールされます。

Web サーバー

「Web サーバー」パネルの「一般」タブには、「インスタンス作成」ウィザードで表示されるバージョンのパネルと同じパラメーターが示されています。

構成マネージャーの「Web サーバー」パネルを使って、WebSphere Commerce を Web サーバーを使用するように構成します。以下のようにフィールドに入力します。

リモート Web サーバーの使用

Web サーバーを WebSphere Commerce サーバーとは別のマシンにインストー

ルする場合は、このチェック・ボックスを選択します。このボックスが選択されると、Web サーバーは構成マネージャーでは構成されません。

注: WebSphere Commerce と異なるノードに Web サーバーをインストールした場合、このチェック・ボックスを選択する必要があります。それはたとえば、3 層環境を構成する場合です。

ホスト名

WebSphere Commerce インスタンスの完全修飾ホスト名を入力します (完全修飾は `hostname.domain.com` という形式です)。「ホスト名」フィールドに `www` を入力しないでください。デフォルトは、Web サーバーがインストールされているマシンの完全修飾ホスト名です。

Web サーバー・タイプ

ドロップダウン・リストから、使用する Web サーバー・ソフトウェアを選択します。

1 次文書ルート

Web サーバーの文書ルートのパスとして、デフォルトをそのまま受け入れるか、または入力します。入力するパスは、既存のパスでなければなりません。

サーバー・ポート

Web サーバーが実行されるポート番号を入力します。デフォルト値は、80 です。

認証モード

この WebSphere Commerce インスタンスで使用する認証モードを選択します。選択肢は以下のとおりです。

- 基本認証は、カスタム証明書を使って実行されます。
- X509 認証は、X509 証明書規格を使って実行されます。

セキュア・サーバー構成パス

セキュア Web サーバー (ポート 443) 用の `obj.conf` ファイルのディレクトリー・パスを入力します。このフィールドは、Web サーバーとして Netscape iPlanet を使用する場合のみ表示されます。リモート Web サーバーをご使用の場合には、このフィールドは表示されません。

非セキュア・サーバー構成パス

非セキュア Web サーバー (ポート 80) 用の `obj.conf` ファイルのディレクトリー・パスを入力します。このフィールドは、Web サーバーとして Netscape iPlanet を使用する場合のみ表示されます。リモート Web サーバーをご使用の場合には、このフィールドは表示されません。

セキュア・ツール・サーバー構成パス

このフィールドは、Netscape iPlanet を Web サーバー (ポート 8000) として選択した場合のみ表示されます。Netscape iPlanet セキュア・ツール・サーバー

の `obj.conf` ファイルの絶対パスを入力します。リモート Web サーバーをご使用の場合には、このフィールドは表示されません。

「**拡張**」タブには、すべての Web サーバーの別名のリストが含まれています。新規の別名を追加するには、「**拡張**」タブを選択し、マウスの右ボタンでクリックして、「**Add row (行の追加)**」を選択します。別名を削除するには、削除したい別名を選択し、マウスの右ボタンでクリックして、「**Delete row (行の削除)**」を選択します。

インスタンス

構成マネージャーの「インスタンス」パネルは、インスタンスに関する基本情報を指定するときに使用します。複数のインスタンスを作成する場合は、各インスタンスが異なる名前とルート・パスを持つようにしてください。

インスタンス名

WebSphere Commerce インスタンスに付ける名前を入力します。デフォルト名 "demo" を受け入れることもできます。この名前はあとで変更できないため、慎重に選んでください。

インスタンスのルート・パス

WebSphere Commerce インスタンスに関連するすべてのファイルを保存するパスを入力します。インスタンスが作成されたら、このパスを変更することはできません。デフォルト・パスは次のとおりです。

```
/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/instance_name
```

マーチャント・キー

これは、構成マネージャーが暗号鍵として使用する 16 桁の 16 進数です。マーチャント・キーには 1 つ以上の英数字 (a ~ f) と 1 つ以上の数字 (0 ~ 9) がなければなりません。英数字は小文字で入力しなければならず、1 行に 5 回以上同じ文字を入力することはできません。ストアを作成した後は、この鍵を変更できません。「マーチャント・キー」フィールドには、デフォルトの鍵がすでに入力されている場合でも、ユーザー独自の鍵を入力しなければなりません。特に実動サーバーの場合、サイト保護に十分な鍵を入力するようにしてください。

PDI 暗号化

ORDPAYINFO および ORDPAYMTHD テーブルに指定された情報を暗号化するには、このチェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択すると、支払い情報がデータベースに暗号化された形式で保管されます。

PVC ヘッダー使用可能

将来のリリースのために予約済み。

URL マッピング・ファイル

URL マッピングのために使用するファイルのパスを入力します。デフォルトのファイル `/opt/WebSphere/CommerceServer/properties/urlmapper.xml` をそのまま使用することもできます。

Payment Manager

ホスト名

Web サーバー・マシンの完全修飾ホスト名を入力します。デフォルトは WebSphere Commerce ホスト名です。リモート・マシンに Payment Manager をインストールしている場合は、このフィールドには Web サーバー・マシンの完全修飾ホスト名を入れてください。

プロファイル・パス

WebSphere Commerce Payment Manager Cashier の標準のプロファイルの保存先ディレクトリーの絶対パス名。デフォルト値は `/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/instance_name/xml/payment` です。

非 SSL Payment Manager クライアントの使用

WebSphere Commerce に非 SSL Payment Manager クライアントを使用して Payment Manager サーバーと通信させる場合は、このチェック・ボックスをオンにします。それにより、WebSphere Commerce Server は、SSL を使わずに Payment Manager と通信できるようになります。

Web サーバー・ポート

Payment Manager が使用する Web サーバーの TCP ポートを入力します。「非 SSL Payment Manager クライアントの使用」をオンにした場合、このフィールドのデフォルト値は 80 (非セキュア・ポート) です。そのチェック・ボックスをオンにしなかった場合、このフィールドのデフォルト値は 443 (SSL ポート) です。

Socks サーバーの使用

WebSphere Commerce が Payment Manager にアクセスするために Socks サーバーが必要な場合、このチェック・ボックスをオンにします。

Socks ホスト名

このフィールドは、「**Socks サーバーの使用**」チェック・ボックスを選択した場合に使用可能になります。Socks サーバーの完全修飾ホスト名を入力してください。

Socks ポート番号

このフィールドは、「**Socks サーバーの使用**」チェック・ボックスを選択した場合に使用可能になります。Socks サーバーが使用するポート番号を入力してください。

メンバー・サブシステム

構成マネージャーの「メンバー・サブシステム」パネルを使用して、WebSphere Commerce をディレクトリー・サーバーを使用するように構成します。

認証モード

「LDAP」、「データベース」、または「その他」を選択して、認証の代替モードを選択します。「LDAP」を選択すると、このパネルの他のフィールドは使用できません。

LDAP バージョン

WebSphere Commerce Server が LDAP サーバーとの通信に使用する LDAP プロトコルのバージョン。

LDAP タイプ

WebSphere Commerce で使用するディレクトリー・サーバーのソフトウェアを選択します。

単一サインオン

WebSphere Application Server によってすでに認証済みのユーザーが WebSphere Commerce で認識されるようにするには、このチェック・ボックスを選択します。現時点では、単一サインオンは WebSphere Commerce によってサポートされていません。

ホスト LDAP サーバーがインストールされている場所を指定する完全修飾ホスト名。

ポート LDAP サーバーで使用されるポート。デフォルト・ポートは、389 です。

管理者識別名

LDAP サーバー管理者の識別名。

管理者のパスワード

LDAP サーバー管理者のパスワード。

確認パスワード

LDAP 管理者のパスワードを再入力します。

LDAP 認証モード

LDAP サーバーが使用する認証メカニズムを指定します。「なし」の場合は、WebSphere Commerce は LDAP サーバーに認証されないこととなります。

「シンプル」の場合は、WebSphere Commerce は LDAP サーバーへの認証に識別名とパスワードを使用することとなります。

タイムアウト

LDAP の検索がタイムアウトになるまでの時間 (秒数)。

エントリー・ファイル名

LDAP サーバーの初期設定に使用されるエントリー・ファイル。

メッセージング

ユーザー・テンプレート・ファイル

これは、新しいインバウンド XML メッセージがシステムでサポートされるようにするための XML メッセージ・テンプレート定義ファイルの名前です。このファイルには、サポートする新しい XML メッセージごとに 1 つのアウト

ラインを追加する必要があります。テンプレート・パス・ディレクトリーに保存されるデフォルトの `user_template.xml` を使用することをお勧めします。

インバウンド・メッセージ DTD パス

これは、インバウンド XML メッセージのすべての DTD ファイルの保存先となるパスです。デフォルトは `/opt/WebSphere/CommerceServer/xml/messaging` です。

WebController ユーザー ID

これは、すべての WebSphere Commerce MQSeries アダプター・インバウンド・メッセージを実行するために WebSphere Commerce が使用する ID です。この ID は、サイト管理者権限が付与されたものでなければなりません。デフォルトは `wcsadmin` です。ユーザー・テンプレート・ファイルとシステム・テンプレート・ファイルを更新するための権限は、許可された人だけに付与されるようにしてください。というのは、この ID の使用により WebSphere Commerce コマンドを実行するためにインバウンド XML メッセージをマッピングできるからです。

システム・テンプレート・ファイル

これは、WebSphere Commerce MQSeries アダプターによってサポートされるすべてのインバウンド XML メッセージのアウトラインを含む XML メッセージ・テンプレート定義ファイルの名前です。このファイルは、メッセージを該当する WebSphere Commerce コントローラー・コマンドにマッピングし、メッセージ内の各フィールドをそのコマンドの該当するパラメーターにマッピングすることにより、各メッセージのデータ・フィールドを定義します。テンプレート・パス・ディレクトリーに保存されるデフォルトの `sys_template.xml` を使用することをお勧めします。

テンプレート・パス

これは、ユーザー・テンプレート・ファイルとシステム・テンプレート・ファイルの保存先のパスです。デフォルトは `/opt/WebSphere/CommerceServer/xml/messaging` です。

インバウンド・メッセージ DTD ファイル

これは、インバウンド XML メッセージのための DTD および組み込みファイルのリストです。新しいインバウンド XML メッセージを追加する場合は、それをこのフィールドに追加する必要があります。

セッション管理

構成マネージャーの「セッション管理」パネルには、以下に示す 2 つのタブがあります。

「一般」タブ:

cookie 使用可能

このチェック・ボックスでは、セッション管理用に cookie をサイトで使用することを指定します。これは、WebSphere Commerce の場合は、常に使用可能になっています。

URL 再書き込み使用可能

セッション管理に URL 再書き込みを使用する場合は、このチェック・ボックスを選択します。

cookie 受け入れテスト

ショッピングのブラウザーが、cookie のみサポートしているサイトの cookie を受け入れるかどうか調べる場合は、このチェック・ボックスを選択します。

cookie セッション・マネージャー

cookie の管理に、WebSphere Commerce と WebSphere Application Server の、どちらを使用するかを選択することができます。デフォルトは WebSphere Commerce です。

「拡張」タブ:**cookie パス**

cookie のパスを指定します。これは cookie の送信先の URL のサブセットです。

cookie 有効期限

このフィールドは変更できません。デフォルトでは、ブラウザーがクローズされたときに cookie の有効期限が切れます。

cookie ドメイン

ドメインの制限パターンを指定します。cookie を受け取るサーバーを、ドメインで指定します。デフォルトでは、cookie はその発信元の WebSphere Commerce サーバーだけに返送されます。

セキュリティ

セキュリティは、構成マネージャーを介して構成できます。

セキュリティ使用可能

EJB セキュリティーを使用可能にするには、このチェック・ボックスを選択します。

注: このチェック・ボックスを選択する前に、WebSphere Application Server 内でグローバル・セキュリティ設定を有効にしてください。

認証モード

ユーザーの認証に使用するレジストリーのタイプを決定します。オペレーティング・システムのユーザー・レジストリーと LDAP のユーザー・レジストリーがあります。

ユーザー ID

各 EJB にアクセスできるユーザー名を入力します。

ユーザー・パスワード

上記のユーザー ID に関連付けられているパスワードを入力します。

パスワード無効化

パスワード無効化機能を使用可能または使用不可にするには、「構成マネージャー」の「パスワード無効化」ノードを使用します。この機能を使用可能にすると、WebSphere Commerce ユーザーのパスワードの有効期限が切れると、そのユーザーはパスワードの変更を要求されます。その場合、ユーザーは、パスワードの変更が必要となるページにリダイレクトされます。ユーザーは、パスワードの変更を完了するまで、そのサイトのどのセキュア・ページにもアクセスすることができません。この機能を使用可能にするには、以下のようにします。

1. 構成マネージャーの「パスワード無効化」ノードに移動します。これは、「*instance_name*」 → 「インスタンス・プロパティ」の下にあります。
2. パスワード無効化機能をアクティブにするには、「使用可能」チェック・ボックスをクリックします。
3. インスタンスの変更を適用するには、「適用」をクリックします。
4. インスタンスの構成が正常に更新されると、更新が正常に行われたことを示すメッセージが表示されます。

ログイン・タイムアウト

構成マネージャーの「ログイン・タイムアウト」ノードを使って、ログイン・タイムアウト機能を使用可能または使用不可にします。この機能を使用可能にすると、長時間にわたって非アクティブの WebSphere Commerce ユーザーは、システムからログオフされ、ログオンし直すように要求されます。その後ユーザーが正常にログオンすると、WebSphere Commerce は、そのユーザーによって行われていた元の要求を実行します。ユーザーのログオンが失敗した場合は、元の要求は廃棄され、そのユーザーはシステムからログオフされたままになります。この機能を使用可能にするには、以下のようにします。

1. 「構成マネージャー」を呼び出し、次のようにして、インスタンスの「ログイン・タイムアウト」ノードに移動します。
「WebSphere Commerce」 → 「*host_name*」 → 「インスタンス・リスト」 → 「*instance_name*」 → 「インスタンス・プロパティ」 → 「ログイン・タイムアウト」
2. ログイン・タイムアウト機能をアクティブにするには、「使用可能」チェック・ボックスをクリックします。
3. 「ログイン・タイムアウト値」フィールドに、ログイン・タイムアウト値を秒単位で入力します。
4. インスタンスの変更を適用するには、「適用」をクリックします。

5. インスタンスの構成が正常に更新されると、更新が正常に行われたことを示すメッセージが表示されます。

パスワード保護されたコマンド

「パスワード保護されたコマンド」機能を使用可能または使用不可にするには、「構成マネージャー」の「パスワード保護されたコマンド」ノードを使用します。この機能を使用可能にすると、WebSphere Commerce ではユーザーは、まずパスワードを入力してから、指定の WebSphere Commerce コマンドの実行要求に移るよう求められます。この機能を使用可能にするには、以下のようになります。

1. 構成マネージャーをオープンし、次のようにして、インスタンスの「パスワード保護されたコマンド」ノードに移動します。「**WebSphere Commerce**」 → 「*host_name*」 → 「インスタンス・リスト」 → 「*instance_name*」 → 「インスタンス・プロパティ」 → 「パスワード保護されたコマンド」
2. 「一般」タブで、以下のようになります。
 - a. 「パスワード保護されたコマンド」機能をアクティブにするには、「使用可能」をクリックします。
 - b. 「再試行」フィールドに再試行の回数を入力します。(デフォルトの再試行回数は 3 です。)
3. 「拡張」タブで、以下のようになります。
 - a. 保護したい WebSphere Commerce コマンドを「Password Protected Command List (パスワード保護されたコマンドのリスト)」ウィンドウのリストから選択して、「追加」をクリックします。選択したコマンドが「Current Password Protected List (現行のパスワード保護されたコマンドのリスト)」ウィンドウにリストされます。
 - b. いずれかの WebSphere Commerce コマンドのパスワード保護を使用不可にしたい場合は、「Current Password Protected Command list (現行のパスワード保護されたコマンドのリスト)」ウィンドウにあるコマンドを選択して、「除去」をクリックします。
4. インスタンスの変更を適用するには、「適用」をクリックします。
5. インスタンスの構成が正常に更新されると、更新が正常に行われたことを示すメッセージが表示されます。

注: WebSphere Commerce では、使用可能コマンドのリストの CMDREG テーブルで「認証済み」として指定されているコマンドのみ表示します。

サイト間スクリプト保護

サイト間スクリプト保護機能を使用可能または使用不可にするには、「構成マネージャー」の「サイト間スクリプト保護」ノードを使用します。この機能を使用可能にすると、許可しないものとして指定されている属性または文字を含むユーザー要求は、すべて拒否されます。構成マネージャーのこのノードで、許可しない属性と文字を指定することができます。この機能を使用可能にするには、以下のようになります。

1. 構成マネージャーをオープンし、次のようにして、インスタンスの「サイト間スクリプト保護」ノードに移動します。
「WebSphere Commerce」 → 「host_name」 → 「インスタンス・リスト」 → 「instance_name」 → 「インスタンス・プロパティ」 → 「サイト間スクリプト保護」
2. サイト間スクリプト保護機能をアクティブにするには、次のように「一般」タブを使用します。
 - a. 「使用可能」をクリックします。
 - b. WebSphere Commerce コマンドに対して許可したくない属性を追加するには、「禁止属性」テーブルをマウスの右ボタンでクリックして、「**行の追加**」を選択します。許可したくない属性をコンマ (,) で区切って追加します。たとえば、user_id, passwd のようにします。
 - c. 「禁止属性」テーブルから属性を除去するには、そのテーブルにあるその属性を含む行を強調表示して、それをマウスの右ボタンでクリックし、「**行の削除**」を選択します。
 - d. WebSphere Commerce コマンドには許可したくない文字を追加するには、「禁止文字」テーブルをマウスの右ボタンでクリックして、「**行の追加**」を選択します。許可したくない文字をコンマ (,) で区切って追加します。たとえば、<, > のようにします。
 - e. 「禁止文字」テーブルから文字を除去するには、「禁止文字」テーブルにあるその文字を含む行を強調表示して、それをマウスの右ボタンでクリックし、「**行の削除**」を選択します。
3. 選択した WebSphere Commerce コマンドの指定した属性のサイト間スクリプト保護を使用不可にするには、次のように「拡張」タブを使用します。
 - a. 「コマンド・リスト」ボックスからコマンドを選択します。
 - b. 属性をコンマで区切ったリストを入力します。それらについては、「例外属性のリスト」ウィンドウで禁止文字が許可されます。「**追加**」をクリックします。
 - c. コマンドをその属性とともに除去するには、「例外コマンドのリスト」ウィンドウからそのコマンドを選択して、「**除去**」をクリックします。

属性を選択して「**除去**」をクリックすることにより、コマンドから特定の属性を除去することもできます。
4. 構成マネージャーへの変更を適用するには、「**適用**」をクリックします。
5. インスタンスの構成が正常に更新されると、更新が正常に行われたことを示すメッセージが表示されます。

取引

取引は、構成マネージャーを介して構成できます。

XML パス

取引コンポーネント用の xml ファイルが保管される場所のパス。

DTD パス

取引コンポーネント用の dtd ファイルが保管される場所のパス。

DTD ファイル名

取引コンポーネント用の dtd ファイル名。

コラボレーション - SameTime

Lotus Sametime は、カスタマー・ケアのコラボレーションを可能にします。これは、顧客サービス担当者とストアの顧客またはパイヤーの間で、Lotus Sametime を使用して、同期テキスト・インターフェース (インスタント・メッセージング (IM)) を介した顧客サービス・リアルタイム・サポートを提供します。

使用可能

カスタマー・ケアのコラボレーション機能をサイトで使用可能にする場合は、このチェック・ボックスを選択します。

ホスト名

Sametime サーバーの完全修飾ホスト名を入力します (完全修飾は hostname.domain.com という形式です)。「ホスト名」フィールドに www を入力しないでください。デフォルトは、WebSphere Commerce サーバーがインストールされているマシンの完全修飾ホスト名です。

登録 URL

Sametime サーバーの登録 URL を入力します。サイト管理者は、WebSphere Commerce 管理コンソールのユーザー・リスト「Register Customer Care (カスタマー・ケアの登録)」ボタンを使用して、Sametime サーバーにお客様サービス担当者を登録できます。

アプレット CodeBase URL

すべてのアプレット・コードが配置されているアプレット CodeBase URL を入力します。アプレット・コードが Sametime サーバー・マシンにインストールされていることを確認してください。

モニター・タイプ

カスタマー・ケア・アプレットで使用するモニターのタイプを選択します。

- 待機中のキューのモニター。
- ストア内のすべてのショッパーのモニター。
- ストア内のすべての待機中のキューとすべてのショッパーのモニター。

デフォルトは、待機中のキューのモニターです。

開始タイプ

カスタマー・ケアのコラボレーション中にヘルプ要求を開始できる人物を選択します。

- ショッパーによるヘルプの開始。
- 顧客と CSR の両方によるヘルプの開始。

ヘルプ・セッション限度

顧客サービス担当者が一度にオープンできるヘルプ・セッションの数を設定する値を入力します。この値は整数でなければなりません。デフォルト値は 7 です。

コラボレーション・ワークスペース - ディレクトリー・アクセス

Business

ディレクトリー・アクセスを適正に構成するためには、メンバー・サブシステムの認証モードとして LDAP を指定しなければなりません。

BaseDN

WebSphere Commerce メンバー・サブシステムで使用される LDAP の接尾部です (例、o= ルート組織)。

コラボレーション・ワークスペース - QuickPlace

Business

QuickPlace は、チーム・コラボレーションに使用されるセルフサービスの Web ツールです。QuickPlace によって、Web 上に安全な中央ワークスペースをただちに作成できます。即時に参加できるように構造化されているため、チームは QuickPlace を使用して以下のことを実行できます。

- 調整: 人員、タスク、計画、およびリソース。
- コラボレート: アイデアの共用とディスカッション、問題の解決、文書の共著、ファイルの交換、および情報共有の管理。
- 通信: アクションと決定、鍵検索とレッスン、広範囲の読者を対象とした出版知識。

チームは、プロジェクト管理、随時イニシアチブに対する迅速な応答、および拡張された企業と値のチェーンに及ぶ個別のビジネス・プロセスを促進するために QuickPlace を使用します。

ドメイン

QuickPlace サーバーのドメイン。

ホスト名

QuickPlace サーバーのホスト名。

管理者ログイン

Domino 管理者のログイン名の末尾 /domain を追加したもの。

管理者のパスワード

Domino 管理者のパスワード。

コラボレーション管理者

コラボレーション・ワークスペース機能のスーパーユーザーのログイン名の末尾に /domain を追加したもの。

コラボレーション管理パスワード

コラボレーション・ワークスペースのスーパーユーザーのパスワード。

ロケール

QuickPlace サーバーのロケール。

コンポーネント

コンポーネント・ノードには、 WebSphere Commerce インスタンスのために作成したすべてのコンポーネントのリストが入っています。コンポーネントを選択して「Enable Component (コンポーネント使用可能)」チェック・ボックスを選択すれば、任意のコンポーネントを使用可能または使用不可にすることができます。個々のコンポーネントについての詳細は、WebSphere Commerce のオンライン・ヘルプを参照してください。

このノードで、コンポーネントの作成または削除も行うことができます。コンポーネントを除去するには、それを選択し、マウスの右ボタンをクリックして「コンポーネントの除去」を選択します。コンポーネントを追加するには、「コンポーネント」を選択し、マウスの右ボタンをクリックして、「コンポーネントの作成」を選択します。そのコンポーネントに付ける名前、およびそのコンポーネントに関連付けるクラスを入力して、「コンポーネント使用可能」を選択します。

保護パラメーター

保護パラメーターとは、 WebSphere Commerce で生成されるトレース・ファイルの中のブレーン・テキストには値が現れないパラメーターのことです。これには、クレジット・カード番号やユーザー・パスワードなどの機密情報が含まれます。構成マネージャーの「保護パラメーター」パネルには、現在保護されているすべてのパラメーターのリストが表示されます。

このリストにパラメーターを追加するには、以下のステップを完了します。

1. 「保護パラメーター」パネルでマウスの右ボタンをクリックして、「**行の追加**」を選択します。
2. 作成されているテーブルの行に、保護するパラメーターの名前を入力します。
3. 「**適用**」をクリックします。

このリストからパラメーターを除去するには、パラメーターをマウスの右ボタンでクリックして、「**行の削除**」を選択します。

レジストリー

レジストリーは通常、データベースに保管される、比較的静的な情報をキャッシュに入れるために使用されます。 RequestServlet の初期化の際に、レジストリー・マネージャーが、構成マネージャーを介して定義されたすべてのレジストリーを、 WebSphere Commerce の内部定義されたレジストリーとともに初期化します。 データベース情報は、パフォーマンスの向上のためにレジストリー内のキャッシュに入れられます。

レジストリーを作成するには、「レジストリー」をマウスの右ボタンでクリックして、「レジストリーの作成」を選択します。これにより「レジストリーの作成」ウィザードが起動します。以下のようにフィールドに入力します。

レジストリー名

作成するレジストリーに割り当てる名前を入力します。

レジストリー・クラス名

新規のレジストリーに関連付けるクラスの名前を入力します。

オークション

オークションを使用可能にする

オークションを使用可能にする場合、「使用可能」チェック・ボックスを選択します。

SMTP サーバー

E メール・メッセージを受け取るのに使う SMTP サーバーを定義します。

応答 E メール

送信側の E メール情報を定義します。

外部サーバー・リスト

外部サーバー・リストには、デフォルトの LikeMinds サーバー・アドレスが含まれています。また、外部イベントを処理するリスナー・クラスのリストも含まれています。

LikeMinds リスナーは、デフォルトで追加されています。このリスナーにより、外部イベントが LikeMinds サーバーに追加されます。

Commerce アクセラレーター

構成マネージャーの Commerce アクセラレーター・ノードを使用すると、WebSphere Commerce のビジネス・インテリジェンス・コンポーネントを構成して、それを WebSphere Commerce Analyzer に組み込むことができます。Commerce Analyzer は、WebSphere Commerce に付属のオプションのソフトウェア・パッケージです。Commerce Analyzer のインストールと構成についての詳細は、*WebSphere Commerce 追加ソフトウェア・ガイド* を参照してください。

ビジネス・インテリジェンスを構成するには、以下のフィールドに入力します。

統計ソース

統計データが保持されているマシンの完全修飾ホスト名を入力します。これは、実動サーバーかステージング・サーバーのどちらかにすることができます。デフォルト値は、WebSphere Commerce がインストールされているマシンです。

WebSphere Commerce Analyzer はインストールされていますか？

Commerce Analyzer をインストールし、構成してある場合に、それを WebSphere Commerce で使用するには、「はい」を選択します。

レポート文書ルート

Commerce Analyzer によって作成されるレポートを保管する場所のパスを入力します。このフィールドに入力されたパスは、インスタンス・ディレクトリー・ルートの終わりに付加されます。デフォルトのパスは、`/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/instance_name` です。

ログ・システム

「ログ・システム」ノードの「一般」タブには、インスタンス作成ウィザードに含まれているすべてのパラメーターが含まれています。「拡張」タブを使用すると、トレース・ファイルに入れるコンポーネントと障害追跡のレベルを選択することができます。トレースするコンポーネントとそのトレース・レベルを選択して、「適用」をクリックします。

個々のコンポーネントについての詳細は、WebSphere Commerce のオンライン・ヘルプを参照してください。

キャッシング・サブシステム

構成マネージャーのキャッシュ・ノードを使用して、キャッシュの構成、キャッシュへのコマンドの追加、コマンドからの鍵セットの除去、および鍵セットからの鍵の除去を行うことができます。

キャッシュ・ノードを選択して、適切な値を入力することにより、キャッシュを構成します。これらの値についての追加情報は、構成マネージャーの「ヘルプ」をクリックするか、または「Caching Parameters (キャッシュ・パラメーター)」でのオンライン・ヘルプで参照してください。

キャッシュにコマンドを追加するには、キャッシュ・ウィザードを使用します。このウィザードを起動するには、「キャッシュ」をマウスの右ボタンでクリックして、「**Add a command to the cache (キャッシュへコマンドを追加)**」を選択します。3つのパネルのフィールドをすべて入力して、すべてのパラメーターを入力したら「終了」をクリックします。キャッシュからコマンドを除去するには、除去するコマンドを選択してマウスの右ボタンでクリックし、「**Remove a command from the cache (キャッシュからコマンドを除去)**」を選択します。

鍵セットを削除するには、削除する鍵セットを選択してマウスの右ボタンでクリックして、「**Remove key set from this cached command (キャッシュされたコマンドから鍵セットを除去)**」を選択します。鍵を削除するには、関連した鍵を選択します。

「**Advanced (拡張)**」タブで、削除する鍵セットを選択してマウスの右ボタンでクリックしてから、「**Delete row (行の削除)**」を右マウス・ボタンでクリックします。

ストア・サービス構成

ストア・サービスを利用すると、WebSphere Commerce 付属のサンプルに基づくストア・アーカイブを短時間で作成できます。ストア・サービスの使用方法に関する追加情報については、WebSphere Commerce のオンライン・ヘルプを参照してください。

構成マネージャーの「ストア・サービス構成」ノードを使用して、ストア・サービスの以下の 3 つのパラメーターを構成できます。

一時パス

ストア・サービスが、一時ファイルを発行時にコピーする際に使用するディレクトリーです。発行が完了したら、それらのファイルはこのディレクトリーから自動的に除去されます。デフォルト・ディレクトリーは、
`/opt/WebSphere/CommerceServer/tools/devtools/temp` です。

最大エラー

発行プロセスがストア・データのロード中に許容できるエラーの最大数です。この数を超えた場合は、発行が停止してロールバックします。デフォルト値は、1 です。

コミット・カウント

この数は発行時に使用されます。レコードの各コミット・カウント数がロードされた後、データベースがコミットされます。データの中にエラーがあると、データベースは最新のコミット・ポイントまでロールバックされます。ロードするデータの量に応じてこの数を変更してください。その場合、コミット・カウントをアーカイブ内の行の数より大きな数に設定すると、ロールバックが発生した場合に、アーカイブ全体がロールバックされることとなります。デフォルト値は、1000 です。

トランスポート

デフォルトでは、E メール・トランスポート・システムが使用可能になっています。ただし、エラーの発生を防ぐために、メール・ホストを設定する必要があります。E メール・ホストを設定するには、以下のステップを完了します。

1. 「トランスポート」、「アウトバウンド」、「JavaMail」と拡張表示して、「ConnectionSpec」を選択します。
2. 「拡張」タブを選択します。
3. ホストの行の値のフィールドに、SMTP メール・サーバーの完全修飾ホスト名を入力します。
4. プロトコルの行の値のフィールドに、値として smtp がリストされていることを確認してください。
5. 「適用」をクリックします。
6. WebSphere Application Server 管理コンソールで WebSphere Commerce Server を停止してから、再始動します。

アウトバウンド・トランスポートまたはインバウンド・トランスポートの対話仕様の構成には、構成マネージャーは使用できません。トランスポート関連の作業については、オンライン・ヘルプを参照してください。

インバウンド・トランスポート接続仕様を構成するには、「接続仕様」パネルの「拡張」タブを選択して、必要に応じてその情報を変更します。トランスポート・パラメーターに関する追加情報は、オンライン・ヘルプを参照してください。

ライセンス・ユーザー管理

「ライセンス・ユーザー管理 (LUM)」パネルは、WebSphere Commerce について購入したストア・ライセンスの数を入力するために使用します。以下のようにフィールドに入力します。

ストア・ライセンス

購入したライセンスの数を入力します。

ハード・ストップ

購入したライセンスの数を超えないように WebSphere Commerce で防止するには、「ハード・ストップ」をオンにします。

ソフト・ストップ

購入したライセンスの数を超えた場合に WebSphere Commerce によって警告メッセージが表示されるようにするには、「ソフト・ストップ」をオンにします。

次のステップ

WebSphere Commerce インスタンスを構成して開始したら、システムのセットアップを終了するために、121 ページの『第 12 章 構成後のステップ』のステップを完了する必要があります。その章のステップを完了しないと、WebSphere Commerce Accelerator または WebSphere Commerce 管理コンソールにアクセスできません。

第 12 章 構成後のステップ

この章には、WebSphere Commerce の構成を終了するために完了する必要のあるすべてのステップが記載されています。この章は 2 つの項に分かれています。一方は、Web サーバーが WebSphere Commerce と同じマシン上にある構成について、もう一方は、Web サーバーが WebSphere Commerce から見てリモート側に置かれている構成について述べています。ご自分の構成に合致するほうの項の該当ステップを実行してください。

ローカル Web サーバーでの構成後のステップ

この項では、次のようなタスクについて説明します。

- iPlanet Web サーバー構成の完了
- Domino Web サーバー構成の完了
- テストのための SSL の使用可能化 (すべてのユーザー)
- Payment Manager を WebSphere Commerce と共に作動するように構成する (すべてのユーザー)
- リモート Oracle インストールの実行 (Oracle データベースが WebSphere Commerce からリモートにある場合)
- JavaServer Pages ファイルのコンパイル (すべてのユーザー)

iPlanet Web サーバー構成の完了

iPlanet Web サーバーを使用する WebSphere Commerce インスタンスを作成または更新したら、そこで行った変更を、セキュア・サーバーおよび非セキュア・サーバーの obj.conf ファイルに適用する必要があります。

1. ブラウザーで以下の URL を入力し、iPlanet Web サーバー・アドミニストレーターを立ち上げます。

`http://host_name:8888/`

2. 使用可能なサーバーのリストから非セキュア・サーバーを選択して、「**Manage (管理)**」をクリックします。

注: iPlanet Web サーバーの構成によっては、警告メッセージが表示される場合があります。「**OK**」をクリックします。

3. 右上隅の「**適用**」をクリックします。
4. 「**Load Configuration Files (構成ファイルのロード)**」をクリックします。操作が正常に行われたことを示すメッセージが表示されます。「**OK**」をクリックします。

5. ドロップダウン・リストからもう一度サーバーを選択し、右上隅の「適用」をクリックします。
6. 「Apply Changes (変更を適用)」をクリックします。操作が正常に行われたことを示すメッセージが表示されます。「OK」をクリックします。
7. 各セキュア・サーバーについて、ステップ 1 ~ 5 を繰り返します (ポート 8000 およびポート 443)。

Domino Web サーバーの構成の完了

Domino Web サーバーを使用している場合、Domino Administrator を使って次のようなステップを行って、別名を作成する必要があります。

1. 左側のパネルで「All Server Document (すべてのサーバー文書)」を選択します。
2. *server_name* を選択します。
3. 「Web Server Configuration (Web サーバーの構成)」ボタンをクリックします。
4. 「Create URL Mapping/Redirection (URL マッピング / リダイレクトの作成)」を選択します。
5. 「Basics (基本事項)」タブを選択します。
6. 「What do you want to setup (何をセットアップしますか)」ドロップダウン・ボックスで、「URL」→「Redirection URL (リダイレクト URL)」オプションを選択します。
7. 「Mapping (マッピング)」タブをクリックします。「Mapping/Redirection (マッピング / リダイレクト)」ウィンドウが表示されます。以下の表に示されているとおりの着信 URL とリダイレクト URL を入力します。「Save and Close (保管してクローズ)」をクリックし、各別名を保管します。

注: 作成したい別名ごとに、ステップ 1 ~ 7 を繰り返す必要があります。

表 2.

別名	着信 URL	リダイレクト URL
accelerator	/accelerator	/WebSphere/AppServer/installedApps/WC_Enterprise_App_instance_name.ear/wctools.war/tools/common/accelerator.html
adminconsole	/adminconsole	/WebSphere/AppServer/installedApps/WC_Enterprise_App_instance_name.ear/wctools.war/tools/adminconsole/wcsadmincon.html
orgadminconsole	/orgadminconsole	/WebSphere/AppServer/installedApps/WC_Enterprise_App_instance_name.ear/wcstores.war/tools/buyerconsole/wcsbuyercon.html

表 2. (続き)

storeservices	/storeservices	/WebSphere/AppServer/installedApps/ WC_Enterprise_App_instance_name.ear/ wctools.war/tools/devtools/ storeservices.html
---------------	----------------	--

Domino Web サーバーの構成を完了するには、Domino Administrator で次のようなステップを行います。

1. 左側のパネルで「**All Server Document (すべてのサーバー文書)**」を選択します。
2. *server_name* を選択します。
3. 「**Web Server Configuration (Web サーバーの構成)**」ボタンをクリックします。
4. 「**Create URL Redirection/Mapping (URL リダイレクト / マッピングの作成)**」を選択します。
5. 「**Basics (基本事項)**」タブをクリックします。
6. 「**What do you want to set up (何をセットアップしますか)**」ドロップダウン・ボックスで、「**URL**」→「**Directory (ディレクトリー)**」を選択します。
7. 「**Mapping (マッピング)**」タブをクリックします。「**Mapping/Redirection (マッピング / リダイレクト)**」ウィンドウが表示されます。以下の表に示されているとおりの着信 URL とリダイレクト URL を入力します。「**Save and Close (保管してクローズ)**」をクリックし、各別名を保管します。

表 3.

別名	着信 URL	ターゲット・サーバー・ディレクトリー
wcs	/wcs	opt/WebSphere/AppServer/installedApps/ WC_Enterprise_App_instance_name.ear/ wctools.war
wcsstore	/wcsstore	opt/WebSphere/AppServer/installedApps/ WC_Enterprise_App_instance_name.ear/ wstores.war
webeditor	/webeditor	opt/WebSphere/AppServer/installedApps/ WC_Enterprise_App_instance_name.ear/ wcwebeditor.war
wcsdoc	/wcsdoc	opt/WebSphere/CommerceServer/web/ doc/locale
wcshelp	/wshelp	opt/WebSphere/CommerceServer/web/ doc/locale

8. 左側のウィンドウで「**Web**」→「**Web Server Configuration (Web サーバーの構成)**」を選択します。

9. *server_name* → 「**Domino Server**」を拡張表示すると、追加された別名の一覧が示されます。
10. ここで Domino Web サーバーを再始動し、変更内容を適用する必要があります。

テスト用のセキュリティー鍵ファイルの作成

この項で作成するセキュリティー鍵ファイルは、ショッピングのトランザクションを無許可の個人が見ないようにするものではありませんが、ストアを作成するのに必要です。ストアをショッピングに対してオープンする前に、151ページの『第14章 IBM HTTP Server での実行のための SSL の使用可能化』の手順に従ってください。

この項では、IBM HTTP Server を使って鍵ファイルを作成する方法を説明します。別の Web サーバーを使用している場合は、そのマニュアルを参照して SSL を使用可能にする方法を決定してください。

テスト用のセキュリティー鍵ファイルを作成するには、以下のようになります。

1. 182ページの『IBM HTTP Server の開始と停止』の説明に従って IBM HTTP Server を停止します。
2. 以下のコマンドを実行して *JAVA_HOME* をエクスポートします。

```
DISPLAY=host_name:0.0
export DISPLAY
JAVA_HOME=/opt/WebSphere/AppServer/java131
export JAVA_HOME
```

host_name は、現在使用中のマシンの完全修飾ホスト名です。

3. 次のように入力して「Key Management Utility (鍵管理ユーティリティ)」を開きます。
ikeyman
4. 「**IBM Key Management (IBM 鍵管理)**」ウィンドウで、「**Key Database File (鍵データベース・ファイル)**」メニューをクリックして、「**新規**」を選択します。
5. IBM 鍵管理の「**新規**」ウィンドウで、ファイル名 (*keyfile.kdb*) とファイルの場所 (*/opt/IBMHTTPD/ssl*) を入力します。「**OK**」をクリックします。
6. 「**Password Prompt (パスワード・プロンプト)**」ウィンドウが表示されます。
7. IBM HTTP Server パスワードを入力して確認し、「**Stash the password to a file (ファイルへのパスワードの stash)**」を使用可能にします。「**OK**」をクリックします。
8. 「**Create (作成)**」メニューをクリックし、「**New Self-signed Certificate (新規の自己署名証明書)**」を選択します。
9. 表示されたウィンドウで、オプションとしてリストに載っていないすべてのフィールドに入力します。「**OK**」をクリックして、IBM 鍵管理ユーティリティをクローズします。

10. 182 ページの『IBM HTTP Server の開始と停止』の説明に従って、IBM HTTP Server を始動します。

作成した鍵をテストするには、次の URL にアクセスしてください。

`https://host_name.domain.com`

WebSphere Commerce で実行するための Payment Manager の構成

WebSphere Commerce で実行するために Payment Manager を構成するには、次のようにしなければなりません。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。

```
su - wasuser
export DISPLAY=host_name:0.0
cd /opt/WebSphere/AppServer/bin
./adminclient.sh host_name port_number
```

ここで、*host_name* は使用するマシンの完全修飾名、*port_number* は 87 ページの『インストール後スクリプトの実行』で指定されている、WebSphere Application Server にアクセスする際に使用するポートです。デフォルトは 2222 です。

2. 以下のようにして、別名を作成します。
 - a. **WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)** を拡張表示します。
 - b. 「**Virtual Hosts (仮想ホスト)**」を選択します。
 - c. 右側のパネルで `default_host` を選択します。
 - d. 「**一般**」タブで、「**追加**」をクリックします。
 - e. 「**別名**」フィールドに `*:443` と入力し、「**適用**」をクリックします。

注: SSL を使用可能にしない場合は、WebSphere Commerce インスタンスの作成時に、WebSphere Commerce 構成マネージャーの Payment Manager 設定ページ内で、WebSphere Commerce サーバーが非 SSL Payment Manager クライアントを使用するよう構成しなければなりません。インスタンスを作成した後で Payment Manager 設定を変更することもできますが、変更内容を有効にするために、インスタンスを再始動する必要があります。

3. 以下のようにして、Web サーバー・プラグインを再生成します。

- a. コマンド行で、次のディレクトリーに移動します。

```
/opt/WebSphere/AppServer/bin
```

- b. 次のコマンドを実行します。

```
./GenPluginCfg.sh -adminNodeName node_name -nameServicePort port_number
```

ここで、*node_name* はノードの短い論理名、*port_number* は、87 ページの『インストール後スクリプトの実行』で指定されている、WebSphere Application

Server にアクセスする際に使用するポートです。(デフォルトでは、インストール後スクリプトはポート 2222 を使用します。)

4. WebSphere Application Server を停止します。WebSphere Application Server を停止するには、181 ページの『WebSphere Application Server の開始と停止』の指示に従います。

注: ステップ 4 ~ 6 が必要とされるのは、Payment Manager が WebSphere Commerce と同じマシンにインストールされている場合だけです。

5. テキスト・エディターで、以下のファイルをオープンします。

```
/opt/WebSphere/AppServer/config/plugin-cfg.xml
```

6. 以下の行を、plugin-cfg.xml ファイルの <Config> の下に直接追加します。

```
<Property Name="CacheLibrary" value="/opt/WebSphere/CommerceServer/bin/  
libwccache.so" />
```

7. Web サーバーを停止してから、再始動します。IBM HTTP Server を使用する場合は、182 ページの『IBM HTTP Server の開始と停止』を参照して追加情報を調べてください。

8. WebSphere Application Server を開始します。WebSphere Application Server を開始するには、以下のようになります。

```
su - wasuser  
export DISPLAY=fully_qualified_host_name:0.0  
cd /opt/WebSphere/AppServer/bin  
./startupServer.sh
```

別のマシンでの Oracle の構成

WebSphere Commerce とは別のマシン上で Oracle8i Database を実行する場合は、以下のステップを完了します。

1. WebSphere Commerce マシン上で、次のディレクトリーに移動します。

```
/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/instance_name/xml
```

2. テキスト・エディターで *instance_name.xml* をオープンします。

3. Websphere セクション (InstanceProperties セクションにあります) にある JDBCDriverLocation が、Oracle JDBC ドライバーである、
\$ORACLE_HOME/jdbc/lib/classes12.zip へのパスに設定されていることを確認してください。

4. WebSphere Application Server 管理コンソール、「**Resources (リソース)**」 → 「**JDBC Provider (JDBC プロバイダー)**」 → 「**WebSphere Commerce Oracle JDBC Driver instance_name**」を拡張表示します。「Data Sources (データ・ソース)」をクリックし、「Custom Properties (カスタム・プロパティー)」テーブルで URL プロパティーを Oracle サーバーがあるマシンのホスト名を使用するように変更します。「適用」をクリックします。

JavaServer Pages ファイルのコンパイル

この時点で、JavaServer Pages ファイルをコンパイルすることをお勧めします。JavaServer Pages ファイルをコンパイルすれば、WebSphere Commerce ツールのロードにかかる時間が大幅に短縮されます。JavaServer Pages (JSP) ファイルのバッチ・コンパイルを実行するには、以下のようにします。

1. 必ず `wasuser` でログインします。
2. コマンド・プロンプトで、`/opt/WebSphere/CommerceServer/bin` に切り替えます。
3. 次のコマンドを実行します。

注: `enterpriseApp`、`webModule`、または `nameServerHost` 名内でスペースが使われている場合は、以下のように二重引用符で囲まなければなりません。

```
./WCSJspBatchCompiler.sh -enterpriseApp "WebSphere  
Commerce Enterprise Application - instance_name"  
-webModule "WCS Tools" -nameServerHost short_host_name  
-nameServerPort port_number
```

ここで、`instance_name` は WebSphere Commerce インスタンスの名前 (デフォルトは `demo`)、`short_host_name` は WebSphere Commerce マシンの名前、`port_number` は 87 ページの『インストール後スクリプトの実行』で指定されているポート (デフォルトは 2222) です。

それらのコンパイルを実行すると、いくつかのエラーが発生することがあります。これらのエラーは無視しても安全です。

リモート Web サーバーでの構成後のステップ

この項では、次のようなタスクについて説明します。

- テストのための SSL の使用可能化 (すべてのユーザー)
- IBM HTTP Server のインストールの完了 (すべての IBM HTTP Server ユーザー)
- Domino Web サーバー構成の完了
- リモート iPlanet Web サーバーの構成 (すべての iPlanet Web サーバー・ユーザー)
- iPlanet Web サーバー構成の完了 (すべての iPlanet Web サーバー・ユーザー)
- Web サーバーへの資産のコピー (すべてのユーザー)
- WebSphere Commerce で実行するための Payment Manager の構成 (すべてのユーザー)
- リモート Oracle インストールの実行 (Oracle データベースが WebSphere Commerce からリモートにある場合)
- JavaServer Pages ファイルのコンパイル (すべてのユーザー)

テスト用の SSL を使用可能化

この項で作成するセキュリティー鍵ファイルは、ショッパーのトランザクションを無許可の個人が見ないようにするものではありませんが、ストアを作成するのに必要です。顧客に対してストアをオープンする前に、151 ページの『第 14 章 IBM HTTP Server の実行のための SSL の使用可能化』の指示に従ってください。

この項では、IBM HTTP Server を使って鍵ファイルを作成する方法を説明します。別の Web サーバーを使用している場合は、そのマニュアルを参照して SSL を使用可能にする方法を決定してください。

テスト用のセキュリティー鍵ファイルを作成するには、以下のようになります。

1. 182 ページの『IBM HTTP Server の開始と停止』の説明に従って IBM HTTP Server を停止します。
2. IBM HTTP Server が WebSphere Application Server からリモートの位置にインストールされている場合は、以下のステップを実行して IBM HTTP Server 構成ファイルを変更してください。
 - a. ディレクトリーを /opt/IBMHTTPD/conf に移動します。
 - b. httpd.conf のバックアップ・コピーを作成します。
 - c. テキスト・エディターで httpd.conf を開きます。
 - d. 以下の行のコメントを解除します。
 - 1) #LoadModule ibm_ssl_module
libexec/mod_ibm_ssl_encryption-level.so,。ここで encryption-level は、ロケールに応じた適切な暗号化のレベルです。
 - 2) #AddModule mod_ibm_ssl.c
 - 3) #Listen 443
 - 4) #<VirtualHost host.some_domain.com:443>。さらに、この行内の完全修飾ホスト名を置き換える必要もあります。
 - 5) #SSLEnable
 - 6) #</VirtualHost>
 - 7) #SSLDisable
 - 8) Keyfile "/opt/IBMHTTPD/keys/keyfile.kdb".
 - 9) #SSLV2Timeout 100
 - 10) #SSLV3Timeout 1000
 - e. 変更内容を保管します。
3. 次のように入力して「Key Management Utility (鍵管理ユーティリティー)」を開きます。

```
ikeyman
```


4. 「**IBM Key Management (IBM 鍵管理)**」ウィンドウで、「**Key Database File (鍵データベース・ファイル)**」メニューをクリックして、「**新規**」を選択します。
5. IBM 鍵管理の「**新規**」ウィンドウで、ファイル名 (keyfile.kdb) とファイルの場所 (/opt/IBMHTTPD/keys) を入力します。「**OK**」をクリックします。
6. 「**Password Prompt (パスワード・プロンプト)**」ウィンドウが表示されます。
7. IBM HTTP Server パスワードを入力して確認し、「**Stash the password to a file (ファイルへのパスワードの stash)**」を使用可能にします。「**OK**」をクリックします。
8. 「**Create (作成)**」メニューをクリックし、「**New Self-signed Certificate (新規の自己署名証明書)**」を選択します。
9. 表示されたウィンドウで、オプションとしてリストに載っていないすべてのフィールドに入力します。「**OK**」をクリックして、IBM 鍵管理ユーティリティをクローズします。
10. 182 ページの『IBM HTTP Server の開始と停止』の説明に従って、IBM HTTP Server を始動します。

作成した鍵をテストするには、次の URL にアクセスしてください。

`https://host_name.domain.com`

IBM HTTP Server のインストールの完了

WebSphere Application Server とは別のマシン上で Web サーバーとして IBM HTTP Server を使用している場合、この項のステップを完了する必要があります。3 層構成では Web サーバー・マシンに置かれている httpd.conf ファイルは自動的に構成されません。必要な別名が収められたサンプル・ファイル (unixaliases.txt) は、Software_Patches ディレクトリー内の WebSphere Commerce Disk 2 CD に置かれています。httpd.conf ファイルは、手動で編集する必要があります。

IBM HTTP Server を停止してから、/opt/IBMHTTPD/conf/httpd.conf ファイルのバックアップを作成します。/opt/IBMHTTPD/conf/httpd.conf ファイルをオープンし、次のような変更を加えます。ただしその場合、以下を置き換えるよう注意してください。

- ディレクトリー
- インスタンス名
- 言語
- ホスト名
- IP アドレス

上記のサンプル内の値を、ご使用のシステム用の値に置き換えます。

1. 置き換えるものは次のとおりです。

```
<Directory>
Options FollowSymLinks
AllowOverride None
</Directory>
```

上記を次のように置き換えます。

```
##### IBM WebSphere Commerce #####
#Instance name : instance_name
<Directory "HTTP_dir/htdocs/en_US">
Options Indexes
AllowOverride None
order allow,deny
allow from all
</Directory>
<Directory WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear/wctools.war>
<Files *.jsp>
order allow,deny
deny from all
</Files>
</Directory>
<Directory WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear/wcstores.war>
<Files *.jsp>
order allow,deny
deny from all
</Files>
</Directory>
<Directory WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear/wcwebeditor.war>
<Files *.jsp>
order allow,deny
deny from all
</Files>
</Directory>
```

- Listen 443 で始まる行の下に次のような行を追加します。

注: 下記の行は、単に読みやすくするためにのみ形式が整えられています。Alias で始まる行と、パスが付記されている行 (たとえば、*WCS_dir/web/doc*) はすべて、*httpd.conf* ファイル中の単一行上になければなりません。

```
##### IBM WebSphere Commerce (Do not edit this section)#####
Listen 8000
##### End of IBM WebSphere Commerce (Do not edit this section) ####
## VirtualHost: Allows the daemon to respond to requests for more than
## one server address, if your server machine is configured to accept IP
## packets for multiple addresses. This can be accomplished with the
## ifconfig alias flag, or through kernel patches like VIF.
#
## Any httpd.conf or srm.conf directive may go into a VirtualHost command.
## See also the BindAddress entry.
#
##### IBM WebSphere Commerce #####
#Instance name : instance_name
<VirtualHost webserver_IP_address>
ServerName fully_qualified_webserver_name
```

```

DocumentRoot "HTTP_dir/htdocs"
Alias /wcsdoc      "WCS_dir/web/doc"
Alias /wchelp     "WCS_dir/web/doc/en_US"
Alias /storeservices "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wctools.war/tools/devtools/storeservices.html"
Alias /adminconsole "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wctools.war/tools/adminconsole/wcsadmincon.html"
Alias /wcsstore    "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wcstores.war"
Alias /accelerator "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wctools.war/tools/common/accelerator.html"
Alias /orgadminconsole "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wcstores.war/tools/buyerconsole/wcsbuyercon.html"
Alias /wcs         "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wctools.war"
Alias /webeditor   "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wcwebeditor.war"
</VirtualHost>
<VirtualHost webserver_IP_address:443>
SSLEnable
SSLClientAuth 0
ServerName fully_qualified_webserver_name
DocumentRoot "HTTP_dir/htdocs"
Alias /wcsdoc      "WCS_dir/web/doc"
Alias /wchelp     "WCS_dir/web/doc/en_US"
Alias /storeservices "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wctools.war/tools/devtools/storeservices.html"
Alias /adminconsole "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wctools.war/tools/adminconsole/wcsadmincon.html"
Alias /wcsstore    "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wcstores.war"
Alias /accelerator "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wctools.war/tools/common/accelerator.html"
Alias /orgadminconsole "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wcstores.war/tools/buyerconsole/wcsbuyercon.html"
Alias /wcs         "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wctools.war"
Alias /webeditor   "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear/
wcwebeditor.war"
</VirtualHost>
<VirtualHost webserver_IP_address:8000>
SSLEnable
SSLClientAuth 0
ServerName fully_qualified_webserver_name
DocumentRoot "HTTP_dir/htdocs"
Alias /wcsdoc      "WCS_dir/web/doc"
Alias /wchelp     "WCS_dir/web/doc/en_US"
Alias /storeservices "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wctools.war/tools/devtools/storeservices.html"
Alias /adminconsole "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wctools.war/tools/adminconsole/wcsadmincon.html"
Alias /wcsstore    "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wcstores.war"
Alias /accelerator "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
/wctools.war/tools/common/accelerator.html"

```

```

Alias /orgadminconsole "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
                        /wcstores.war/tools/buyerconsole/wcsbuyercon.html"
Alias /wcs              "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
                        /wctools.war"
Alias /webeditor       "WAS_dir/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear
                        /wcwebeditor.war"
</VirtualHost>
##### End of IBM WebSphere Commerce #####

```

Domino Web サーバーの構成の完了

Domino Web サーバーを使用している場合、Domino Administrator で次のようなステップを行って、別名を作成する必要があります。

1. 左側のパネルで「**All Server Document (すべてのサーバー文書)**」を選択します。
2. *server_name* を選択します。
3. 「**Web Server Configuration (Web サーバーの構成)**」ボタンをクリックします。
4. 「**Create URL Mapping/Redirection (URL マッピング / リダイレクトの作成)**」を選択します。
5. 「**Basics (基本事項)**」タブを選択します。
6. 「**What do you want to setup (何をセットアップしますか)**」ドロップダウン・ボックスで、「**URL**」→「**Redirection URL (リダイレクト URL)**」オプションを選択します。
7. 「**Mapping (マッピング)**」タブをクリックします。「**Mapping/Redirection (マッピング / リダイレクト)**」ウィンドウが表示されます。以下の表に示されているとおりの着信 URL とリダイレクト URL を入力します。「**Save and Close (保管してクローズ)**」をクリックし、各別名を保管します。

注: 作成したい別名ごとに、ステップ 1 ~ 7 を繰り返す必要があります。

表 4.

別名	着信 URL	リダイレクト URL
accelerator	/accelerator	/WebSphere/AppServer/installedApps/ WC_Enterprise_App_instance_name.ear/ wctools.war/tools/common/accelerator.html
adminconsole	/adminconsole	/WebSphere/AppServer/installedApps/ WC_Enterprise_App_instance_name.ear/ wctools.war/tools/adminconsole/ wcsadmincon.html
orgadminconsole	/orgadminconsole	/WebSphere/AppServer/installedApps/ WC_Enterprise_App_instance_name.ear/ wcstores.war/tools/buyerconsole/ wcsbuyercon.html

表 4. (続き)

storeservices	/storeservices	/WebSphere/AppServer/installedApps/ WC_Enterprise_App_instance_name.ear/ wctools.war/tools/devtools/ storeservices.html
---------------	----------------	--

Domino Web サーバーの構成を完了するには、Domino Administrator で次のようなステップを行います。

1. 左側のパネルで「**All Server Document (すべてのサーバー文書)**」を選択します。
2. *server_name* を選択します。
3. 「**Web Server Configuration (Web サーバーの構成)**」ボタンをクリックします。
4. 「**Create URL Redirection/Mapping (URL リダイレクト / マッピングの作成)**」を選択します。
5. 「**Basics (基本事項)**」タブをクリックします。
6. 「**What do you want to set up (何をセットアップしますか)**」ドロップダウン・ボックスで、「**URL**」→「**Directory (ディレクトリー)**」を選択します。
7. 「**Mapping (マッピング)**」タブをクリックします。「**Mapping/Redirection (マッピング / リダイレクト)**」ウィンドウが表示されます。以下の表に示されているとおりの着信 URL とリダイレクト URL を入力します。「**Save and Close (保管してクローズ)**」をクリックし、各別名を保管します。

表 5.

別名	着信 URL	ターゲット・サーバー・ディレクトリー
wcs	/wcs	opt/WebSphere/AppServer/installedApps/ WC_Enterprise_App_instance_name.ear/ wctools.war
wcsstore	/wcsstore	opt/WebSphere/AppServer/installedApps/ WC_Enterprise_App_instance_name.ear/ wstores.war
webeditor	/webeditor	opt/WebSphere/AppServer/installedApps/ WC_Enterprise_App_instance_name.ear/ wcwebeditor.war
wcsdoc	/wcsdoc	opt/WebSphere/CommerceServer/web/ doc/locale
wcshelp	/wshelp	opt/WebSphere/CommerceServer/web/ doc/locale

8. 左側のウィンドウで「**Web**」→「**Web Server Configuration (Web サーバーの構成)**」を選択します。

9. *server_name* → 「**Domino Server**」を拡張表示すると、追加された別名の一覧が示されます。
10. ここで Domino Web サーバーを再始動し、変更内容を適用する必要があります。

リモート iPlanet Web サーバー構成

WebSphere Commerce サーバーのリモート位置にインストールされている iPlanet Web サーバーを使用する場合は、以下のステップを実行してください。

1. テキスト・エディターを用い、ポート 8000 の Web サーバーの *obj.conf* ファイルをオープンします (このファイルのデフォルト・パスは */usr/netscape/server4/https-hostname-https-8000/config/obj.conf* です)。
2. `<Object name="default">` タグを探してください。
3. この行の下に以下を追加してください。

```
##### IBM WebSphere Commerce #####
NameTrans fn="pfx2dir" from="/wcs" dir="/opt/WebSphere/AppServer/installedApps
/WC_Enterprise_App_demo.ear/wctools.war"
NameTrans fn="pfx2dir" from="/wcsdoc" dir="/opt/WebSphere/CommerceServer/web/doc"
NameTrans fn="pfx2dir" from="/wchelp" dir="/opt/WebSphere/CommerceServer/
web/doc/en_US"
NameTrans fn="pfx2dir" from="/storeservices" dir="/opt/WebSphere/AppServer/
installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear/wctools.war/tools/devtools
/storeservices.html"
NameTrans fn="pfx2dir" from="/adminconsole" dir="/opt/WebSphere/AppServer/
installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear/wctools.war/tools/adminconsole
/wcsadmincon.html"
NameTrans fn="pfx2dir" from="/wcsstore" dir="/opt/WebSphere/AppServer
/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear/wcstores.war"
NameTrans fn="pfx2dir" from="/accelerator" dir="/opt/WebSphere/AppServer
/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear/wctools.war/tools/common
/accelerator.html"
NameTrans fn="pfx2dir" from="/webeditor" dir="/opt/WebSphere/AppServer
/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear/wcwebeditor.war"
##### End of IBM WebSphere Commerce #####
```

注: これらの別名はデフォルトの WebSphere Application Server ホーム・ディレクトリー (*/opt/WebSphere/AppServer*) を使用します。別の WebSphere Application Server ホーム・ディレクトリーを指定した場合には、必要な修正を加えてください。

4. テキスト・エディターで、ポート 443 の Web サーバーの *obj.conf* ファイルをオープンします (このファイルへのデフォルト・パスは */usr/netscape/server4/https-hostname-https-443/config/obj.conf* です)。
5. `<Object name="default">` タグを探してください。
6. この行の下に以下を追加してください。

```
##### IBM WebSphere Commerce #####
NameTrans fn="pfx2dir" from="/orgadminconsole" dir="/opt/WebSphere/AppServer
/installedApps/WC_Enterprise_App_demo.ear/wcstores.war/tools/buyerconsole
/wcsbuyercon.html"
NameTrans fn="pfx2dir" from="/wcs" dir="/opt/WebSphere/AppServer/installedApps/
WC_Enterprise_App_demo.ear/wctools.war"
##### End of IBM WebSphere Commerce #####
```

7. ポート 80 および 443 のサーバーの構成ファイルに別名を追加します。
 - a. それぞれの Web サーバーの obj.conf ファイルをテキスト・エディターでオープンします (これらのファイルのデフォルト・パスは、
/usr/netscape/server4/https-hostname-https-80/config/obj.conf および
/usr/netscape/server4/https-hostname-https-443/config/obj.conf です)。
 - b. <Object name="default"> タグを探してください。
 - c. このタグの後ろに以下の情報を追加します。

```
##### IBM WebSphere Commerce #####
NameTrans fn="pfx2dir" from="/wcsstore" dir="/opt/WebSphere/AppServer
/installedApps/WC_Enterprise_App_instance_name.ear/wcstores.war"
NameTrans fn="pfx2dir" from="/wcsdoc" dir="/opt/WebSphere/CommerceServer
/web/doc"
NameTrans fn="pfx2dir" from="/wchelp" dir="/opt/WebSphere/CommerceServer
/web/doc/en_US"
##### End of IBM WebSphere Commerce #####
```

8. obj.conf ファイル内で、次の 3 つのすべてのサーバー用の次のような行を探索してください。

```
service fn="as_handler"
```

この行を次のような行に置き換えます。

```
Service root=/usr/netscape/server4/docs fn="as_handler"
```

iPlanet Web サーバーのインストールの完了

iPlanet Web サーバーを使用する WebSphere Commerce インスタンスを作成または更新したら、そこで行った変更を、セキュア・サーバーおよび非セキュア・サーバーの obj.conf ファイルに適用する必要があります。

1. ブラウザーで以下の URL を入力し、iPlanet Web サーバー・アドミニストレーターを立ち上げます。

```
http://host_name:8888/
```

2. 使用可能なサーバーのリストから非セキュア・サーバーを選択して、「**Manage (管理)**」をクリックします。

注: iPlanet Web サーバーの構成によっては、警告メッセージが表示される場合があります。「**OK**」をクリックします。

3. 右上隅の「**適用**」をクリックします。
4. 「**Load Configuration Files (構成ファイルのロード)**」をクリックします。操作が正常に行われたことを示すメッセージが表示されます。「**OK**」をクリックします。
5. ドロップダウン・リストからもう一度サーバーを選択し、右上隅の「**適用**」をクリックします。
6. 「**Apply Changes (変更を適用)**」をクリックします。操作が正常に行われたことを示すメッセージが表示されます。「**OK**」をクリックします。

7. 各セキュア・サーバーについて、ステップ 1 ～ 5 を繰り返します (ポート 8000 およびポート 443)。

Web サーバーへの資産のコピー

Web サーバーが WebSphere Application Server や WebSphere Commerce からリモートの位置にインストールされている場合は、特定のファイルを WebSphere Commerce マシンから Web サーバーにコピーする必要があります。ファイルを Web サーバーにコピーする際は、すべてのディレクトリーとファイルが 755 許可を受けていることを確認してください。

1. 以下のディレクトリー (サブディレクトリーも含む) の内容が上書きされるように、WebSphere Commerce マシンから Web サーバー・マシンにコピーを行います。このディレクトリーには、サポートされているすべての言語の WebSphere Commerce 文書が入っています。すべての言語の文書は必要なければ、ご使用の言語のサブディレクトリーと、英語のサブディレクトリーを上書きするようにコピーします (英語のディレクトリーには、他の言語では用意されていない参照情報が入っています)。

```
/opt/WebSphere/CommerceServer/web
```

Web サーバー・マシン上にディレクトリーを作成する必要があるかもしれません。

注: このタスクは、WebSphere Commerce マシン上で Web 資産を変更するときに必要になります。

2. 以下のディレクトリー (サブディレクトリーも含む) の内容が上書きされるように、WebSphere Commerce マシンから Web サーバー・マシンにコピーを行います。

```
/opt/WebSphere/AppServer/web
```

```
/opt/WebSphere/AppServer/WSsamples
```

Web サーバー・マシン上にディレクトリーを作成する必要があるかもしれません。

3. 以下のディレクトリー内の .war ディレクトリーを、WebSphere Commerce マシンから Web サーバー・マシンにコピーします。

```
/opt/WebSphere/AppServer/installedApps/WC_Enterprise_App_instance_name.ear
```

Web サーバー・マシン上にディレクトリーを作成する必要があるかもしれません。このディレクトリーからその他のファイルをコピーすると、セキュリティー・リスクが生じる可能性があります。

注: このタスクは、WebSphere Commerce マシン上で Web 資産を変更するときに必要になります。

4. 以下のファイルを WebSphere Commerce マシンから Web サーバー・マシンに上書きコピーします。

```
/opt/WebSphere/CommerceServer/bin/libwccache.so
```

Web サーバー・マシン上にディレクトリーを作成する必要があるかもしれません。

5. 以下のディレクトリー (サブディレクトリーも含む) の内容が上書きされるように、WebSphere Commerce マシンから Web サーバー・マシンにコピーを行います。

```
/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/instance_name/xml
```

Web サーバー・マシン上にこのディレクトリーを作成する必要があるかもしれません。

6. 以下のファイルを WebSphere Commerce マシンから Web サーバー・マシンに上書きコピーします。

```
/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/wcs_instances
```

Web サーバー・マシン上にディレクトリーを作成する必要があるかもしれません。

7. Web サーバー・マシンで、以下のディレクトリーとそのサブディレクトリー内にある .jsp、.sar、および .xml ファイルをすべて削除してください。

```
/opt/WebSphere/AppServer/installedApps/
```

WebSphere Commerce で実行するための Payment Manager の構成

WebSphere Commerce で実行するために Payment Manager を構成するには、次のようにしなければなりません。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。

```
su - wasuser
export DISPLAY=host_name:0.0
cd /opt/WebSphere/AppServer/bin
./adminclient.sh host_name port_number
```

ここで、*host_name* は使用するマシンの完全修飾名、*port_number* は 87 ページの『インストール後スクリプトの実行』で指定されている、WebSphere Application Server にアクセスする際に使用するポートです。デフォルトは 2222 です。

2. 以下のようにして、別名を作成します。
 - a. **WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)** を拡張表示します。
 - b. 「**Virtual Hosts (仮想ホスト)**」を選択します。
 - c. 右側のパネルで `default_host` を選択します。
 - d. 「**一般**」タブで、「**追加**」をクリックします。
 - e. 「**別名**」フィールドに `*:443` と入力し、「**適用**」をクリックします。

注: SSL を使用可能にしない場合は、WebSphere Commerce インスタンスの作成時に、WebSphere Commerce 構成マネージャーの Payment Manager 設定ページ内で、WebSphere Commerce サーバーが非 SSL Payment Manager クライアントを使用するよう構成しなければなりません。インスタンスを作成した後で Payment Manager 設定を変更することもできますが、変更内容を有効にするために、インスタンスを再始動する必要があります。

3. Payment Manager アプリケーション・サーバーを選択します。「JVM Settings (JVM 設定)」タブの「System Properties (システム・プロパティ)」リストで、Web サーバーの完全修飾ホスト名を参照するように `wpmui.PaymentServerHostName` を編集してから、「適用」をクリックします。
4. Payment Manager ディレクトリー (`/opt/PaymentManager`) で、`WCSHostName` パラメーターが Web サーバーの完全修飾ホスト名を参照するように `WCSRealm.properties` ファイルを編集します。
5. インスタンス構成ファイルの Payment Manager パラメーターが、リモート Web サーバーを指していることを確認します。

- a. テキスト・エディターで、以下のファイルをオープンします。

```
/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/instance_name
/xml/instance_name.xml
```

- b. Payment Manager のセクションを探します。
- c. そのセクションで `<hostname>` ディレクティブが、Payment Manager が使用している Web サーバーの完全修飾ホスト名を指していることを確認します。

6. 以下のようにして、Web サーバー・プラグインを再生成します。

- a. コマンド行で、次のディレクトリーに移動します。

```
/opt/WebSphere/AppServer/bin
```

- b. 次のコマンドを実行します。

```
./GenPluginCfg.sh -adminNodeName node_name -nameServicePort port_number
```

ここで、`node_name` はノードの短い論理名、`port_number` は、87 ページの『インストール後スクリプトの実行』で指定されている、WebSphere Application Server にアクセスする際に使用するポートです。(デフォルトでは、インストール後スクリプトはポート 2222 を使用します。)

7. WebSphere Application Server を停止します。WebSphere Application Server を停止するには、181 ページの『WebSphere Application Server の開始と停止』の指示に従います。

注: ステップ 7 ~ 9 が必要とされるのは、Payment Manager が WebSphere Commerce と同じマシンにインストールされている場合だけです。

8. テキスト・エディターで、以下のファイルをオープンします。

```
/opt/WebSphere/AppServer/config/plugin-cfg.xml
```

9. 以下の行を、`plugin-cfg.xml` ファイルの `<Config>` の下に直接追加します。

```
<Property Name="CacheLibrary" value="/opt/WebSphere/CommerceServer/bin/
libwccache.so" />
```

10. 以下のようにして、更新済み構成ファイルを WebSphere Commerce マシンから Web サーバーにコピーします。

```
/opt/WebSphere/AppServer/config/plugin-cfg.xml
```

11. Web サーバーと Payment Manager を停止してから再始動します。IBM HTTP Server を使用する場合は、182 ページの『IBM HTTP Server の開始と停止』を参照して追加情報を調べてください。
12. WebSphere Application Server を開始します。WebSphere Application Server を開始するには、以下のようにします。

```
su - wasuser
export DISPLAY=fully_qualified_host_name:0.0
cd /opt/WebSphere/AppServer/bin
./startupServer.sh
```

別のマシンでの Oracle の構成

WebSphere Commerce とは別のマシン上で Oracle8i Database を実行する場合は、以下のステップを完了します。

1. WebSphere Commerce マシン上で、次のディレクトリーに移動します。
`/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/instance_name/xml`
2. テキスト・エディターで `instance_name.xml` をオープンします。
3. Websphere セクション (InstanceProperties セクションにあります) にある JDBCDriverLocation が、Oracle JDBC ドライバーである、`$ORACLE_HOME/jdbc/lib/classes12.zip` へのパスに設定されていることを確認してください。
4. WebSphere Application Server 管理コンソール、「**Resources (リソース)**」 → 「**JDBC Provider (JDBC プロバイダー)**」 → 「**WebSphere Commerce Oracle JDBC Driver instance_name**」を拡張表示します。「Data Sources (データ・ソース)」をクリックし、(「Custom Properties (カスタム・プロパティー)」テーブルで) URL プロパティーを Oracle サーバーがあるマシンのホスト名を使用するように変更します。「適用」をクリックします。

JavaServer Pages ファイルのコンパイル

この時点で、JavaServer Pages ファイルをコンパイルすることをお勧めします。JavaServer Pages ファイルをコンパイルすれば、WebSphere Commerce ツールのロードにかかる時間が大幅に短縮されます。JavaServer Pages (JSP) ファイルのバッチ・コンパイルを実行するには、以下のようにします。

1. 必ず wasuser でログインします。
2. コマンド・プロンプトで、`/opt/WebSphere/CommerceServer/bin` に切り替えます。
3. 次のコマンドを実行します。

注: `enterpriseApp`、`webModule`、または `nameServerHost` 名内でスペースが使われている場合は、以下のように二重引用符で囲まなければなりません。

```
./WCSJspBatchCompiler.sh -enterpriseApp "WebSphere  
Commerce Enterprise Application - instance_name"  
-webModule "WCS Tools" -nameServerHost short_host_name  
-nameServerPort port_number
```

ここで、*instance_name* は WebSphere Commerce インスタンスの名前 (デフォルトは demo)、*short_host_name* は WebSphere Commerce マシンの名前、*port_number* は 87 ページの『インストール後スクリプトの実行』で指定されているポート (デフォルトは 2222) です。

それらのコンパイルを実行すると、いくつかのエラーが発生することがあります。これらのエラーは無視しても安全です。

次のステップ

WebSphere Commerce の構成を完了するために必要なステップをすべて終了したら、続いて以下のいずれか 1 つ以上を行います。

- ストア・サービスを使って、独自のストアを作成して発行します。ストア・サービスの用法については、WebSphere Commerce のオンライン・ヘルプを参照してください。WebSphere Commerce のオンライン・ヘルプへのアクセスについては、213 ページの『付録 C. 詳細情報の参照先』に記載されています。
- 典型的なストアの構築方法を理解するために、WebSphere Commerce で用意されているデモンストレーション・ストアの InFashion を発行します。InFashion を発行するには、ストア・サービスを使用します。ストア・サービスの用法については、WebSphere Commerce のオンライン・ヘルプを参照してください。WebSphere Commerce のオンライン・ヘルプへのアクセスについては、213 ページの『付録 C. 詳細情報の参照先』に記載されています。
- 次のような追加オプションを構成します。
 - 151 ページの『第 14 章 IBM HTTP Server での実行のための SSL の使用可能化』
 - 157 ページの『第 15 章 複数の WebSphere Commerce インスタンスの作成』
 - 163 ページの『第 16 章 WebSphere Application Server のセキュリティーの使用可能化』
 - 171 ページの『第 17 章 複製』
 - 177 ページの『第 18 章 単一サインオン』

追加オプションの構成については、143 ページの『第 6 部 オプション構成』に記載されています。

- WebSphere Commerce には、追加のソフトウェアが含まれています。次の製品のインストールおよび構成に関する情報は、*IBM WebSphere Commerce 追加ソフトウェア・ガイド* にあります。
 - DB2 テキスト・エクステンダー

- WebSphere Commerce Analyzer
- Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を WebSphere Commerce と共に使用する
- SilkPreview
- LikeMinds Personalization Server
- Sametime
- QuickPlace

重要

Payment Manager を使用する前に、少なくとも一度 WebSphere Commerce 管理コンソールにログインすることをお勧めします。 WebSphere Commerce 管理コンソールにログインするには、次のページに移動します。

`https://host_name :8000/adminconsole`

デフォルトの管理コンソールのユーザー ID (wcsadmin)、およびデフォルトのパスワード (wcsadmin) を入力します。初回ログイン時に、パスワードを変更するよう促されます。

第 6 部 オプション構成

WebSphere Commerce インスタンスを構成した後、付加的なオプションの構成ができません。これらのタスクを実行する方法については、以下の章で説明します。

- 145 ページの『第 13 章 サンプル・ストア・アーカイブからのストアの作成』
- 151 ページの『第 14 章 IBM HTTP Server での実行のための SSL の使用可能化』
- 157 ページの『第 15 章 複数の WebSphere Commerce インスタンスの作成』
- 163 ページの『第 16 章 WebSphere Application Server のセキュリティーの使用可能化』
- 171 ページの『第 17 章 複製』
- 177 ページの『第 18 章 単一サインオン』

付加的なオプションを構成し終わったら、ストア・サービスを使用してストアの作成と発行を開始できます。また、WebSphere Commerce に付属しているサンプル・ストアを発行して、典型的なストアの構築方法を見ることもできます。ストア・サービスの使用法については、WebSphere Commerce オンライン・ヘルプを参照してください。

WebSphere Commerce のオンライン・ヘルプへのアクセスについては、213 ページの『付録 C. 詳細情報の参照先』に記載されています。

第 13 章 サンプル・ストア・アーカイブからのストアの作成

この章では、WebSphere Commerce に付属しているストア・アーカイブの 1 つからサンプル・ストアを作成するプロセスを示します。さらに別のストアの作成方法やストアのカスタマイズについては、WebSphere Commerce のオンライン・ヘルプをご覧ください。

WebSphere Commerce において、オンライン・ストアを作成するための最も速くて簡単な方法は、WebSphere Commerce に付属のサンプル・ストアの 1 つを使用し、ストア・サービスで利用できるブラウザー・ベースのツールを使用することです。サンプル・ストアは、ストア・アーカイブとして提供されています。

ストア・アーカイブは、ストアの作成に必要な資産すべて (Web 資産やデータベース資産を含む) を納めた圧縮ファイルです。独自のストアを作成するには、サンプル・ストア・サービスの 1 つに基づいて、ストア・サービスのツールを使用して新しいストア・アーカイブを作成します。新しいストア・アーカイブはサンプル・ストア・アーカイブに基づくものなので、それはサンプル・ストア・アーカイブに含まれる資産の正確なコピーを、新しいファイル名およびディレクトリー構造で保存したものです。

この時点で、2 種類の選択肢があります。つまり、ストア・アーカイブをコマース・サーバーに対して発行することによりサンプル・ストアの 1 つに基づく機能的ストアを作成する方法と、まず新しいストア・アーカイブに変更を加えてから、それをサーバーに対して発行する方法です。

ストア・アーカイブ中のデータベース情報を変更するには、資産を直接編集するか、またはストア・サービスのツール (「ストア・プロファイル」ノートブック、「税」ノートブック、および「配送」ノートブック) を使います。

ストア・アーカイブに納められた Web 資産 (ストア・ページ) を変更したり、新しい Web 資産を作成したりするには、WebSphere Commerce Studio のツール、またはその他の選択したツールを使います。

ストアの作成については、*IBM WebSphere Commerce ストア開発者ガイド* をご覧ください。

サンプル・ストアのいずれかを使用してストアを作成するには、以下のようになります。

1. ストア・アーカイブを作成します。
2. ストア・アーカイブを発行します。

ストア・アーカイブの作成

サンプル・ストアのいずれかを使用してストア・アーカイブを作成するには、以下のようになります。

1. 以下が実行中であることを確認してください。
 - Oracle
 - Web サーバーに必要なすべてのサービス
 - WebSphere Application Server
 - WebSphere Application Server 管理コンソールで、以下のものが開始済みであることを確認します。
 - Websphere Commerce Server - *instance_name*
 - WebSphere Payment Manager
2. 次のようにして Payment Manager を始動します。
 - a. コマンド・ウィンドウを開き、IBM Payment Manager がインストールされているディレクトリに移動します。
 - b. 以下のコマンドを入力します。

```
./IBMPayServer
```

Payment Manager が Web サーバーからリモートの位置にあるマシンにインストールされている場合は、以下のコマンドを使用してこれを開始させてください。

```
./IBMPayServer -pmhost fully_qualified_web_server_host_name
```

Payment Manager のパスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。これは Payment Manager データベースへの接続時に使用するよう指定したユーザーのパスワードです。

3. Microsoft Internet Explorer 5.5 をオープンしてから以下の URL を入力して、「ストア・サービス」を開始します。

```
https://host_name.domain.com:8000/storeservices
```

「ストア・サービス・ログオン」ページが表示されます。デフォルトのインスタンス管理者ユーザー ID (*wcsadmin*) とデフォルトのパスワード (*wcsadmin*) を入力して、「ログオン」をクリックします。初回ログイン時に、パスワードを変更するよう促されます。

4. 「ストア・アーカイブの作成」ページが表示されます。「ストア・アーカイブ」フィールドに、ストア・アーカイブの名前を入力します。入力した名前に拡張子 *.sar* が付けられます (たとえば *Mystore.sar*)。この名前がストア・アーカイブのファイル名になります。ストア・アーカイブの作成が終了すると、それは以下の場所に保管されます。

```
/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/instance_name/sar
```

5. 「ストア・ディレクトリー」フィールドに、ストアのディレクトリー名を入力します。このディレクトリー名は、サーバー上で Web 資産の発行先となるディレクトリーを定義するものです。ストア・アーカイブが発行されると、デフォルトとして、それはここで定義するストア・ディレクトリーに発行されます。たとえば、「ストア・ディレクトリー」フィールドにディレクトリー名 "Mystore" を入力した場合、以下のディレクトリーが作成されます。

```
/opt/WebSphere/AppServer/installedApps/WC_Enterprise_App_  
instance_name.ear/wcstores.war/Mystore
```

6. **Business** 「ストア所有者」ドロップダウン・リストから、ストアの所有者である組織を選択します (たとえば、「Seller Organization (セラー組織)」)。

注: 「デフォルト組織」は、購買組織を持たない顧客のために提供されています。デフォルト組織をストア所有者として選択しないでください。

7. 「View (表示)」ドロップダウン・リストから、表示したいサンプル・ストアを選択します。
8. 「サンプル」リスト・ボックスから、ストアの基本となるストア・アーカイブを選択します。「サンプルの説明」ボックスに、サンプルの説明が表示されます。サンプル・ストアをまず表示するには、「プレビュー」をクリックします。
9. 「OK」 をクリックします。
10. ストア・アーカイブの作成が正常に完了したことを知らせるダイアログ・ボックスがオープンします。「OK」 をクリックします。
11. 「ストア・アーカイブの発行」リストが表示されます。作成したストア・アーカイブがリスト中に表示されており、「ストア名」フィールドの名前がサンプル・ストアの名前と同じであることを注意してください。この名前は、「ストア・プロフィール」ノートブックを使って変更できます。

これで、サンプル・ストアに基づく新しいストア・アーカイブが作成されました。その結果、新しいストア・アーカイブには、サンプル・ストアと同じ内容が含まれることになります。独自のストアを作成する場合は、その情報を変更することになります。その情報を変更する方法については、WebSphere Commerce のオンライン・ヘルプと *IBM WebSphere Commerce* ストア開発者ガイド をご覧ください。このマニュアルでは、今のところその情報を変更しないでおいてください。

ストア・アーカイブの発行

ストア・アーカイブを WebSphere Commerce Server に対して発行すると、実際に稼働するストアを作成できます。ストア・アーカイブの発行には、2 種類の方法があります。

- ストア・サービスからストア・アーカイブを発行する
- コマンド行からストア・アーカイブを発行する

ここでは、ストア・サービスからの発行についてのみ説明します。発行については詳しくは、WebSphere Commerce のオンライン・ヘルプ、および *IBM WebSphere Commerce* ストア開発者ガイド をご覧ください。

ストア・サービスからのストア・アーカイブの発行

ストア・アーカイブを WebSphere Commerce Server に対して発行すると、実際に稼働するストアを作成できます。ストア・アーカイブを発行するには、以下のステップを実行してください。

1. 以下が実行中であることを確認してください。
 - Oracle
 - Web サーバーに必要なすべてのサービス
 - WebSphere Application Server
 - WebSphere Application Server 管理コンソールで、以下のものが開始済みであることを確認します。
 - Websphere Commerce Server - *instance_name*
 - WebSphere Payment Manager
2. Payment Manager が実行中でなければ、次のようにして IBM Payment Manager を始動します。
 - a. コマンド・ウィンドウを開き、IBM Payment Manager がインストールされているディレクトリに移動します。
 - b. 以下のコマンドを入力します。

```
./IBMPayServer
```

Payment Manager が Web サーバーからリモートの位置にあるマシンにインストールされている場合は、以下のコマンドを使用してこれを開始させてください。

```
./IBMPayServer -pmhost fully_qualified_web_server_host_name
```

Payment Manager のパスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。これは、*payman* データベースに接続する際に使用するよう指定したユーザーのパスワードです。
3. サイト管理者またはストア管理者のアクセス権が必要です。ストア管理者のアクセス権が付与されている場合は、すべてのストアに対するアクセス権があることを確認してください。
4. 「ストア・サービス」の「ストア・アーカイブ」リストで、発行したいストア・アーカイブの横のチェック・ボックスを選択します。
5. 「発行」をクリックします。「ストア・アーカイブの発行」ページが表示されます。
6. 発行オプションを選択します。発行オプションについては、「ヘルプ」をご覧ください。

注: 十分に機能するストアを作成するためには、ストア・アーカイブを初めて発行する時点で、商品データ・オプションを含むすべての発行オプションを選択してください。

7. 「OK」をクリックします。ストアが発行されると、「ストア・アーカイブ」リストのページに戻ります。「発行の状況」の列に、発行の状況が示されます。システムの数によって、発行プロセスに数分かかることがあります。「最新表示」をクリックすると、状況が更新されます。
8. リストからストア・アーカイブを選択し、「発行の要約」をクリックすると、発行の結果が表示されます。
9. Web サーバーが WebSphere Commerce マシンに対してリモートにある場合は、以下のディレクトリーの内容 (サブディレクトリーも含む) を WebSphere Commerce マシンから Web サーバー・マシンに上書きコピーしてください。

```
/opt/WebSphere/AppServer/installedApps/  
WC_Enterprise_App_instance_name.ear/wcstores.war/Mystore
```

Web サーバー・マシン側で、このディレクトリーの中にある JSP ファイルをすべて削除してください。
10. 発行が完了したら、「ストアの立ち上げ」をクリックしてストアを表示し、テストしてください。完了したら、そのサイトにブックマークを付けてブラウザをクローズします。

JavaServer Pages ファイルのコンパイル

JavaServer Pages をコンパイルすれば、ストアのロードにかかる時間が大幅に短縮されます。JavaServer Pages (JSP) ファイルのバッチ・コンパイルを実行するには、WebSphere Commerce マシン上で以下を行ってください。

1. コマンド・プロンプトで、`/opt/WebSphere/CommerceServer/bin` に切り替えます。
2. 以下のコマンドを実行します。

```
./WCSJspBatchCompiler.sh -enterpriseApp "WebSphere  
Commerce Enterprise Application - instance_name"  
-webModule "WCS Stores" -nameServerHost "short_host_name"  
-nameServerPort port_number
```

それらのコンパイルを実行すると、いくつかのエラーが発生することがあります。それらは、無視しても問題ありません。

重要:

- 一度に発行できるストア・アーカイブは 1 つだけです。複数同時の発行はサポートされておらず、同時発行すると、どのストアの発行も失敗します。
- 発行中に、ストア・アーカイブによって参照されているファイルが存在するかどうか整合性検査ルーチンで確認されます。整合性検査でエラーがあると、エラーはログに書き込まれます。発行は、通常どおりに継続されます。

- ストアを再発行する場合は、その前にディレクトリー
`/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/instance_name/cache` からファイルを削除しておいてください。

ストア開発段階では、キャッシングをオフにしてください。そのためには、構成マネージャの「Caching (キャッシング)」パネルをオープンし、「Enable Cache (キャッシュの使用可能化)」の選択が解除されていることを確認してください。

- ストア・サービスからストアを立ち上げる場合、ストア・サービスへのログインで使ったのと同じユーザー名とパスワードを使用してストアにログインします。ストアでパスワードを変更すると、そのユーザーのパスワードも変更することになります。あるいは、パスワードの変更も含めてストアの機能をテストする場合は、そのサイトにブックマークを付け、ブラウザをクローズしてから、再度ストアにログオンしてください。さらに、ブラウザで以下の URL を入力することによって、ストアを立ち上げることもできます。

`https://host_name/webapp/wcs/stores/store_directory/index.jsp`

ストアでのテスト・オーダーの発行

ストアにテスト・オーダーを発行するには、以下のようにします。

1. Web サーバーが WebSphere Commerce サーバーとは別のマシンにインストールされている場合は、必ず、WebSphere Commerce サーバーにある発行済みストアのディレクトリーを Web サーバーにコピーし、ストアを立ち上げる前に JSP をすべて削除してください。
2. 以下のようにして、ストアをオープンします。
 - a. 「ストア・サービス」ウィンドウで、特定のストアを選択して「発行の要約」をクリックします。
 - b. 「発行の要約」画面で、「ストアの立ち上げ」を選択します。
 - c. ストアの Web アプリケーションの Web パスを尋ねるウィンドウがオープンします。適切なパスを入力します (デフォルトは `/webapp/wcs/stores` です)。
 - d. ストアの場所を Web ブラウザーのブックマークに登録します。
 - e. 開いていた Web ブラウザーをすべてクローズして、新しく Web ブラウザーをオープンします。
 - f. ストアのホーム・ページにナビゲートします。
3. ホーム・ページで、商品を選択します。商品ページで、「ショッピング・カートに追加」をクリックします。
4. オーダー・プロセスを完了します。テストでは、VISA のクレジット・カード番号として 0000000000000000 (16 個のゼロ) を使用できます。オーダーが完了していれば、オーダーの確認のページが表示されます。

第 14 章 IBM HTTP Server での実行のための SSL の使用 可能化

WebSphere Commerce インスタンスと IBM HTTP Server を共に作成し終わると、SSL はテストのために使用可能になります。サイトをショッパーに対してオープンする前に、この章の以下のステップを実行して、SSL を実動用に使用可能にしなければなりません。

セキュリティーについて

IBM HTTP Server は暗号化テクノロジーを使用して、商取引のための機密保護機能のある環境を提供します。暗号化とは、インターネット上の情報トランザクションをスクランブルし、受信側がスクランブル解除するまで判読不能にすることです。送信側は算法パターンつまり鍵を使用してトランザクションをスクランブル (暗号化) し、受信側は復号鍵を使用します。これらの鍵は、Secure Sockets Layer (SSL) プロトコルで使用されます。

Web サーバーは認証プロセスを使用して、ビジネス上の取引をしている個人の識別を検証します (つまり、当人が呼称されるとおりの人物であることを確認します)。これには、認証局 (CA) と呼ばれる信頼のおける第三者機関によって署名された証明書を取得することが含まれます。IBM HTTP Server ユーザーの場合、CA は Equifax[®] や VeriSign[®] Inc. などです。他の CA も同様に使用可能です。

実動鍵ファイルを作成するには、以下のステップを完了します。

1. 実動用のセキュリティー鍵ファイルを作成します。
2. 認証局からセキュアな証明書を要求します。
3. 実動鍵ファイルを現行鍵ファイルとして設定します。
4. 証明書を受け取り、実動鍵ファイルをテストします。

これらのステップについて、以下に詳細に説明します。

注:

1. 認証局が署名した実動鍵ファイルをすでに使用している場合、これらのステップを省略することもできます。この章を読んで決定してください。
2. これらのステップを実行する際に、ブラウザーにセキュリティー・メッセージが表示されることがあります。それぞれのメッセージに示された情報を注意深く確認して、続行する方法を判別してください。

実動用のセキュリティー鍵ファイルの作成

実動用のセキュリティー鍵ファイルを作成するには、Web サーバー・マシンで以下のようになります。

1. 182 ページの『IBM HTTP Server の開始と停止』の説明に従って、IBM HTTP Server を停止します。
2. ディレクトリーを `/opt/IBMHTTPD/conf` に移動します。
3. `httpd.conf` のバックアップ・コピーを作成します。
4. `httpd.conf` をテキスト・エディターでオープンします。
5. ポート 443 の以下の行がコメント化されていないことを確認します。
 - a. `#LoadModule ibm_ssl_module libexec/mod_ibm_ssl_128.so`
 - b. `#AddModule mod_ibm_ssl.c`
 - c. `#Listen 443`
 - d. `#<VirtualHost host.some_domain.com:443>` さらに、この行内の完全修飾ホスト名を置き換える必要もあります。
 - e. `#SSLEnable`
 - f. `#</VirtualHost>`
 - g. `#SSLDisable`
 - h. 鍵ファイル `"/opt/IBMHTTPD/ssl/keyfile.kdb"`
 - i. `#SSLV2Timeout 100`
 - j. `#SSLV3Timeout 1000`
6. ポート 8000 の以下の行がコメント化されていないことを確認します。
 - a. `#Listen 8000`
 - b. `#<VirtualHost host.some_domain.com:8000>` さらに、この行内の完全修飾ホスト名を置き換える必要もあります。
 - c. `#SSLEnable`
 - d. `#</VirtualHost>`
7. 変更内容を保管します。
8. `httpd.conf` ファイルに構文エラーが入らないようにするには、`/opt/IBMHTTPD/bin` ディレクトリーに移動して次のコマンドを実行します。

```
./httpd -t
```
9. 182 ページの『IBM HTTP Server の開始と停止』の説明に従って、IBM HTTP Server を始動します。

認証局に対するセキュアな証明書の要求

直前のステップで作成したセキュリティー鍵ファイルの妥当性を検査するには、Equifax や VeriSign などの認証局 (CA) の証明書が必要です。証明書には、サーバーの公開鍵、その証明書に関連した Distinguish Name、およびその証明書のシリアル番号と有効期限が記されています。

別の認証局を利用する場合は、直接その機関に手続き方法をお問い合わせください。

Equifax ユーザー

Equifax からセキュア・サーバー証明書を要求するには、以下の Web アドレスを参照して、示される指示に従ってください。

<http://www.equifax.com>

Equifax からの証明書は E メールで 2 ～ 4 日以内に送られてきます。

VeriSign ユーザー

VeriSign からセキュア・サーバー証明書を要求するには、以下の URL を参照して、示される指示に従ってください。

<http://www.verisign.com>

IBM HTTP Server 用の手順を使用している場合でも、**Internet Connection Secure Server (ICSS)** のリンクをたどります。後続ページには、その手順が OS/2[®] および AIX[®] プラットフォームに適用されることが示されています。これらの指示は Solaris ソフトウェアにも適用されます。示される指示に従ってください。要求を送信すると、証明書は 3 ～ 5 日以内に送られてきます。これを受け取ったら、前の項の説明に従って実動鍵ファイルを作成します (まだ作成していない場合)。

実動鍵ファイルの受け取りおよび現行鍵ファイルとしての設定

CA からの証明書が到着した後、Web サーバーが実動鍵ファイルを使用するように設定する必要があります。以下のステップを完了します。

1. 認証局から受け取った *certificatename.kdb*、*certificatename.rdb*、および *certificatename.sth* ファイルを、`/opt/IBMHTTPD/ssl` ディレクトリーにコピーします。*certificatename* は認証要求と共に指定した証明書名です。
2. 182 ページの『IBM HTTP Server の開始と停止』の説明に従って、IBM HTTP Server を停止します。
3. 以下のコマンドを実行して `JAVA_HOME` をエクスポートします。

```
DISPLAY=host_name:0.0
export DISPLAY
JAVA_HOME=/opt/WebSphere/AppServer/java131
export JAVA_HOME
```

host_name は、現在使用中のマシンの完全修飾ホスト名です。

4. 鍵管理ユーティリティ (ikeyman) をオープンします。
5. *certificatename.kdb* ファイルを開き、プロンプトで指示されたらパスワードを入力します。
6. 「**Personal Certificates (個人用証明書)**」を選択して、「受け取り」をクリックします。
7. 「参照」をクリックします。
8. 認証局から受け取ったファイルを格納しているフォルダーを選択します。
certificatename.txt ファイルを選択して、「OK」をクリックします。
9. これで「**Personal Certificates (個人用証明書)**」リスト・ボックスには、VeriSign *certificatename* 証明書または Equifax *certificatename* 証明書がリストされます。
10. 鍵管理ユーティリティを終了します。
11. ディレクトリーを /opt/IBMHTTPD/conf に移動します。
12. httpd.conf のバックアップ・コピーを作成します。
13. httpd.conf をテキスト・エディターでオープンします。
14. ステップ 5 (152 ページ) でリストされた行がコメント化されていないことを確認します。
15. Keyfile "/opt/IBMHTTPD/ssl/keyfile.kdb" を検索して、上記のステップで作成されたファイルを指し示すようにパス名を変更します。
16. 182 ページの『IBM HTTP Server の開始と停止』の説明に従って、IBM HTTP Server を再始動します。

実動鍵ファイルのテスト

実動鍵をテストするには、以下のようにします。

1. ブラウザーを使用して以下の URL を表示します。

`https://host_name`

注:

- a. Web サーバーをカスタマイズしている場合、ホスト名の後に Web サーバーのフロントページの名前を入力しなければならないことがあります。
- b. http ではなく https と入力します。

鍵が正しく定義されていれば、新規の証明書に関するいくつかのメッセージが表示されます。

2. 「**New Site Certificate (新規のサイト証明書)**」パネルで、この証明書を受け入れた場合、「**Accept this certificate forever (until it expires) (この証明書を永続的に (有効期限が切れるまで) 受け入れる)**」ラジオ・ボタンを選択します。

3. Web ブラウザーから、キャッシングおよびプロキシー（または Socks）サーバーの設定値を初期値に戻します。

これで、サーバー上で SSL が使用可能になりました。

第 15 章 複数の WebSphere Commerce インスタンスの作成

WebSphere Commerce 5.4 は、複数の WebSphere Commerce インスタンスの作成をサポートしています。つまり、WebSphere Commerce 5.4 を使用すると、それぞれの WebSphere Commerce インスタンスに異なるホスト名を使用しながら、2 つ以上の WebSphere Commerce インスタンスを同時に実行することができます。この場合、顧客は *host1.domain.com* および *host2.domain.com* にアクセスできます。この方法には、仮想ホスト名の使用が関係しています。

注:

1. 以下の例は、*demo1*、*demo2*、*host1*、*host2*、*htdocs1*、および *htdocs2* を参照します。これらの例は 1 番目と 2 番目のインスタンスのパラメーター値を表しており、これらの値がインスタンス間で固有であることを示す目的があります。
2. 通常は操作可能な既存の WebSphere Commerce インスタンスがあるので、追加のインスタンスを作成するだけで済みます。既存のインスタンスがある場合、他のインスタンスを追加するためにそのインスタンスのパラメーター値を変更する必要はありません。オプションで、複数インスタンス環境の編成を改善するために、最初のインスタンスのパラメーターの一部を変更することもできます。たとえば、文書ルート・ディレクトリーを *.../htmldocs* から *.../htdocs1* に変更して、最初のインスタンスに対応するようにすることができます。

仮想ホスト名を使用する複数インスタンス

この項では、仮想ホスト名を使用して複数 WebSphere Commerce インスタンスを作成する方法を示しています。

前提条件

1. 通常は、インスタンスごとに 1 つのインターネット・プロトコル (IP) アドレス、さらにマシンのために 1 つの IP アドレスが必要となります。たとえば、2 つのインスタンスがある場合、通常は合計 3 つの IP アドレスが必要となります。これら 3 つの IP アドレスはネットワーク上で有効であり、関連するホスト名がドメイン・ネーム・システム (DNS) サーバーに存在しなければなりません。以下の例では、既存のインスタンスがあることを想定しており、追加のインスタンスを作成する方法を示しています。この例で、IP アドレスとホスト名は以下のとおりです。
 - *m.mm.mm.mmm*、ホスト名は *host1.domain.com* (既存)
 - *n.nn.nn.nnn*、ホスト名は *host2.domain.com* (追加のインスタンス)



- マシンの IP アドレスとホスト名をインスタンスの 1 つに使用することもできます。この場合、2 つのインスタンスのために 2 つの IP アドレスだけが必要になります。

注: IBM HTTP Server 1.3.19.1 では、ホスト名に下線文字 (_) を使用できません。

マシンに IP アドレスをもう 1 つ追加するには、末端ウィンドウで以下のコマンドを実行します。

```
ifconfig network_interface addif IP_address
ifconfig network_interface:interface_number IP_address
        netmask subnet_mask broadcast broadcast_address
ifconfig network_interface:interface_number up
```

ここで、*network_interface* は、ネットワーク・インターフェース・カードの装置名、*IP_address* は、マシンに追加する IP アドレス、*interface_number* は、最初のコマンドの実行後にシステムが割り当てる番号、*subnet_mask* は、マシンで使用されるサブネット・マスクです。たとえば、アドレス 129.42.16.99 をネットワーク装置名 hme0 に追加したい場合は、次のコマンドを入力します。

```
ifconfig hme0 addif 129.42.16.99
```

システムは "Created new logical interface hme0:1" のようなメッセージで応答します。この例では、インターフェース番号は 1 になります。ネットワークでサブネット・マスク 255.255.255.0 およびブロードキャスト・アドレス 129.42.16.255 を使用する場合、残りのコマンドは次のようになります。

```
ifconfig hme0:1 129.42.16.99 netmask 255.255.255.0 broadcast 129.42.16.255
ifconfig hme0:1 up
```

ifconfig コマンドについて詳しくは、Solaris オペレーティング環境の資料を参照してください。

2. 各インスタンスのホスト名は、完全に別々の IP アドレスに解決されなければなりません。たとえば、構成マネージャーを実行して複数のインスタンスを作成できることを確認するために、各インスタンスごとにホスト名と IP アドレスの両方に対して nslookup コマンドを実行することができます。ホスト名は正しい IP アドレスに解決して、IP アドレスは正しいホスト名に解決するはずですが。

```
nslookup host1.domain.com
nslookup m.mm.mm.mmm
```

```
nslookup host2.domain.com
nslookup n.nn.nn.nnn
```

3. 2 番目のインスタンスを作成する前に、WebSphere Application Server 管理サーバーが稼働していることを確認します。

- 追加のインスタンスごとに、マシンのメモリーを 512 MB ずつ、スワップ・スペースをプロセッサごとに 1GB ずつ増やす必要があります。

複数インスタンスの作成

新規インスタンスを作成する前に、以下のとおりにする必要があります。

- インスタンスごとに 1 つの有効な文書ルートがなければなりません。これを行う最も簡単な方法は、既存の文書ルートのコピーして名前変更することです。

IBM HTTP Server を使用している場合、`/opt/IBMHTTPD/htdocs/locale` (`locale` は、Web サーバー・マシンが使用する言語環境のロケール・コード) をコピーし、それを `/opt/IBMHTTPD/htdocs2` に名前変更します。オプションで、`/opt/IBMHTTPD/htdocs/locale` を再度コピーして、`/opt/IBMHTTPD/htdocs1` に名前変更することもできます。

- 作成する新規 WebSphere Commerce インスタンスごとに、新規 Oracle 表スペースを作成する必要があります。

最初の WebSphere Commerce インスタンスを作成したと想定する場合、91 ページの『第 11 章 構成マネージャーによるインスタンスの作成または変更』の指示に従って、必要な追加のインスタンスを 1 つずつ作成できます。以下の表で、既存のインスタンスは**インスタンス 1** で表され、新規のインスタンスは**インスタンス 2** で表されます。既存のインスタンスの値を変更する必要はありません。この表は、新しいインスタンスの変更済みデフォルト値をリストしています。これらの値をインスタンスで使用したい実際の値 (インスタンス名、ホスト名、など) に置き換えてください。

構成マネージャーのフィールド	インスタンス 1	インスタンス 2
インスタンス - インスタンス名	<i>demo1</i>	<i>demo2</i>
インスタンス - インスタンス・ルート・パス	<code>/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/demo1</code>	<code>/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/demo2</code>
データベース - データベース名	<i>mall1</i>	<i>mall2</i>
Web サーバー - ホスト名	<i>host1.domain.com</i>	<i>host2.domain.com</i>
Web サーバー - プライマリー (IBM HTTP Server 用)	<code>/opt/IBMHTTPD/ htdocs1</code>	<code>/opt/IBMHTTPD/ htdocs2</code>

構成マネージャーのフィールド	インスタンス 1	インスタンス 2
Web サーバー - プライマリー (iPlanet Web サーバー用)	<i>/usr/Netscape/server4/htdocs1</i>	<i>/opt/Netscape/server4htdocs2</i>
Payment Manager - ホスト名	<i>host1.domain.com</i>	<i>host2.domain.com</i>

インスタンスの開始

WebSphere Commerce インスタンスが作成されると：

1. WebSphere Application Server 管理コンソールで以下のエントリーが作成されていることを確認します。
 - WebSphere Commerce Server demo1
 - WebSphere Commerce Server demo2
 - VH_demo1 (demo1 に対応)
 - VH_demo2
2. IBM HTTP Server を使用している場合、以下の <VirtualHost> セクションが IBM HTTP Server 構成ファイル (*/opt/IBMHTTPD/conf/httpd.conf*) の Virtual Host セクションに存在することを調べます。

```
<VirtualHost m.mm.mm.mmm>
ServerName host1.domain.com
DocumentRoot "/opt/IBMHTTPD/htdocs1/en_US"
</VirtualHost>
.
.
.
<VirtualHost m.mm.mm.mmm:443>
SSLEnable
SSLClientAuth 0
ServerName host1.domain.com
DocumentRoot "/opt/IBMHTTPD/htdocs1/en_US"
.
.
.
<VirtualHost m.mm.mm.mmm:8000>
SSLEnable
SSLClientAuth 0
ServerName host1.domain.com
DocumentRoot "/opt/IBMHTTPD/htdocs1/en_US"
.
.
.
<VirtualHost n.nn.nn.nnn>
```



```

ServerName host2.domain.com
DocumentRoot "/opt/IBMHTTPD/htdocs2/en_US"
</VirtualHost>
.
.
.
<VirtualHost n.nn.nn.nnn:443>
SSLEnable
SSLClientAuth 0
ServerName host2.domain.com
DocumentRoot "/opt/IBMHTTPD/htdocs2/en_US"
.
.
.
<VirtualHost n.nn.nn.nnn:8000>
SSLEnable
SSLClientAuth 0
ServerName host2.domain.com
DocumentRoot "/opt/IBMHTTPD/htdocs2/en_US"

```

上記の例で SSLClientAuth 0 ディレクティブは、インスタンスの構成マネージャーの Web サーバー・ノードで基本認証モードを選択したことを表していることに注意してください。 Web サーバー・ノードで X.509 認証モードを選択した場合、ディレクティブは SSLClientAuth 2 となります。

3. IBM HTTP Server を使用している場合、以下の 2 つの <Directory> セクションが IBM HTTP Server 構成ファイル (/opt/IBMHTTPD/conf/httpd.conf) の Document Root セクションに存在することを調べます。

```

<Directory "/opt/IBMHTTPD/htdocs1">
Options Indexes
AllowOverride None
order allow,deny
allow from all
</Directory>

```

```

<Directory "/opt/IBMHTTPD/htdocs2">
Options Indexes
AllowOverride None
order allow,deny
allow from all
</Directory>

```

4. インスタンスの Web サーバー構成ファイルに変更を加えて、いずれの Web サーバー・エントリーも、そのインスタンスで使用される Web サーバーの完全修飾ホスト名を指すようにします。
5. インスタンスごとに Web サーバー・ホーム・ページをロードできることを確認してください (たとえば、 <http://host1.domain.com> および <http://host2.domain.com>)。
6. インスタンスごとにソース Web サーバー・ホーム・ページをロードできることを確認してください (たとえば、 <https://host1.domain.com> および <https://host2.domain.com>)。

7. インスタンスごとに、87 ページの『インストール後スクリプトの実行』の説明に従って、インストール後スクリプトを実行したことを確認してください。その際、それぞれのインスタンスに固有の正しい情報を入力する必要があります。その情報には、第 2 のインスタンスのロケール、Web サーバー文書ルート・ディレクトリー、および各インスタンスの Web サーバーのホスト名が含まれます (これらに限られるわけではありません)。
8. WebSphere Application Server 管理コンソールで各インスタンスを開始します。
9. 各インスタンスの WebSphere Commerce Accelerator をロードできることを確認してください。

第 16 章 WebSphere Application Server のセキュリティーの使用可能化

この章では、WebSphere Application Server のセキュリティーを使用可能にする方法について説明します。 WebSphere Application Server のセキュリティーを使用可能にする、すべての Enterprise JavaBean コンポーネントが何者かによってリモートで呼び出されることを防ぎます。

注: WebSphere Application Server セキュリティーを使用可能にする場合には、ご使用のマシンが以下の要件を満たしているよう強くお勧めします。

- 1 GB 以上のマシン・メモリー
- WebSphere Commerce アプリケーションの場合は、384 MB 以上のヒープ・サイズ

始める前に

セキュリティーを使用可能にする前に、セキュリティーが使用可能になった WebSphere Application Server がユーザー ID の妥当性を検査する方法を知る必要があります。 WebSphere Application Server は LDAP またはオペレーティング・システムのユーザー・レジストリーを WebSphere Application Server ユーザー・レジストリーとして使用できます。

LDAP ユーザー・レジストリーを使用したセキュリティーの使用可能化

LDAP を WebSphere Application Server ユーザー・レジストリーとして使用しているときに WebSphere Application Server を使用可能にするには、システムに wasuser としてログインし、以下のようにします。

1. WebSphere Application Server 管理サーバーを開始して、WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。
2. コンソールで、以下のようにグローバル・セキュリティー設定値を変更します。
 - a. 「コンソール」メニューから、「**Security Center (セキュリティー・センター)**」を選択します。
 - b. 「一般」タブで、「**Enable Security (セキュリティーを使用可能にする)**」を選択します。
 - c. 「Authentication (認証)」タブで、「**Lightweight Third Party Authentication (LTPA)**」を選択します。 LTPA 設定を入力し、この機能を使用しない場合は「**Enable Single Sign On (単一サインオンを使用可能にする)**」チェック・ボックスのチェックを外します。使用しているディレクトリー・サーバーのタイプに

応じて、以下のように「LDAP Settings (LDAP 設定)」タブに値を入力します。

表 6. SecureWay ユーザー

フィールド名	定義	サンプル値	備考
セキュリティー・サーバー ID	ユーザー ID	<i>user_ID</i>	<ul style="list-style-type: none"> これは LDAP 管理者にすることはできません。 cn=xxx として指定されているユーザーは使用しないでください。 このユーザーのオブジェクト・クラスが、「LDAP Advanced Properties (LDAP 拡張プロパティ)」ウィンドウの「User Filter (ユーザー・フィルタ)」フィールドに指定されたオブジェクト・クラスと互換性があることを確認します。
セキュリティー・サーバー・パスワード	ユーザー・パスワード	<i>password</i>	
ホスト	LDAP サーバーのホスト名	<i>hostname.domain</i>	
ディレクトリー・タイプ	LDAP サーバーのタイプ	SecureWay	
ポート	LDAP サーバーが使用しているポート		
基本識別名	検索に使用される識別名	<i>o=ibm, c=us</i>	
バインド識別名	検索時にディレクトリーにバインドするための識別名		このフィールドは不要です。

表 6. SecureWay ユーザー (続き)

フィールド名	定義	サンプル値	備考
バインド・パスワード	バインド識別名のパスワード		このフィールドは不要です。

- d. 「Role Mapping (役割マッピング)」タブで、WebSphere Commerce エンタープライズ・アプリケーションを選択し、「**Edit Mappings (マッピングの編集)**」をクリックします。
 - 1) 「WCSecurityRole」を選択し、「**Select (選択)**」ボタンをクリックします。
 - 2) 「Select users/groups (ユーザー / グループの選択)」チェック・ボックスを選択し、ステップ 2c (163 ページ) で使用したユーザー ID を「検索」フィールドに入力して、「**検索**」をクリックします。「Available Users/Groups (使用可能なユーザー / グループ)」リストからそのユーザーを選択し、「**追加**」をクリックして「Selected Users/Groups (選択したユーザー / グループ)」リストに追加します。次に、各パネルで「**OK**」をクリックし、セキュリティー・センターを終了します。
 - e. LTPA をユーザー・レジストリーとして最初に選択するとき、LTPA パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。LTPA のパスワードを入力します。
3. WebSphere Commerce 構成マネージャーをオープンし、「**Instance List (インスタンス・リスト)**」→「*instance_name*」→「**インスタンス・プロパティ**」→「**セキュリティー**」を選択し、「**Enable Security (セキュリティーを使用可能にする)**」チェック・ボックスを選択します。認証モードとして「**Operating System User Registry (オペレーティング・システムのユーザー・レジストリー)**」を選択し、ステップ 2c (163 ページ) で入力したユーザー名とパスワードを入力します。「**適用**」をクリックして、構成マネージャーを終了します。
 4. WebSphere Application Server 管理サーバーを停止してから、再始動します。この後は、WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンするとき、セキュリティー・サーバー ID とパスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

オペレーティング・システム・ユーザー・レジストリーを使用したセキュリティーの使用可能化

ユーザー・レジストリーとしてオペレーティング・システムを使用するためには、WebSphere Application Server を root として実行する必要があります。WebSphere Application Server を root として実行するには、以下のステップを実行します。

1. root としてログインします。
2. WebSphere Application Server を開始し、root としてログインしている間に WebSphere Application Server 管理コンソールを立ち上げます。

```
export DISPLAY=fully_qualififed_host_name:0.0
cd /opt/WebSphere/AppServer/bin
./startupServer.sh &
./adminclient.sh remote_WAS_host_name port
```

fully_qualififed_host_name は WebSphere Application Server 管理コンソールへのアクセスに使用しているコンピューターの名前、*remote_WAS_host_name* は WebSphere Application Server の完全修飾ホスト名、*port* は WebSphere Application Server へのアクセスに使用するポート (デフォルト・ポートは 2222) を示します。

3. WebSphere Application Server 管理コンソールで、以下のようにグローバル・セキュリティ設定値を変更します。
 - a. 「コンソール」メニューから、「**Security Center (セキュリティ・センター)**」を選択します。
 - b. 「一般」タブで、「**Enable Security (セキュリティを使用可能にする)**」チェック・ボックスを選択します。
4. 「**Authentication (認証)**」タブを選択し、「**Local Operating System (ローカル・オペレーティング・システム)**」ラジオ・ボタンを選択します。
5. 「**Security Server ID (セキュリティ・サーバー ID)**」フィールドにセキュリティ・サーバー ID を入力します。以下のようにユーザー名を入力します。

表7.

フィールド名	サンプル値	備考
ユーザー ID	<i>user_ID</i>	root であるユーザー ID、または root 権限を持つユーザー ID。
セキュリティ・サーバー・パスワード	<i>password</i>	これはログインの際に使用した、オペレーティング・システム管理権限のあるユーザーのパスワードです。

6. 「**Role Mapping (役割マッピング)**」タブで、WC エンタープライズ・アプリケーションを選択し、「**Edit Mappings (マッピングの編集)**」ボタンをクリックします。
 - a. 「WCSecurityRole」を選択し、「**Select (選択)**」ボタンをクリックします。
 - b. 「Select users/groups (ユーザー / グループの選択)」チェック・ボックスを選択し、ステップ 5 で使用したユーザー ID を「検索」フィールドに入力して、「**検索**」をクリックします。「Available Users/Groups (使用可能なユーザー / グループ)」リストからそのユーザーを選択し、「**追加**」をクリックして「Selected Users/Groups (選択したユーザー / グループ)」リストに追加します。次に、各パネルで「**OK**」をクリックし、セキュリティ・センターを終了します。

7. WebSphere Commerce 構成マネージャーをオープンし、「**Instance List (インスタンス・リスト)**」→「*instance_name*」→「**インスタンス・プロパティ**」→「**セキュリティ**」を選択し、「**Enable Security (セキュリティを使用可能にする)**」チェック・ボックスを選択します。認証モードとして「**Operating System User Registry (オペレーティング・システムのユーザー・レジストリー)**」を選択し、ステップ 5 (166 ページ) で入力したユーザー名とパスワードを入力します。「**適用**」をクリックして、構成マネージャーを終了します。
8. WebSphere Application Server 管理サーバーを停止してから、再始動します。この後は、WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンするとき、セキュリティ・サーバー ID とパスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

WebSphere Commerce EJB セキュリティーの使用禁止

WebSphere Commerce では、EJB セキュリティーを使用不可にすることができます。WebSphere Commerce セキュリティーを使用不可にするには、以下のようになります。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールを始動します。
2. 「**コンソール**」→「**Security Center (セキュリティ・センター)**」をクリックし、「**一般**」タブの「**Enable Security (セキュリティを使用可能にする)**」チェック・ボックスを選択解除します。
3. WebSphere Commerce 構成マネージャーをオープンして、「**Instance List (インスタンス・リスト)**」→「*instance_name*」→「**インスタンス・プロパティ**」→「**セキュリティ**」を選択し、「**Enable Security (セキュリティを使用可能にする)**」チェック・ボックスをクリアします。
4. WebSphere Application Server 管理サーバーを停止してから、再始動します。

WebSphere Commerce セキュリティー・デプロイメント・オプション

WebSphere Commerce は、さまざまなセキュリティー・デプロイメント構成をサポートしています。以下の表には、使用できるセキュリティー・デプロイメント・オプションが示されています。

表 8. 単一マシンのセキュリティーのシナリオ

WebSphere Application Server セキュリティーが使用可能。	<ul style="list-style-type: none">• オペレーティング・システムを WebSphere Application Server レジストリーとして使用する。• データベースを WebSphere Commerce レジストリーとして使用する。 <hr/> <ul style="list-style-type: none">• LDAP を WebSphere Application Server レジストリーとして使用する。• LDAP を WebSphere Commerce レジストリーとして使用する。 <hr/> <ul style="list-style-type: none">• LDAP を WebSphere Application Server レジストリーとして使用する。
WebSphere Application Server セキュリティーが使用不可、および WebSphere Commerce サイトがファイアウォールに守られている。	<ul style="list-style-type: none">• WebSphere Application Server レジストリーは不要。• データベースを WebSphere Commerce レジストリーとして使用する。 <hr/> <ul style="list-style-type: none">• WebSphere Application Server レジストリーは不要。• LDAP を WebSphere Commerce レジストリーとして使用する。

表 9. 複数マシンのセキュリティーのシナリオ

<p>WebSphere Application Server セキュリティーが使用可能。LDAP が常にデプロイされている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • LDAP を WebSphere Application Server レジストリーとして使用する。 • LDAP を WebSphere Commerce レジストリーとして使用する。
<p>WebSphere Application Server セキュリティーが使用不可、および WebSphere Commerce サイトがファイアウォールに守られている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • LDAP を WebSphere Application Server レジストリーとして使用する。 • データベースを WebSphere Commerce レジストリーとして使用する。 • LDAP をセットアップし、LDAP レジストリー中に 1 つの管理エントリーを組み込む必要がある。
	<ul style="list-style-type: none"> • データベースを WebSphere Commerce レジストリーとして使用する。 • WebSphere Application Server レジストリーは不要。 • 単一サインオンはサポートされない。
	<ul style="list-style-type: none"> • LDAP を WebSphere Application Server レジストリーとして使用する。 • WebSphere Application Server レジストリーは不要。

注: ファイアウォールの内部で WebSphere Commerce サイトを操作する場合は、WebSphere Application Server セキュリティーを使用不可にすることができます。WebSphere Application Server セキュリティーを使用不可にするのは、ファイアウォールの内部で有害なアプリケーションが稼働していないことが確認されている場合に限る必要があります。

第 17 章 複製

この章では、3 層構成 (リモート Web サーバーとリモート・データベース) を想定した WebSphere Application Server 複製メカニズムの使用方法を示します。1 層または 2 層 (リモート・データベースを使用する場合) の構成など、より単純な WebSphere Commerce 構成に対して WebSphere Application Server 複製メカニズムを使用することもできます。負荷の分担を強化するために WebSphere Application Server 水平複製モデルを使用して WebSphere Commerce マシンを追加したい場合に、この章をお読みください。

この項にとって有用な情報源は IBM Redbooks です。コピーを入手するには、以下の IBM Redbook の Web サイトをご覧ください。

<http://www.redbooks.ibm.com/>

水平複製

水平複製 は、複数の物理マシン上のアプリケーション・サーバーの複製を定義する伝統的な手法であり、これによって、単一の WebSphere アプリケーションが、単一のシステム・イメージを表しながら、複数のマシンにまたがって存在することができます。水平複製はスループットを改善する手段になります。

水平複製を構成するには、以下のようにします。

1. WebSphere Commerce を 3 層構成内にインストールします。
 - マシン A を Web サーバーとします。
 - マシン B をデータベース・サーバーとします。
 - マシン C を WebSphere Commerce サーバーとします。
2. 複製を行うマシンで、WebSphere Commerce をインストールして構成します。このマシンをマシン D とします。マシン D で次のようなステップを行う必要があります。
 - a. 27 ページの『第 3 章 Oracle8i Database のインストールおよび構成』の説明に従ってマシン D にデータベース・クライアントをインストールします。その際、リモート・データベース・サーバーと、該当する場合は Web サーバーを指し示します。また、バッチ・セットを適用し、上記の章の冒頭に概略されているとおりに Oracle のレベルを引き上げる必要もあります。
 - b. 66 ページの『代替リモート Web サーバーと一緒に使用する WebSphere Application Server のインストール』の説明に従ってマシン D に WebSphere Application Server をインストールします。その際、リモート・データベース・サーバーと、該当する場合は Web サーバーを指し示します。また、WebSphere

Application Server の eFix と FixPak を適用し、この章に説明されているとおりに JDK アップグレードを適用する必要があります。

- c. /opt/WebSphere/AppServer/bin ディレクトリーの admin.config ファイルを編集します。以下の値が false に設定されていることを確認します。

```
install.initial.config=false  
com.ibm.ejs.sm.adminServer.createTables=false
```

- d. 75 ページの『第 8 章 WebSphere Commerce のインストール』に説明されているとおりに WebSphere Commerce をマシン D にインストールします。
- e. 87 ページの『インストール後スクリプトの実行』に概略されているとおりに、インストール後スクリプトを実行します。このスクリプトを実行するときに指定するユーザーとポートが、同スクリプトを初めて実行したときに指定したものと必ず同じになるようにする必要があります。
- f. 以下のファイルをマシン C からマシン D にコピーします。

```
/opt/WebSphere/AppServer/config/plugin-cfg.xml
```

- g. マシン C とマシン D 上で WebSphere Application Server を始動します。
- h. WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。両方の WebSphere Application Server マシンのノードが表示されるはずです。

WebSphere Commerce マシンを構成する必要があります。マシンを構成するには、次のようにします。

1. マシン D のデータ・ソースを構成します。
 - a. WebSphere Application Server が開始されていることを確かめます。
 - b. WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。
 - c. 必ず最新の JDBC ドライバーを使用してください。システム上の classes12.zip ファイルのロケーションを入力します。
 - d. 「**WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)**」
→ 「**Resources (リソース)**」 → 「**JDBC Providers (JDBC プロバイダー)**」
→ 「**WebSphere Commerce JDBC Driver (WebSphere Commerce JDBC ドライバー)**」の *instance_name* を展開します。
 - e. 右側のペインで「Nodes (ノード)」タブを選択してから、「**Install New (新規インストール)**」をクリックします。
 - f. 新規のドライバーのインストール先のノードを選択し、「**Specify Driver (ドライバーの指定)**」をクリックしてから、「**Add (追加)**」をクリックし、オープンしたウィンドウで正しい JDBC ドライバー (classes12.zip) を探します。「**Set (設定)**」をクリックしてから「**Install (インストール)**」をクリックします。
 - g. 「**適用**」をクリックします。
2. マシン C 上でサーバー・グループを作成します。
 - a. WebSphere Application Server を始動します。
 - b. WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。

- c. 「**WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)**」 → 「**ノード**」 → *host_name* → 「**Application Servers (アプリケーション・サーバー)**」の順に拡張表示します。
 - d. **WebSphere Commerce Server** - *instance_name* アプリケーション・サーバーを停止します。
 - e. 「**WebSphere Commerce Server**」 - 「*instance_name*」を右マウス・ボタンでクリックし、「**Create Server Group (サーバー・グループの作成)**」を選択します (サーバー・グループがまだ存在しない場合)。
 - f. サーバー・グループ名を入力し、「**OK**」をクリックします。
3. 水平複製を WebSphere Commerce Server グループに追加します。
 - a. マシン C で WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。
 - b. 「**WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)**」 → 「**Server Groups (サーバー・グループ)**」の順に拡張表示します。
 - c. WebSphere サーバー・グループを右マウス・ボタンでクリックします。
 - d. 「**New (新規作成)**」 → 「**Clone (複製)**」を選択します。
 - e. 新しい複製名 (たとえば、WebSphere Commerce - *instance_name*) を入力します。
 - f. マシン D 上のノードを選択し、「**Create (作成)**」をクリックします。
 4. 以下のディレクトリーをマシン C からマシン D にコピーします。


```
/opt/WebSphere/AppServer/installedApps/  
WC_Enterprise_App_instance_name.ear
```
 5. マシン D で、以下に合致するようにこのディレクトリーの名前を変更します。


```
/opt/WebSphere/AppServer/installedApps/  
WebSphere_Commerce_Enterprise_Application_-_instance_name.ear
```
 6. 以下のディレクトリーをマシン C からマシン D にコピーし、既存のディレクトリーを上書きします。


```
/opt/WebSphere/CommerceServer/instance
```
 7. マシン D のテキスト・エディターで、以下のファイルをオープンします。


```
/opt/WebSphere/CommerceServer/instance/instance_name/xml/  
instance_name.xml
```

出現するすべての WC_Enterprise_App_instance_name.ear を WebSphere_Commerce_Enterprise_Application_-_instance_name.ear に変更します。
 8. 以下のようにして、Web サーバー・プラグインを再生成します。
 - a. コマンド行で、次のディレクトリーに移動します。


```
/opt/WebSphere/AppServer/bin
```
 - b. 以下のコマンドを実行します。

```
./GenPluginCfg.sh -adminNodeName node_name -nameServicePort  
port_number
```

ここで、*node_name* はノードの短い論理名、*port_number* は、87 ページの『インストール後スクリプトの実行』で指定されている、WebSphere Application Server にアクセスする際に使用するポートです。(デフォルトでは、インストール後スクリプトはポート 2222 を使用します。)

9. テキスト・エディターで、以下のファイルをオープンします。

```
/opt/WebSphere/AppServer/config/plugin-cfg.xml
```

10. 以下の行を、plugin-cfg.xml ファイルの <Config> の下に直接追加します。

```
<Property name="CacheLibrary" value="/opt/WebSphere/CommerceServer/bin/  
libwccache.so" />
```

11. plugin-cfg.xml ファイルを Web サーバー・マシン (マシン A) とマシン D にコピーします。
12. Web サーバー (マシン A) を再始動します。
13. WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンし、サーバー・グループを始動します。

垂直複製

垂直複製は、同じ物理マシン上にアプリケーション・サーバーの複数の複製を定義する手法です。経験によると、単一の JVM プロセスによってインプリメントされた単一のアプリケーション・サーバーは、大型のマシンの CPU 能力を十分に利用していないことが示されています。このことは大型のマルチプロセッサ・マシンについて特に言えることで、単一の Java 仮想計算機 (JVM) の中での並行性の制限に起因しています。垂直複製は複数の JVM プロセスを作成するための直接的なメカニズムを提供し、複数の JVM プロセスが一緒になってすべての処理能力を十分に利用することができます。

垂直複製を構成するには、以下のようにします。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。
2. WebSphere Commerce 複製を作成するため、以下のようにします。
 - a. 「**WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)**」 → 「ノード」 → 「*host_name*」 → 「**Application Servers (アプリケーション・サーバー)**」の順に拡張表示します。
 - b. 「**WebSphere Commerce Server (WebSphere Commerce サーバー)**」 → 「*instance_name*」を選択して、右マウス・ボタンでクリックします。「停止」を選択します。
 - c. 「**WebSphere Commerce Server (WebSphere Commerce サーバー)**」 → 「*instance_name*」を右マウス・ボタンでクリックし、「**Create Server Group (サーバー・グループの作成)**」を選択します (サーバー・グループがまだ存在しない場合)。

- d. サーバー・グループ名 (たとえば WebSphere Commerce Server Group) を入力し、「OK」をクリックします。
 - e. 「**WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)**」
→ 「**Server Groups (サーバー・グループ)**」の順に拡張表示します。
 - f. 新規サーバー・グループ (たとえば WebSphere Commerce Server Group) を右マウス・ボタン・クリックし、「新規」→ 「**Clone (複製)**」を選択します。
 - g. 複製されるアプリケーション・サーバーの名前を入力します。
 - h. 「作成」を選択します。
3. WebSphere Application Server プラグインを再生成します。プラグインを再生成するには、以下のようにします。
 - a. コマンド・ウィンドウを開き、次のディレクトリーに移動します。
`/opt/WebSphere/AppServer/bin`
 - b. 以下のコマンドを入力します。
`/GenPluginCfg.sh -adminNodeName node_name -nameServicePort port_number`

ただし *node_name* はノードの短い論理名、*port_number* は、WebSphere Application Server が使用するポートです (デフォルトは 2222 です)。
 - c. WebSphere Application Server を停止します。
 - d. テキスト・エディターで、以下のファイルをオープンします。
`/opt/WebSphere/AppServer/config/plugin-cfg.xml`
 - e. 以下の行を、plugin-cfg.xml ファイルの <Config> の下に直接追加します。
`<Property Name="CacheLibrary" value="/opt/WebSphere/CommerceServer/bin/libwccache.so" />`

注: リモート Web サーバーを使用している場合は、plugin-cfg.xml を WebSphere Application Server から Web サーバー・マシンにコピーしてください。
 - f. Web サーバーを再始動します。
 4. WebSphere Application Server を始動します。
 5. WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。
 6. 「**WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)**」
→ 「**Server Groups (サーバー・グループ)**」 → 「*server_group_name*」の順に拡張表示します。
 7. サーバー・グループを右クリックし、「開始」を選択します。

第 18 章 単一サインオン

この章では、WebSphere Commerce の単一サインオンのセットアップ方法の概要を示します。単一サインオンについての詳細は、*IBM WebSphere Commerce セキュリティー・ガイド*、バージョン 5.4 を参照してください。

前提条件

単一サインオンを使用可能にするには、以下の要件に適合している必要があります。

- 既存の LDAP サーバーがインストール済みで構成済みであること。LDAP サーバーの構成に関しては、*IBM WebSphere Commerce 追加ソフトウェア・ガイド*、バージョン 5.4 を参照してください。
- WebSphere Commerce がインストール済みで構成済みであること。
- WebSphere Application Server が使用可能になっていること。WebSphere Application Server の使用可能化に関しては、163 ページの『第 16 章 WebSphere Application Server のセキュリティーの使用可能化』を参照してください。

単一サインオンの使用可能化

制限事項と前提条件

単一サインオンを WebSphere Commerce と一緒に使用するときには、いくつかの主要な制限があります。制限は次のとおりです。

- LPTA cookie は、さまざまな Web サーバー・ポートに送られることがあります。
- `ldapentry.xml` ファイルに変更を加え、オブジェクト・クラス `ePerson` を追加する必要があります。これは `ldapocs` エレメントの属性です。
- `instance.xml` に変更を加え、LDAP コンポーネント内のユーザーを対象にマイグレーションが「オン」になっていることを確認する必要があります。
- 単一サインオン構成に参加するマシンは、それぞれのシステム・クロックが同期している必要があります。
- 単一サインオンがサポートされるのは、WebSphere Application Server LPTA (Lightweight Third Party Authentication) トークンの読み取りと発行を行えるアプリケーション同士の間のみです。

単一サインオンを使用可能にするには、以下のようにする必要があります。

1. WebSphere Application Server 内で単一サインオンを使用可能にします。詳しくは、次のアドレスにある WebSphere Application Server InfoCenter で「single sign-on」を検索してください。

<http://www.ibm.com/software/webservers/appserv/doc/v40/ae/infocenter/index.html>

「**Single Sign-On: WebSphere Application Server (単一サインオン: WebSphere Application Server)**」を選択してから、以下の項を完了します。

- 「**Configuring SSO for WebSphere Application Server (WebSphere Application Server 用の SSO の構成)**」。
 - 「**Modify WebSphere Application Server security (WebSphere Application Server のセキュリティー設定の変更)**」。

注: LDAP の各フィールドに入力する方法を詳述しているステップは、無視しても問題はありません。

- 「**Export the LTPA keys to a file (ファイルへの LTPA 鍵のエクスポート)**」。
2. WebSphere Commerce マシンで、WebSphere Commerce 構成マネージャーを開始します。
 3. メンバー・サブシステム・ノードを構成するために、以下のようになります。
 - a. 「**WebSphere Commerce**」 → 「*host_name*」 → 「**インスタンス・リスト**」 → 「*instance_name*」 → 「**インスタンス・プロパティ**」 → 「**Member Subsystem (メンバー・サブシステム)**」の順に拡張表示します。
 - b. 「**Authentication Mode (認証モード)**」ドロップダウン・メニューで、「**LDAP**」を選択します。
 - c. 「**Single sign-on (単一サインオン)**」チェック・ボックスにチェックを付けます。
 - d. 「**ホスト**」フィールドに、LDAP サーバーの完全修飾ホスト名を入力します。
 - e. 「**Administrator Distinguished Name (管理者識別名)**」フィールドに、管理者の識別名を入力します。これは、LDAP サーバーで使用しているのと同じ名前にしてください。
 - f. 「**Administrator Password (管理者パスワード)**」フィールドに、管理者のパスワードを入力します。これは、LDAP サーバーで使用しているのと同じパスワードにしてください。「**確認パスワード**」フィールドで、パスワードを確認します。
 - g. 残りのフィールドをそれぞれ完成させます。
 - h. 「**適用**」をクリックしてから「**OK**」をクリックします。
 4. WebSphere Application Server を再始動します。

第 7 部 管理用タスク

第 19 章 WebSphere Commerce コンポーネントの開始と停止

この付録では、WebSphere Commerce パッケージの一部を成す各プロダクトを開始および停止する方法について説明します。任意のコンポーネントを再始動する必要がある場合に、以下の情報を参考にしてください。

WebSphere Commerce の開始と停止

WebSphere Commerce インスタンスを開始または停止するには、次のようにします。

1. データベース管理システムと WebSphere Application Server が開始済みであることを確認してください。Oracle を使用している場合は、Oracle の資料を参照してください。WebSphere Application Server の場合、『WebSphere Application Server の開始と停止』を参照してください。
2. ターミナル・ウィンドウで以下のように入力して、WebSphere Application Server 管理コンソールを立ち上げます。

```
su - wasuser
export DISPLAY=fully_qualified_host_name:0.0
cd /opt/WebSphere/AppServer/bin
./adminclient.sh host_name port_number
```

3. 「**WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)**」を拡張表示します。
4. 「**Nodes (ノード)**」を拡張表示します。
5. ホスト名を拡張表示します。
6. 「**Application Servers (アプリケーション・サーバー)**」を拡張表示します。
7. 「**WebSphere Commerce Server**」 → 「*instance_name*」を選択して、右マウス・ボタンでクリックします。必要に応じて、「**Start (開始)**」または「**Stop (停止)**」を選択します。

WebSphere Application Server の開始と停止

WebSphere Application Server を開始するには、次のようにします。

1. データベース管理システムが開始されていることを確認します。
2. ターミナル・ウィンドウに次のように入力します。

```
su - wasuser
export DISPLAY=fully_qualified_host_name:0.0
cd /opt/WebSphere/AppServer/bin
./startupServer.sh &
```

/opt/WebSphere/AppServer/logs/tracefile を調べて、WebSphere Application Server が正常に開始済みであることを確認します。

WebSphere Application Server を停止するには、以下のようにします。

1. ターミナル・ウィンドウに次のように入力して、WebSphere Application Server 管理コンソールを開始します。

```
su - wasuser
export DISPLAY=fully_qualified_host_name:0.0
cd /opt/WebSphere/AppServer/bin
./adminclient.sh host_name port_number
```

2. WebSphere Application Server 管理コンソールで、短いホスト名を持つノードを選択します。
3. 「Stop (停止)」ボタンをクリックします。次のような警告メッセージが表示されます。

You are trying to stop the node that the console is connected to. (コンソールの接続先のノードを停止しようとしています。) This will cause the console to exit after the node is stopped. (停止すると、ノードの停止後にコンソールは終了してしまいます。) Do you want to continue? (続けますか)

「Yes (はい)」をクリックして先に進みます。

4. WebSphere Application Server 管理コンソールの後、ターミナル・ウィンドウで次のようなコマンドを発行して、WebSphere Application Server 関連のプロセスがすべて停止したことを確認します。

```
ps -ef | grep AppServer
```

5. このコマンドによって Java プロセスが戻された場合、kill コマンドを発行してそれぞれのプロセスを停止します。

IBM HTTP Server の開始と停止

IBM HTTP Server には、開始および停止できる以下のような 2 つのサーバーがあります。

- IBM HTTP Server
- IBM HTTP 管理サーバー

IBM HTTP Server を開始するには、ターミナル・ウィンドウで以下のコマンドを入力します。

```
su - root
cd /opt/IBMHTTPD/bin
./apachectl start
```

IBM HTTP Server を停止するには、以下のようにします。

1. WebSphere Commerce と WebSphere Application Server が停止していることを確認します。
2. ターミナル・ウィンドウに以下のコマンドを入力します。

```
su - root
cd /opt/IBMHTTPD/bin
./apachectl stop
```

IBM HTTP Administration Server を開始するには、ターミナル・ウィンドウで以下の一連のコマンドを入力します。

```
su - root
cd /opt/IBMHTTPD/bin
./adminctl start
```

IBM HTTP Administration Server を停止するには、ターミナル・ウィンドウで以下の一連のコマンドを入力します。

```
su - root
cd /opt/IBMHTTPD/bin
./adminctl stop
```

Payment Manager の開始と停止

Payment Manager の開始

Payment Manager を開始します。

1. データベースが開始されていることを確認します。
2. Web サーバーを開始します。
3. WebSphere Application Server が開始されていることを確認します。
4. 『Payment Manager アプリケーション・サーバーの開始』の説明に従って、WebSphere Application Server 管理コンソールで Payment Manager アプリケーション・サーバーを開始します。
5. 184 ページの『Payment Manager の開始』の説明に従って、Payment Manager を開始します。

Payment Manager アプリケーション・サーバーの開始

WebSphere Application Server 4.0.2 の使用時には、Payment Manager アプリケーション・サーバーを開始することによって、すべてのサブレットを開始できます。

Payment Manager アプリケーション・サーバーを開始するには、次のようにします。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。
2. 「**WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)**」を拡張表示します。
3. 「**Nodes (ノード)**」を拡張表示します。

4. Payment Manager がインストールされているノードを拡張表示します。
5. 「**Application Servers (アプリケーション・サーバー)**」を拡張表示します。
6. 「**WebSphere Payment Manager**」を右クリックして、「**開始**」を選択します。

Payment Manager の開始

IBMPayServer スクリプトを使用して Payment Manager を開始するには、データベース管理者のパスワードを指定する必要があります。

ターミナル・ウィンドウに以下のコマンドを入力します。

```
su - wasuser
export DISPLAY=fully_qualified_host_name:0.0
cd /opt/PaymentManager
./IBMPayServer
```

Payment Manager が Web サーバーからリモートの位置にインストールされている場合、以下のコマンドを使用して開始します。

```
./IBMPayServer -pmhost fully_qualified_web_server_host_name
```

Payment Manager パスワードを求めるプロンプトが出されます。

別の方法として、Payment Manager のインストール中に自動的に作成されたパスワード・ファイル (.payment ファイル) を使用して Payment Manager を開始することもできます。Payment Manager を開始するコマンドの構文は、次のとおりです。

```
./IBMPayServer -file
```

このファイルにはクリア・テキストの Payment Manager パスワードが含まれているため、この方法で Payment Manager を開始する予定がなければ、このファイルを削除するよう強くお勧めします。

Payment Manager ユーザー・インターフェースの開始

Payment Manager および Payment Manager アプリケーション・サーバーを開始した後、次のようにして Payment Manager ユーザー・インターフェースを開始します。

1. Web ブラウザーで次のアドレスを参照します。

```
http://host_name/webapp/PaymentManager/
```

host_name は、実際の Web サーバーの完全修飾ホスト名です。

2. Payment Manager のログオン・ウィンドウで、Payment Manager 管理者のユーザー ID およびパスワードを入力して、「**OK**」をクリックします。デフォルトのユーザー ID は `wcsadmin`、パスワードは `wcsadmin` パスワードです (デフォルトは `wcsadmin` ですが、ユーザー ID `wcsadmin` を使っていずれかの WebSphere Commerce コンポーネントに初めてログオンするとき、これを変更する必要があります)。

Payment Manager と WebSphere Commerce を併用している場合、 WebSphere Commerce 管理者はすべて Payment Manager ユーザーにもなります。ただし、最初は管理者 ID "wcsadmin" にのみ、"Payment Manager 管理者" 役割が割り当てられています。 Payment Manager ユーザー・インターフェースにログインするには、以下の 4 つの Payment Manager 役割のうちのいずれかが割り当てられた管理者 ID を使用する必要があります。

- Payment Manager 管理者
- マーチャント管理者
- スーパーバイザー
- クラーク

Payment Manager 役割の詳細については、*Payment Manager 管理者ガイド* を参照してください。

wcsadmin ID で Payment Manager ユーザー・インターフェースにログインする前に、wcsadmin ユーザー ID で WebSphere Commerce 管理コンソールにログインし、ID のデフォルト・パスワードを変更しておく必要があります。そこで、パスワードを変更するよう促されます。

WebSphere Commerce 管理コンソールで Payment Manager 管理機能にアクセスすることもできます。

Payment Manager の停止

Payment Manager を停止するには、次のようにする必要があります。

1. データベースが開始されていることを確認します。
2. WebSphere Application Server が開始されていることを確認します。
3. Payment Manager を停止します。
4. WebSphere Application Server の下の Payment Manager アプリケーション・サーバーを停止します。

Payment Manager の停止

Payment Manager は、StopIBMPayServer コマンドを使用して停止できます。

1. /opt/PaymentManager ディレクトリーに移動します。
2. ./StopIBMPayServer と入力します。 StopIBMPayServer スクリプトには、引き数は指定しません。
3. プロンプトが出されたら、Payment Manager パスワードを入力します。

Payment Manager アプリケーション・サーバーの停止

WebSphere Application Server の使用時には、Payment Manager アプリケーション・サーバーを停止することによって、すべてのサブレットを停止できます。Payment Manager アプリケーション・サーバーを停止するには、次のようにします。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールをオープンします。
2. 「**WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)**」を拡張表示します。
3. 「**Nodes (ノード)**」を拡張表示します。
4. Payment Manager がインストールされているノードを拡張表示します。
5. 「**Application Servers (アプリケーション・サーバー)**」を拡張表示します。
6. 「**WebSphere Payment Manager**」を右クリックして、「**停止**」を選択します。

第 20 章 パスワードの設定と変更

WebSphere Commerce Suite のほとんどのコンポーネントでは、オペレーティング・システムによって検証されるユーザー ID とパスワードを使用します。これらのパスワードの変更については、オペレーティング・システムの資料を参照してください。この章では、オペレーティング・システム経由でユーザー ID やパスワードの検証を行わずに、WebSphere Commerce Suite コンポーネントでパスワードを設定および変更する方法を扱います。

構成マネージャー・パスワードの変更

構成マネージャー・パスワードを変更するには、構成マネージャーを立ち上げてから、ユーザー ID とパスワードを入力するウィンドウで「変更」をクリックします。

あるいは、構成マネージャーのユーザー ID とパスワードを変更するために、コマンド・ウィンドウに以下のコマンドを入力します。

```
cd /opt/WebSphere/CommerceServer/bin
./config_env.sh
java com.ibm.commerce.config.server.PasswordChecker -action [action type]
    -pwfile [password file] -userid [user ID]
    -password [userid password] [-newpassword [new userid password]]
```

ここで、action type (アクション・タイプ) は、Add、Check、Delete、または Modify です。各パラメーターについて以下に説明します。

pwfile

ファイルが保管されるパス。デフォルトのパスは、
/opt/WebSphere/CommerceServer/binです。このパラメーターは常に必須です。

userid

追加、作成、削除、または変更するユーザー ID を入力します。このパラメーターは常に必須です。

password

検査、作成、削除、または変更するパスワードを入力します。このパラメーターは、userid パラメーターと組み合わせて使用する必要があります。このパラメーターは常に必須です。

newpassword

特定のユーザー ID のパスワードを変更するには、このパラメーターを使用します。このパラメーターは、userid および password パラメーターと組み合わせて使用する必要があります。このパラメーターが必要なのは、アクション・タイプ Modify を指定する場合です。

暗号化された WebSphere Commerce 管理コンソール・パスワードの判別

セキュリティ上の理由から、WebSphere Commerce 管理コンソール・システムによって割り当てられたパスワードは暗号化されます。暗号化されたパスワードを判別する必要がある場合は、次のようにします。

1. ターミナル・ウィンドウをオープンします。
2. 次のように入力します。

```
cd /opt/WebSphere/CommerceServer/bin
./wcs_encrypt.sh wcsadmin_password [merchant_key]
```

merchant_key には、WebSphere Commerce を構成した際に使用したマーチャント・キーを入れます。デフォルトのマーチャント・キーを使用した場合は、このパラメーターを省略できます。コマンドの応答は 2 つの文字ストリング (一方は ASCII 文字ストリングで、もう一方は 16 進数文字ストリング) で戻されます。

WebSphere Commerce 管理コンソール・パスワードの更新

コマンド行からデータベース作成スクリプトを使用する場合は、パスワードを二重引用符で囲わないと、WebSphere Commerce 管理コンソール・パスワードでログインできません。

WebSphere Commerce 管理コンソールにログインするときにパスワードの問題が生じた場合は、次のようにしてください。

1. Oracle インスタンス ID としてログインした状態で、以下のように入力してデータベースに接続します。

```
sqlplus wc_user_ID/wc_password@wc_SID
```

変数は以下のように定義されています。

wc_user_ID

WebSphere Commerce Oracle ユーザーに割り当てる ID。

wc_password

WebSphere Commerce Oracle ユーザーが使用するパスワード。このパスワードは、すべての Oracle パスワード規則とすべての WebSphere Commerce パスワード規則に従っていなければなりません。

wc_SID

このユーザーと表スペースを使用する WebSphere Commerce データベース・インスタンスの Oracle システム ID (SID)。

2. 以下のコマンドを入力して、USERREG テーブルの WebSphere Commerce 管理コンソールパスワードが wcs_encrypt 暗号化ストリング (ASCII) と一致していることを確認してください。

```
select logonpassword from userreg where logonid='wcsadmin';
```

3. 以下のコマンドを入力します。

```
cd /opt/WebSphere/CommerceServer/bin
./wcs_password.sh password SALT merchant_key
```

ここで、*password* は平文パスワード、*SALT* はパスワードと一緒に使用される SALT です。これは、パスワードを更新している特定ユーザーの USERREG データベース・テーブルの SALT 列にあります。また、*merchant_key* は、WebSphere Commerce インスタンスを作成したときに使用したマーチャント・キーです。

コマンドの出力の例を示すと、次のようになります。

```
IBM*
Licensed Materials - Property of IBM
5697-A16
(C) Copyrights by IBM and by other(s) 1978, 1997. All Rights Reserved.
* Trademark of International Business Machines Corp.
=== WCS Encrypted Password ===
ASCII Format: pArp97jT4NOXN6MyWswTQpwaPbIFsEWQGwfeu08yIyM=
Hex Format: 7041727039376a54344e4f584e364d79577377545170776d
```

この暗号値を使ってパスワードを更新します。たとえば、次のように入力します。

```
update USERREG set
  LOGONPASSWORD='7041727039376a54344e4f584e364d79577377545170776d'
  where LOGONID='wcsadmin';
commit;
```

LOGONPASSWORD の値は暗号化されたストリング (16 進数) になりますのでご注意ください。

WebSphere Commerce 管理コンソール・パスワードの変更

パスワードは、WebSphere Commerce 管理コンソールで変更できます。

WebSphere Commerce 管理コンソールでパスワードを変更するには、次のようにします。

1. WebSphere Commerce 管理コンソールを始動します。
2. 「ログオン」ページで、インストールの際に作成された管理コンソールのログオン・ユーザー名とパスワードを入力します。初期設定では、ユーザー名とパスワードは両方とも `wcsadmin` になっています。
3. 「パスワード変更」チェック・ボックスを選択し、「ログオン」をクリックします。「パスワード変更」ページが表示されます。
4. 「旧パスワード」フィールドに、現在の管理コンソールのログオン・パスワードを入力します。このフィールドには、最大 128 文字の英数字を入力できます。
5. 「新規パスワード」フィールドに、新しいログオン・パスワードを入力できます。このフィールドには、最大 128 文字の英数字を入力できます。
6. 「確認パスワード」フィールドに、パスワードをもう一度入力します。

7. 新しいパスワードを保管する場合は、「変更」をクリックします。「ストアおよび言語の選択」ページが表示されます。
8. WebSphere Commerce 管理コンソールを終了します。

IBM HTTP Server 管理者パスワードの設定

IBM HTTP Server 管理者パスワードを設定するには、以下のようになります。

1. 以下のディレクトリーに切り替えます。

```
/opt/IBMHTTPD/bin
```

2. 以下のコマンドを入力します。

```
./htpasswd -b ../conf/admin.passwd user password
```

ここで、*user* および *password* は、IBM HTTP Server への管理権限を付与するユーザー ID およびパスワードです。

これで、IBM HTTP Server 管理パスワードを正しく設定できました。

SSL 鍵ファイル・パスワードの変更

IBM HTTP Server を使用している場合、SSL 鍵ファイル・パスワードを変更するには、以下のステップに従います。

1. 次のように入力して「Key Management Utility (鍵管理ユーティリティー)」を開きます。

```
cd /opt/IBMHTTPD/ssl  
./ikeyman
```

2. 「**Key Database File (鍵データベース・ファイル)**」メニューから、「オープン」を選択します。

3. 以下のディレクトリーに切り替えます。

```
/opt/IBMHTTPD/ssl
```

鍵ファイル (ファイル拡張子 *.kdb*) は、このフォルダーに入っていない限りありません。入っていない場合は、151 ページの『第 14 章 IBM HTTP Server での実行のための SSL の使用可能化』で示されている指示に従って新しい鍵ファイルを作成します。

4. 「**Key Database File (鍵データベース・ファイル)**」メニューから、「パスワード変更」を選択します。「パスワード変更」ウィンドウが表示されます。
5. 新しいパスワードを入力し、「**Stash the password to a file (パスワードをファイルに隠す)**」を使用可能にします。
6. 「**OK**」をクリックします。パスワードが変更されます。

これで、SSL 鍵ファイルの管理パスワードを正しく変更できました。

第 21 章 通常の管理用タスク

この章では、WebSphere Commerce を使用する際に通常実行する管理用タスクのいくつかについて説明します。

WebSphere Application Server へのポート・ホスト別名の追加

WebSphere Application Server には、2 つのポート・ホスト別名 (非セキュア・サーバー・ポート (ポート 80) とセキュア・サーバー・ポート (ポート 443)) を追加する必要があります。非セキュア・ポートは自動的に追加されます。セキュア・ポート・ホスト別名を手動で追加するには、次のようなステップを行います。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールを始動します。
2. 「**WebSphere Administrative Domain (WebSphere 管理可能ドメイン)**」を拡張表示します。
3. 左側のコンソール・フレームにある「**Virtual Host (仮想ホスト)**」を選択します。
4. 単一インスタンス環境の場合は、**default_host** を選択し、複数インスタンス環境の場合は、**virtual_host_instance_name** を選択します。
5. 「一般」タブを選択します。
6. ポート番号が「別名」フィールドに表示されない場合は、「追加」をクリックして、ポート番号を追加します。
7. 完了したら、「適用」をクリックします。
8. 左側のコンソール・フレームで「**WebSphere Commerce Server**」を選択します。
9. WebSphere Commerce サーバーをマウスの右ボタンでクリックし、「停止」を選択して停止します。サーバーの停止が正常に完了すると、ダイアログ・ボックスが表示されます。
10. WebSphere Commerce サーバーをマウスの右ボタンでクリックし、「開始」を選択して再始動します。

構成マネージャーの使用

構成マネージャーを始動するには、以下のステップを行います。

1. ターミナル・ウィンドウをオープンします。
2. 87 ページの『インストール後スクリプトの実行』で作成された WebSphere Application Server ユーザーとしてログオンしていることを確認します。

```
su - wasuser
```

3. WebSphere Commerce マシンで作業している場合でも、次のようにして表示内容をエクスポートします。

```
export DISPLAY=fully_qualified_host_name:0.0
```

システムが Can not open DISPLAY= と応答する場合、WebSphere Commerce マシンで次のコマンドを実行します。

```
xhost +host_name
```

host_name は、構成マネージャーのアクセス元にするマシンの完全修飾ホスト名です。

4. 以下のコマンドを発行します。

```
cd /opt/WebSphere/CommerceServer/bin
./config_server.sh
```

注:

- a. `config_server.sh` コマンドを入力したターミナル・ウィンドウをクローズしないでください。クローズすると、構成マネージャー・サーバーが停止します。
- b. 構成マネージャー・サーバーをバックグラウンド・プロセスとして実行しないでください。これはセキュリティ上の潜在的な危険になります。

5. 次のメッセージを待ちます。Registry created. CMServer bound in registry.
6. 別のターミナル・ウィンドウをオープンします。
7. 87 ページの『インストール後スクリプトの実行』で作成された WebSphere Application Server ユーザーとしてログオンしていることを確認します。

```
su - wasuser
```

8. WebSphere Commerce マシンで作業している場合でも、次のようにして表示内容をエクスポートします。

```
export DISPLAY=fully_qualified_hostname:0.0
```

9. 以下のコマンドを発行します。

```
cd /opt/WebSphere/CommerceServer/bin
./config_client.sh &
```

10. 構成マネージャーのユーザー ID とパスワードを入力するウィンドウが表示されます。構成マネージャーのデフォルト・ユーザー ID は `webadmin`、デフォルト・パスワードは `webibm` です。
11. 初めてログインした時は、パスワードの変更を求められます。

WebSphere Commerce インスタンスの更新

WebSphere Commerce インスタンスの構成設定を変更する場合は、構成マネージャーまたはコマンド行から実行できます。

構成マネージャーを使用して WebSphere Commerce インスタンスを更新するには、以下のようになります。

1. 前の項で説明したようにして構成マネージャーをオープンします。
2. インスタンスのリストから、構成するインスタンスを選択し、設定を変更するノードを選択します。 91 ページの『第 11 章 構成マネージャーによるインスタンスの作成または変更』のガイドラインに従って、インスタンスを更新するにはどのフィールドを変更すればよいかを判断します。
3. インスタンスを更新したら、「適用」をクリックして変更内容を適用します。

WebSphere Commerce インスタンスの削除

WebSphere Commerce インスタンスを除去しなければならない場合は、以下のステップを完了します。

1. WebSphere Application Server 管理コンソールで、以下のようになります。
 - a. 「**Application Servers (アプリケーション・サーバー)**」を拡張表示します。
 - b. 削除するインスタンスに対応する WebSphere Commerce Application Server を右クリックし、「停止」を選択します。
 - c. 「**Enterprise Applications (エンタープライズ・アプリケーション)**」を拡張表示します。
 - d. 「**WebSphere Commerce エンタープライズ・アプリケーション - *instance_name***」を右クリックし、「停止」を選択してから、再度右クリックし、「除去」を選択します。
 - e. 削除するインスタンスに対応する WebSphere Commerce Application Server を右クリックし、「除去」を選択します。
 - f. 「**Resources (リソース)**」を拡張表示します。
 - g. 「**JDBC Providers (JDBC プロバイダー)**」を拡張表示します。
 - h. インスタンスに対応する JDBC ドライバーを拡張表示し、「**Data Sources (データ・ソース)**」をクリックします。
 - i. 右側のパネルでデータ・ソースを右クリックし、「除去」を選択します。
 - j. JDBC ドライバーを右クリックし、「除去」を選択します。
 - k. 「**Virtual Hosts (仮想ホスト)**」をクリックします。
 - l. 右ペインで **VH_***instance_name* を右クリックし、「除去」を選択します。
 - m. 右ペインで **VH_***instance_name_tools* を右クリックし、「除去」を選択します。
 - n. 「ノード」を拡張表示します。
 - o. *host_name* を右マウス・ボタンでクリックしてから、「**Regen Webserver Plugin (Web サーバー・プラグインの再生成)**」を選択します。
 - p. 182 ページの『IBM HTTP Server の開始と停止』や各 Web サーバーの資料に記載されている情報に従って、Web サーバーを再始動します。

2. 以下のいずれかの方法により、WebSphere Commerce インスタンスを削除します。

- WebSphere Commerce 構成マネージャーで、インスタンスをマウスの右ボタンでクリックし、「削除」を選択します。
- ターミナル・ウィンドウで、以下のコマンドを実行します。

```
cd /opt/WebSphere/CommerceServer/bin
./config_server.sh
```

別のターミナル・ウィンドウで、以下のコマンドを実行します。

```
cd /opt/WebSphere/CommerceServer/bin
./config_client.sh -startCmdLineConfig deleteInstance <instance_name>
```

3. WebSphere Commerce データベースを除去します。

- a. Oracle ユーザーとしてログインします。
- b. ターミナル・ウィンドウから、以下のコマンドを発行して SQL*Plus セッションを開始します。

```
sqlplus system/system_password@wcs_SID
```

wcs_SID は、28 ページの『WebSphere Application Server、WebSphere Commerce、および WebSphere Payment Manager 用のデータベースの作成』で指定した WebSphere Commerce データベースの Oracle システム ID (SID) です。

- c. SQL*Plus セッションで以下のコマンドを発行します。

```
DROP USER wcs_Oracle_user_ID CASCADE;
DROP TABLESPACE wcs_tablespace_name INCLUDING CONTENTS;
EXIT;
```

- d. 27 ページの『第 3 章 Oracle8i Database のインストールおよび構成』で作成した実際の表スペース・ファイルも除去する必要があります。

4. /opt/WebSphere/CommerceServer/instances/instance_name ディレクトリを削除します。

5. 次のファイルを削除してください。

```
/opt/WebSphere/AppServer/installedApps/WC_Enterprise_App_instance_name.ear
```

instance_name は、削除する WebSphere Commerce インスタンスの名前です。

コマンド行での構成作業

コマンド行で、次のことを行えます。

- インスタンスを更新するには、以下のようになります。

```
./config_client.sh -startCmdLineConfig updateInstance <xml_file>
```

- インスタンスを削除するには、以下のようになります。

```
./config_client.sh -startCmdLineConfig deleteInstance <instance_name>
```

- 既存のインスタンスをリストするには、以下のようになります。

```
./config_client.sh -startCmdLineConfig getInstances
```

- インスタンスに関する情報を検索するには、以下のようになります。

```
./config_client.sh -startCmdLineConfig getInstanceInfo <instance_name>
```

- インスタンスの構成情報をファイルに出力するには、以下のようになります。

```
./config_client.sh -startCmdLineConfig getInstanceConfig  
instance_name print_to_file_name
```

WebSphere Application Server 管理コンソールのオープン

WebSphere Application Server 管理コンソールにアクセスするには、以下のステップを実行してください。

```
su - wasuser  
export DISPLAY=fully_qualified_host_name:0.0  
cd /opt/WebSphere/AppServer/bin  
./adminclient.sh remote_WAS_host_name port
```

fully_qualified_host_name は WebSphere Application Server 管理コンソールへのアクセスに使用しているコンピューターの名前、*remote_WAS_host_name* は WebSphere Application Server の完全修飾ホスト名、*port* は WebSphere Application Server へのアクセスに使用するポート (デフォルト・ポートは 2222) を示します。

WebSphere Commerce 管理コンソールの開始

WebSphere Commerce 管理コンソールを立ち上げるには、次のようになります。

1. WebSphere Commerce インスタンスが開始されていることを確かめます。インスタンスは、WebSphere Application Server 管理コンソールから開始できます。
2. Internet Explorer をオープンして、URL: `https://host_name:8000/adminconsole` を入力します。この *host_name* には、WebSphere Commerce サーバーの完全修飾ホスト名が入ります。
3. 以下のようにして、管理コンソールにログオンします。
 - 管理コンソールにログオンしてログオン・パスワードを変更する場合は、次のようになります。
 - a. 「ログオン」ページで、インストールの際に作成された管理コンソールのログオン・ユーザー名とパスワードを入力します。初期設定では、ユーザー名とパスワードは両方とも `wcsadmin` になっています。
 - b. 「パスワード変更」チェック・ボックスを選択し、「ログオン」をクリックします。「パスワード変更」ページが表示されます。
 - c. 「旧パスワード」フィールドに、現在の管理コンソールのログオン・パスワードを入力します。このフィールドには、最大 128 文字の英数字を入力できません。

- d. 「新規パスワード」フィールドに、新しいログオン・パスワードを入力できます。このフィールドには、最大 128 文字の英数字を入力できます。
 - e. 「確認パスワード」フィールドに、パスワードをもう一度入力します。
 - f. 新しいパスワードを保管する場合は、「変更」をクリックします。「ストアおよび言語の選択」ページが表示されます。
- 管理コンソールのログオン・パスワードを変更せずにログオンする場合は、次のようにします。
 - a. 「ログオン」ページで、インストールの際に作成された管理コンソールのログオン・ユーザー名とパスワードを入力し、「ログオン」をクリックします。初期設定では、ユーザー名とパスワードは両方とも `wcsadmin` になっています。複数のストアまたは言語での操作が許可されている場合、「ストアおよび言語の選択」ページが表示されます。単一のストアおよび言語での操作が許可されている場合、「管理コンソール」ホーム・ページが表示されます。「管理コンソール」ホーム・ページには、実行を許可されているタスクが表示されます。
4. 「ストアおよび言語の選択」ページでは、作業を行うストアの名前と使用したい言語を選択します。1 つのストアでの操作が許可されている場合は、初めからストアが選択されています。また、1 つの言語での操作が許可されている場合は、初めから言語が選択されています。「管理コンソール」ホーム・ページが表示されます。「管理コンソール」ホーム・ページには、実行を許可されているタスクが表示されます。

IBM HTTP Server ホーム・ページへの接続

IBM HTTP Server を使用している場合、Web サーバーのホーム・ページに接続するには、以下のステップに従います。

1. ユーザー ID `root` としてログオンし、ターミナル・ウィンドウで以下のコマンドを入力することにより、IBM HTTP Server が開始されていることを確認します。

```
cd /opt/IBMHTTPD/bin
./apachectl start
```

2. Web ブラウザーを始動し、すべてのディスクおよびメモリー・キャッシュを使用不可にしてクリアしてから、すべてのプロキシ・サーバーを使用不可にします。(一部のブラウザーでは、プロキシ・サーバーが *Socks* サーバーと呼ばれています。)
3. Web サーバーのフロントページにアクセスするには、Web ブラウザーに以下の URL を入力します。

```
http://host_name
```

Web サーバーをカスタマイズした場合、ホスト名の後に Web サーバーのフロントページの名前を入力する必要があります。

これで、Web サーバーのフロントページに正しくアクセスできました。

IBM HTTP Server での仮想ホスト名の使用

実際のサーバー・ホスト名の代わりに仮想ホスト名を使用すると、ファイル構造がわからないのでセキュリティーが向上するうえ、見た目にもよりプロフェッショナルな Web サイトを構築できます。

仮想ホスト名を作成するには、以下のステップを実行します。

1. ユーザー ID `wasuser` に切り替えます。
2. `/opt/IBMHTTPD/conf` ディレクトリーに切り替えます。
3. テキスト・エディターで `httpd.conf` ファイルをオープンします。
4. `DirectoryIndex index.html` を検索してください。 `index.html` の部分をストアのホーム・ページ名に置き換えます。
5. `#ServerName new.host.name` を検索してください。この行をコメント化し、`new.host.name` の部分を仮想ホスト名に置き換えます。
6. `<VirtualHost machine.name.com:443>` を検索してください。 `machine.name.com` の部分を、登録しているホスト名に置き換えます。
7. `DocumentRoot "/opt/IBMHTTPD/htdocs/locale"` を検索してください。 `locale` の部分には、Web サーバー・マシンで使用されている言語環境のロケール・コードが入ります。サポートされているロケール・コードのリストは、15 ページの『WebSphere Commerce で使用されるロケール』を参照してください。このパスがストアの HTML サブディレクトリーを指すように変更を加えてください。
8. 「ファイル」から、「保管」を選択します。

wasuser ユーザー ID へのデータベース特権の追加

`wasuser` がデータベースへのアクセスを必要とする場合や、このユーザー ID で `IDResGen`、`MassLoad`、`IDResolve` といったツールを使用する場合は、このユーザー ID にデータベース特権を追加する必要があります。これを行うには、以下のステップを完了します。

1. `ORACLE_HOME` 変数が設定されていることを確認します。
2. `ORACLE_HOME/bin` がシステム `PATH` 変数に含まれていることを確認します。

WebSphere Application Server プラグインの設定を更新するための `obj.conf` ファイルの編集

57 ページの『Sun JDK レベルのアップグレード』で `eFix` をインストールした後に追加の `iPlanet Web` サーバーを作成する場合は、Web サーバーの構成ファイルを変更する必要があります。エディターで `obj.conf` ファイルをオープンし、次のような変更を加えてください。

- `Init fn="load-types" mime-types="mime.types"` の後に以下を追加します。

```
Init fn="load-modules" funcs="as_init,as_handler,as_term"  
  shlib="/opt/WebSphere/AppServer/bin/libns41_http.so"  
Init fn="as_init" bootstrap.properties="/opt/WebSphere/AppServer  
  /config/plugin-cfg.xml"
```

- <Object name="default"> の後に以下を追加します。

```
service fn="as_handler"  
NameTrans from="/IBMWebAS" fn="pfx2dir"  
  dir="/opt/WebSphere/AppServer/web"  
NameTrans from="/WSsamples" fn="pfx2dir"  
  dir="/opt/WebSphere/AppServer/WSsamples"
```

ここでは、表示上の都合で複数の行に分けているに過ぎません。

Payment Manager のセットアップ

Payment Manager Cassette の使用

SET 機能の一部として、IBM Payment Manager 3.1.2 を使用できます。ここで提供されている情報は、Payment Manager のプロセスと要件をおおまかに示すものに過ぎません。SET、Payment Manager、および構成マネージャーに関する付加的な情報は、オンライン情報として提供されています。Payment Manager に関する詳細は、*IBM WebSphere Payment Manager Administrator's and User's Guide* を参照してください。Payment Manager 資料をお探しの場合は、214 ページの『Payment Manager の情報』を参照してください。

IBM Payment Manager をセットアップするには、以下を行う必要があります。

1. 支払い処理を実行するための決済機関を手配します。決済機関からは、構成に関する詳細情報や必要な証明書が提供されます。
2. 決済機関から提供された情報を使用して、SET を構成してください。このステップは、Payment Manager ユーザー・インターフェースを使用して実行されます。マーチャントの決済機関とブランドを構成する一環として、マーチャントの SET 証明書が取得されます。
3. ホーム・ページを作成するときは、ショッパーがウォレットを取得するために必要とする情報を含めてください。この情報は、決済機関から提供されるでしょう。まだショッパーがすぐにウォレットを使用できるようになっていない場合は、Payment Manager の Merchant Originated Payment (MOP) フィーチャーを使用できます。MOP のサポートに関する詳細は、WebSphere Commerce のオンライン・ヘルプを参照してください。

Payment Manager 管理者の役割

Payment Manager をインストールする時点で、WebSphere Commerce 管理者 ID wcsadmin に Payment Manager 管理者の役割が自動的に割り当てられます。Payment Manager 管理者の役割を使えば、ID で Payment Manager を制御および管理することができます。

注:

1. ログオン・ユーザー ID `wcsadmin` は削除したり名前を変更したりしないでください。また、`wcsadmin` に事前に割り当てられている `Payment Manager` の役割は変更しないようにしてください。もし変更すると、`Payment Manager` の整合性に関連した `WebSphere Commerce` の機能の一部が動作しなくなります。
2. `WebSphere Commerce` の管理者に `Payment Manager` の役割を割り当てた場合、後でその管理者のログオン・ユーザー ID を削除したり名前を変更したりするときには、ID を削除または名前変更する前に、まずその管理者に割り当てた `Payment Manager` の役割を削除してください。

重要

`wcsadmin` ユーザー ID に加えて、`Payment Manager` は `Payment Manager` 管理者役割を以下の 2 つの管理者 ID に事前に割り当てます。

- `admin`
- `ncadmin`

ユーザーが不用意にこの `Payment Manager Administrator` 役割を取得しないようにするには、以下のようにすることができます。

- `WebSphere Commerce` 管理コンソールを使用して、`WebSphere Commerce` の中で上記の管理者 ID を作成します。
- `Payment Manager` のユーザー・インターフェースで、「ユーザー」を選択します。
- この ID から `Payment Manager` 管理者の役割を削除します。

Payment Manager マシンのセットアップ

`Payment Manager` マシンを構成するときは、*IBM WebSphere Payment Manager for Multiplatforms* 管理者ガイド の『始めに』の章を参照してください。この項は、以下のプロセスを順にたどって解説しています。

- `Payment Manager` のユーザー・インターフェースの開始
- `Payment Manager` マーチャントの作成およびカセットの許可
- ユーザー役割の割り当て
- アカウントの作成
- 支払い処理の管理

`Payment Manager` ユーザー・インターフェースにログオンする前に、`WebSphere Commerce` が実行中であって、`Payment Manager` エンジンが開始および初期化されていることを確認してください。詳しくは、183 ページの『`Payment Manager` の開始と停止』を参照してください。

重要

Payment Manager のユーザー・インターフェースの「**Payment Manager 設定**」パネルにリストされたホスト名は、完全修飾ホスト名であることを確認する必要があります。完全修飾ホスト名でない場合、ホスト名フィールドを変更して完全修飾ホスト名にし、「更新」をクリックし、「**Disable Payment Manager (Payment Manager 使用不可)**」をクリックしてから、「**Enable Payment Manager (Payment Manager 使用可能)**」をクリックします。

WebSphere Commerce インスタンス用の支払いノードを構成マネージャーでまだ更新していない場合は、97 ページの『Payment Manager』の説明に従って、これを更新してください。

このほか、Payment Manager の管理機能へは、サイト・マネージャーの「Payment Manager」メニューから WebSphere Commerce 管理コンソールを介してもアクセスできます。

第 8 部 付録

付録 A. WebSphere Commerce コンポーネントのアンインストール

WebSphere Commerce のインストールにおいて問題が生じた場合、1 つまたは複数のコンポーネントをアンインストールしてやり直す場合があります。この付録では、WebSphere Commerce の各コンポーネントをアンインストールする方法を説明します。原則として、コンポーネントのアンインストールは、インストールしたときと逆の順番で行います。ですから、必須ソフトウェアをすべてインストールしている場合は、次のような順番でアンインストールを実行することになります。

1. Payment Manager
2. WebSphere Commerce
3. WebSphere Application Server
4. IBM HTTP Server
5. Oracle8i Database

Payment Manager のアンインストール

Payment Manager をアンインストールするには、グラフィカル端末のあるマシンで以下のようにします。

1. ユーザー ID root に切り替えます。
2. Payment Manager エンジンと Payment Manager Application Server を停止させます。この方法については、183 ページの『Payment Manager の開始と停止』に概説されています。
3. シェル・プロンプトで、次のように入力して Payment Manager インストール・ディレクトリーに切り替えます。

```
cd /opt/PaymentManager
```

4. まず最初に、ご使用のカセットに対応するコマンドを実行して、Payment Manager Cassettes をアンインストールします。

```
./UninstallCyberCash.sh  
./UninstallSET.sh  
./UninstallBankServACH.sh  
./UninstallVisaNet.sh
```

5. Payment Manager フレームワークをアンインストールします。
./UninstallFramework.sh

Payment Manager の再インストールについて計画している場合や、Payment Manager アンインストール・プログラムがすべての Payment Manager コンポーネントを除去しな

かった場合には、*Payment Manager* インストール・ガイド の第 12 章の「Emergency uninstall procedure」の指示に従う必要があるかもしれません。

WebSphere Commerce のアンインストール

WebSphere Commerce をアンインストールする前に、カスタマイズしたコンポーネントや、`/opt/WebSphere/CommerceServer` 以外のディレクトリーにある WebSphere Commerce 関連のデータをすべて保管しておいてください。そうしないと、これらのデータは削除されてしまいます。

WebSphere Commerce をアンインストールするには、以下のようになります。

1. ユーザー ID `root` でログオンします。
2. WebSphere Commerce を再インストールする予定がある場合は、以前作成したストアのカスタマイズ済みファイルがあるディレクトリーをバックアップしておいてください。
3. WebSphere Application Server 管理コンソールで WebSphere Commerce を停止させます。
4. 構成マネージャーで WebSphere Commerce インスタンスを削除します。
5. `/bin/admintool&` と入力して、管理ツールを始動します。「Admintool: Users (Admintool: ユーザー)」ウィンドウが表示されます。
6. 「**Browse (ブラウズ)**」プルダウン・メニューで、「**Software (ソフトウェア)**」を選択します。「Admintool: Software (Admintool: ソフトウェア)」ウィンドウが表示されます。
7. パッケージのリストから、以下のパッケージを選択します。
 - **WebSphere Commerce - runtime**
 - **WebSphere Commerce - docs**
8. 「**編集**」プルダウン・メニューで「**削除**」を選択します。「Admintool: Warning (Admintool: 警告)」ウィンドウが表示されます。
9. 「**削除**」をクリックします。「Admintool: Delete Software (Admintool: ソフトウェアの削除)」ウィンドウが表示されます。
10. 選択したパッケージの削除についての確認メッセージに対して、`y` と答えます。
11. そのパッケージが削除されたら、**Enter** を押します。「Admintool: Delete Software (Admintool: ソフトウェアの削除)」ウィンドウがクローズします。
12. (まだ開いているはずの)「Admintool: Software (Admintool: ソフトウェア)」ウィンドウで、「**ファイル**」プルダウン・メニューから「**終了**」を選択して、Admintool プログラムを終了します。
13. `/opt` ディレクトリーに切り替え、`/opt/WebSphere/CommerceServer` ディレクトリーがまだ残っていればそれを除去します。

14. Web サーバーの構成ファイルから、WebSphere Commerce 固有の情報をすべて除去してください。IBM HTTP Server には WebSphere Commerce のセクションが 3 つ、iPlanet Web サーバーには 1 つあります。これらのセクションは次のようになっています。

```
##### IBM WebSphere Commerce Suite (Do not edit this section) #####  
.  
.  
.  
##### End of IBM WebSphere Commerce Suite (Do not edit this section) #####
```

WebSphere Application Server のアンインストール

WebSphere Application Server をアンインストールするには、次のようにします。

1. Web サーバーを停止します。
2. 181 ページの『WebSphere Application Server の開始と停止』の説明に従って、WebSphere Application Server を停止します。
3. /opt/WebSphere/AppServer ディレクトリーまたはそのサブディレクトリーでファイルを作成またはカスタマイズした場合、それらを保存しておきなければ、異なるディレクトリーにそれらをバックアップしてください。
4. /opt/WebSphere/AppServer ディレクトリーに移動します。
5. ./uninstall.sh と入力して、アンインストール・プログラムを開始します。
6. アンインストールのウィンドウがオープンしたら、「**アンインストール**」をクリックして、システムから WebSphere Application Server を除去してください。
7. /opt/WebSphere/AppServer ディレクトリーがまだ存在するなら、次のように入力してそれを除去します。

```
cd /opt/WebSphere  
rm -r AppServer
```

注: WebSphere Application Server をインストールする前に Web サーバー構成ファイルに対して行ったすべての変更内容やカスタマイズ内容は、バックアップ構成ファイルにあります。これらの設定を再びアクティブにするには、それらの設定をバックアップ・ファイルからアクティブな Web サーバー構成ファイルに転送する必要があります。

IBM HTTP Server のアンインストール

注:

1. IBM HTTP Server をアンインストールした場合は、WebSphere Application Server もアンインストールする必要があります。

2. IBM HTTP Server と WebSphere Application Server を再インストールするときは、必ず WebSphere Application Server を再インストールする前に IBM HTTP Server をインストールしてください。

IBM HTTP Serverをアンインストールするには、以下のようにします。

1. ユーザー ID root でログオンします。
2. 以下のコマンドを入力して、IBM HTTP Server を停止します。

```
cd /opt/IBMHTTPD/bin
./apachectl stop
```
3. /bin/admintool& と入力して、管理ツールを始動します。「Admintool: Users (Admintool: ユーザー)」ウィンドウが表示されます。
4. 「**Browse (ブラウズ)**」プルダウン・メニューで、「**Software (ソフトウェア)**」を選択します。「Admintool: Software (Admintool: ソフトウェア)」ウィンドウが表示されます。
5. パッケージのリストから、名前に HTTP Server が付くすべてのパッケージを選択します。また、証明書や SSL 基本ランタイム (gsk5bas) も選択してください。
6. 「**編集**」プルダウン・メニューで「**削除**」を選択します。「Admintool: Warning (Admintool: 警告)」ウィンドウが表示されます。
7. 「**削除**」をクリックします。「Admintool: Delete Software (Admintool: ソフトウェアの削除)」ウィンドウが表示されます。
8. 選択したパッケージの削除についての確認メッセージに対して、「はい」と答えます。
9. すべてのパッケージが削除されたら、Enter を押します。「Admintool: Delete Software (Admintool: ソフトウェアの削除)」ウィンドウがクローズします。
10. (まだ開いているはずの)「Admintool: Software (Admintool: ソフトウェア)」ウィンドウで、「**ファイル**」プルダウン・メニューから「**終了**」を選択して、Admintool プログラムを終了します。

重要:

IBM HTTP Server を再インストールするときは、手動で SSL を有効にする必要があります。

WebSphere Commerce コンポーネントの再インストール

WebSphere Commerce パッケージ全体を再インストールする場合は、25 ページの『第 2 部 Oracle8i Database のインストール』の指示に従ってください。

WebSphere Commerce の一部を再インストールする場合は、以下の一般的な規則に従ってください。

- 各コンポーネントに該当する章を参考にしながら、本書でリストされている順番どおりにすべてのコンポーネントをインストールしてください。

- アンインストールしたいすべてのコンポーネントをアンインストールしてから、それらすべてを再インストールします (コンポーネントを 1 つずつアンインストールしてから再インストールするではありません)。
- WebSphere Application Server をアンインストールして再インストールしなければ、Web サーバーをアンインストールして再インストールすることはできません。
- Web サーバーを再インストールする場合は、SSL を手動で有効にする必要があります。ガイドンスについては、151 ページの『第 14 章 IBM HTTP Server での実行のための SSL の使用可能化』を参照してください。

付録 B. トラブルシューティング

この付録は以下の 2 つのセクションに分かれています。

- ダウンロード可能なツール
- ログ・ファイルとその使用法
- 特定のトラブルシューティング・ステップ

ダウンロード可能なツール

WebSphere Commerce Installation and Configuration Checker

WebSphere Commerce Installation and Configuration Checker (IC Checker) は、スタンドアロンのダウンロード可能な問題判別ツールです。これを使用して、WebSphere Commerce のインストールと構成を検査することができます。IC Checker は構成データとログを収集して、簡単なエラー・チェックを実行します。以下に、WebSphere Commerce IC Checker についての説明を示します。

- 現在サポートされている製品は、WebSphere Commerce Suite 5.1 Start と Pro、WebSphere Commerce 5.1 Business Edition、および WebSphere Commerce 5.4 Pro と Business Edition です。
- 現在サポートされているプラットフォームは、Windows NT 4.0、Windows 2000、AIX、Solaris、および OS/400 です。
- ツールは、以下の URL にアクセスしてオンラインでダウンロードすることができます。

▶ Business

www.ibm.com/software/webservers/commerce/whats_new_support.html
www.ibm.com/software/webservers/commerce/wc_be/support-tools.html

▶ Professional

www.ibm.com/software/webservers/commerce/whats_new_support.html
www.ibm.com/software/webservers/commerce/wc_pe/support.html

ログ・ファイル

WebSphere Commerce では以下のログが生成されます。

WASConfig.log

/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/*instance_name*/logs ディレクトリにがあります。このログには、WebSphere Commerce エンティティ Bean のインポートやデータ・ソースの作成などの、WebSphere Application Server アクションが記録されます。

createdb.log

/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/*instance_name*/logs ディレクトリにがあります。このログには、WebSphere Commerce スキーマ作成に関する情報が記録されます。

WCSconfig.log

/opt/WebSphere/CommerceServer/instances ディレクトリにがあります。このログには、構成マネージャーのアクションが記録されます。このログの詳細レベルは、構成マネージャーのメニュー・オプションを使用して変更できます。

populatedb.log

/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/*instance_name*/logs ディレクトリにがあります。このログには、インスタンスの作成時に作成されたデータベースへのデータの移植に関する情報が記録されます。

populatedbni.log

/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/*instance_name*/logs ディレクトリにがあります。このログには、インスタンスの作成時に作成されたデータベースへの、各国語データの移植に関する情報が記録されます。

wcs.log

/opt/WebSphere/CommerceServer/instances/*instance_name*/logs ディレクトリにがあります。このログには、WebSphere Commerce アプリケーション・サーバーの始動に関する情報が記録されます。

トラブルシューティング

WebSphere Application Server の問題

- wasuser で startupServer.sh を実行しましたが、以下のようなエラーが生じました。

```
/tmp/sh27350.13:cannot create
```

これが起きたのは、一時ディレクトリに対する正しい許可を wasuser がもっていないからです。一時ディレクトリの許可を 777 に設定してください。

Web サーバーの問題

ここでは、Web サーバーと WebSphere Commerce 5.4 で発生する可能性のある問題について説明します。

- WebSphere Application Server のインストール後に IBM HTTP Server が始動しません。

httpd.conf に誤った構文が含まれている場合があります。以下のようにして httpd.conf ファイルの構文をチェックしてください。

1. root としてログインします。
2. ターミナル・ウィンドウで、以下のコマンドを入力します。

```
cd /opt/IBMHTTPD/bin/httpd -t
```

- WebSphere Application Server のインストール後に IBM HTTP Server が始動しません。

httpd.conf ファイルで必要な行が欠落している場合があります。

/opt/IBMHTTPD/conf/httpd.conf をオープンしてください。以下の行のコメントを解除してください。存在しない場合は追加してください。

```
LoadModule ibm_app_server_http_module
    /opt/WebSphere/AppServer/bin/mod_ibm_app_server_http.so
```

あるいは、

```
LoadModule ibm_app_server_http_module
    /opt/WebSphere/AppServer/bin/mod_ibm_app_server_http.so
```

および

```
AddModule mod_app_server_http.c
    /opt/WebSphere/AppServer/bin/mod_ibm_app_server.so
```

の行がインストール時に入れ替えられた場合があります。 httpd.conf ファイルで LoadModule の後に AddModule があることを確かめてください。

注: 上記の各 LoadModule 行が途中で改行されているのは、単に読みやすくするためです。 LoadModule または AddModule で始まり mod_ibm_app_server.so で終わる各行は、 httpd.conf ファイルでは単一の行になっています。

WebSphere Commerce の問題

- WebSphere Commerce JavaServer Pages (JSP) ファイルにアクセスできません。

JSP ファイルが正しい位置にあることを確かめてください。

WebSphere Commerce サーバーが WebSphere Application Server 管理コンソールで始動されていることを確かめてください。

- 応答が遅いです。

オペレーティング・システムのユーティリティを使用して、システム負荷をチェックしてください。

Web サーバーのアクセス・ログをチェックして、システムに対するユーザー負荷を判別してください。 IBM HTTP Server の場合、アクセス・ログは /opt/IBMHTTPD/logs ディレクトリーにあります。

WebSphere Commerce パフォーマンス・モニターを使用可能にして、アクセスされたコンポーネントを識別してください。このコンポーネントは、構成マネージャーを介して使用可能にできます。詳しくは、115 ページの『コンポーネント』を参照してください。

Payment Manager の問題

- WebSphere Commerce のインストールの直後に Payment Manager をインストールする場合は、問題が発生することはないはずですが、インストール後スクリプトの実行後に Payment Manager をインストールする場合（87 ページの『インストール後スクリプトの実行』に概説されています）は、Payment Manager のインストール時とアンインストール時の両方で、問題が発生します。「WPMinstall cannot detect that WebSphere Application Server is running (WebSphere Application Server が実行中であることを WPMinstall は検出できない)」ことを示すエラーが発生した場合、次のようなステップを実行してください。
 1. すべての WebSphere Application Server と Java プロセスと、WebSphere Commerce に関連したすべてのプロセスを停止します。
 2. /opt/WebSphere/AppServer/bin/admin.config ファイルを編集し、`com.ibm.ejs.sm.adminServer.bootstrapPort=port_number` ディレクティブを除去します。ただし、`port_number` は WebSphere Application Server の非ルート・ポートです（デフォルト値は 2222 です）。
 3. また、テストの前半で `ltdPort=port_number` ディレクティブを追加していた場合は、このディレクティブを除去します。
 4. root ユーザーとして WebSphere Application Server を再始動し、Payment Manager のインストール・プログラムを再実行します。
 5. Payment Manager のインストールが完了したら、Web サーバー（WebSphere Application Server と同じマシン上にあるもの）を含め、WebSphere Application Server と、WebSphere Commerce に関連したすべてのサービスを停止してから、非ルート・オプションを選択したうえで `/opt/WebSphere/CommerceServer/bin/wcpostinstall.sh` スクリプトを再実行します。
 6. WebSphere Commerce インスタンスをすでに作成済みである場合は、以下のコマンドを実行する必要もあります。

```
su - wasuser
cd /opt/WebSphere/CommerceServer/instances/instance_name/xml
chmod ugo+rx payment
cd payment
chmod ugo+r *
exit
```
- 正しい Listen ディレクティブ (Listen 80 または Listen 443) が `httpd.conf` ファイル中でコメント化されていないことを確認します。WebSphere Commerce 構成マネージャーの「Payment Manager」タブを見れば、どのディレクティブが必要かを判断することができます。

付録 C. 詳細情報の参照先

WebSphere Commerce システムとそのコンポーネントに関するさらに詳しい情報は、さまざまな形式でさまざまな情報源から入手できます。以下の後の項では、利用できる情報と利用方法を示します。

WebSphere Commerce の情報

WebSphere Commerce の情報源は、以下のとおりです。

- WebSphere Commerce オンライン・ヘルプ
- WebSphere Commerce PDF ファイル
- WebSphere Commerce Web サイト

オンライン・ヘルプの使用

WebSphere Commerce オンライン情報は、ユーザーが WebSphere Commerce をカスタマイズ、管理、および再構成するための主要な情報源です。WebSphere Commerce のインストールが完了したら、以下に示す URL に移動してオンライン情報内のトピックにアクセスすることができます。

`http://host_name/wchelp`

host_name は、WebSphere Commerce のインストール先マシンの完全修飾 TCP/IP 名です。

印刷可能なドキュメンテーションの入手方法

一部のオンライン情報は、PDF ファイルの形式でも用意されています。それは、Adobe® Acrobat® Reader を使うことによって表示および印刷できます。Acrobat Reader は、Adobe Web サイトから無料でダウンロードできます。その Web アドレスは以下のとおりです。

`http://www.adobe.com`

WebSphere Commerce Web サイトの閲覧

WebSphere Commerce 製品に関する情報は、WebSphere Commerce Web サイトから入手できます。

- Business Edition:
`http://www.ibm.com/software/webservers/commerce/wc_be/lit-tech-general.html`
- Professional Edition:
`http://www.ibm.com/software/webservers/commerce/wc_pe/lit-tech-general.html`

このマニュアルのコピー、およびこのマニュアルの更新済みバージョンは、WebSphere Commerce Web サイトの Library のセクションから PDF ファイルの形式で入手できます。さらに、この Web サイトから、新規および更新済みのドキュメンテーションを入手することもできます。

IBM HTTP Server の情報

IBM HTTP Server の情報は、以下の Web アドレスで入手できます。

<http://www.ibm.com/software/webservers/httpservers/>

資料は、HTML 形式、PDF ファイル、あるいはその両方で入手できます。

Payment Manager の情報

Payment Manager に関するその他の情報は、以下の Payment Manager Web サイトのライブラリー・リンクを介して入手することができます。

<http://www.ibm.com/software/webservers/commerce/payment>

Payment Manager のドキュメンテーションは、以下の場所で入手できます。

- IBM Payment Manager 3.1.2 の CD の */docs/locale* ディレクトリー
- IBM Payment Manager 3.1.2 カセット CD の */docs/locale* ディレクトリー
- Payment Manager のインストール後に、WebSphere Application Server インストール・ディレクトリーの Payment Manager ディレクトリーにインストールされます。

以下の Payment Manager ドキュメンテーションを入手することができます。

- *IBM WebSphere Payment Manager for Multiplatforms* インストール・ガイド の PDF ファイル ([paymgrinstall.pdf](#))
- *IBM WebSphere Payment Manager for Multiplatforms* 管理者ガイド の PDF ファイル ([paymgradmin.pdf](#))
- *IBM WebSphere Payment Manager for Multiplatforms* プログラマーのガイドとリファレンス の PDF ファイル ([paymgrprog.pdf](#))
- *IBM WebSphere Payment Manager for Multiplatforms for SET* 補足 の PDF ファイル ([paymgrset.pdf](#))
- *IBM WebSphere Payment Manager for Multiplatforms Cassette for VisaNet Supplement* の PDF ファイル ([paymgrvisanet.pdf](#))
- *IBM WebSphere Payment Manager for Multiplatforms Cassette for CyberCash* 補足の PDF ファイル ([paymgrcyber.pdf](#))
- *IBM WebSphere Payment Manager for Multiplatforms for BankServACH Supplement* の PDF ファイル ([paygrbank.pdf](#))
- Payment Manager の README ファイル、HTML 形式 ([readme.framework.html](#))

- IBM Cassette for SET の README ファイル、HTML 形式 (readme.set.html)
- IBM Cassette for VisaNet README ファイル、HTML 形式 (readme.visanet.html)
- IBM Cassette for CyberCash README ファイル、HTML 形式 (readme.cybercash.html)
- IBM Cassette for BankServACH README ファイル、HTML 形式 (readme.bankservach.html)

WebSphere Commerce オンライン・ヘルプの「*Secure Electronic Transactions*」セクションにも、Payment Manager に関する情報が含まれています。

WebSphere Application Server

WebSphere Application Server に関する情報は、以下の WebSphere Application Server Web サイトで入手できます。

<http://www.ibm.com/software/webservers/appserv>

Solaris オペレーティング環境ソフトウェアの情報

Solaris ソフトウェア サポートや Solaris ソフトウェアに関するその他の情報については、以下の Web サイトをご覧ください。

<http://www.sun.com/solaris>

その他の IBM 出版物

ほとんどの IBM 出版物は、IBM 指定販売業者または IBM の営業担当員にお問い合わせいただくことにより、購入できます。

付録 D. プログラム仕様と所定稼働環境

このバージョンの WebSphere Commerce は、以下の操作環境をサポートします。

- Solaris 8 Operating Environment (SPARC プラットフォーム版) ソフトウェア、最新の Solaris Patch Cluster をインストール済み

注: WebSphere Commerce において、Solaris 8 Operating Environment (Intel プラットフォーム版) ソフトウェアは稼働環境としてサポートされていません。

WebSphere Commerce 5.4 は、以下のコンポーネントから成ります。

WebSphere Commerce Server

WebSphere Commerce Server は、e-commerce ソリューション内のストアおよびコマース関連機能を処理します。機能性は以下のコンポーネントによって実現されています。

- ツール (ストア・サービス、ローダー・パッケージ、Commerce Accelerator、管理コンソール)
- サブシステム (カタログ、メンバー、ネゴシエーション、オーダー)
- 商品アドバイザ
- 共通サーバー・ランタイム
- システム管理
- メッセージング・サービス
- WebSphere Application Server

ストア・サービス

ストア・サービスは、ストアの特定の運用機能を作成、カスタマイズ、および保守するための中心点として機能します。

ローダー・パッケージ

ローダー・パッケージを使用すると、商品情報を ASCII および XML ファイルで初期ロードできます。また、全体情報、または部分的な情報のインクリメンタル更新もできます。オンライン・カタログを更新するには、このツールを使用します。

WebSphere Commerce Accelerator

ストア・データおよび商品データが作成されたら、それを WebSphere Commerce Accelerator で使用して、ストアを管理し、ビジネス戦略を促進します。WebSphere Commerce Accelerator は、WebSphere Commerce がオンライ

ン・ストアを運営するために配布するすべての機能 (ストア管理、商品管理、マーケティング、顧客のオーダー、顧客サービスなど) のための統合ポイントを提供します。

WebSphere Commerce 管理コンソール

サイト管理者またはストア管理者は、管理コンソールを使うことによって、サイトおよびストアの構成に関連したタスクを実行できます。

- ユーザーおよびグループの管理 (アクセス制御)
- パフォーマンス・モニター
- メッセージングの構成
- IBM WebSphere Payment Manager の機能
- Brokat Blaze Rule の管理

WebSphere Commerce 5.4 には、以下の製品がバンドルおよびサポートされています。

IBM DB2 ユニバーサル・データベース 7.1.0.55

DB2 ユニバーサル・データベースは、サイトに関するあらゆる情報のリポジトリとして、WebSphere Commerce によって使用される、機能の充実したリレーショナル・データベースです。それには、商品データとカテゴリー・データ、ページのグラフィック・エレメントへのポインター、オーダー状況、住所情報、その他の多岐にわたるデータが含まれます。

DB2 エクステンダー

DB2 エクステンダーは、DB2 のオプション・コンポーネントであり、サイトのための付加的な検索機能を提供します。DB2 テキスト・エクステンダーは、顧客による多種多様な検索をサポートします。それには、同義語検索、不完全一致や類似語の検索、そしてブール検索やワイルドカード検索が含まれます。

IBM HTTP Server 1.3.19.1

IBM HTTP Server は、さまざまな管理機能を提供する堅固な Web サーバーです。提供される機能には、Java デプロイメントのサポート、プロキシ・サーバーのサービス、そしてクライアント / サーバーの認証やデータ暗号化などの SSL 3 のサポートを含むセキュリティー機能が含まれます。

IBM Payment Manager 3.1.2

Payment Manager は、SET (Secure Electronic Transaction) や Merchant Initiated Authorization など、さまざまな方法を使用したマーチャント用リアルタイム・インターネット支払処理を提供します。

WebSphere Application Server 4.0.2

WebSphere Application Server は、インターネットおよびイントラネット Web アプリケーションを作成、配備、管理するための Java ベースのアプリケーション環境です。この製品には Sun JDK 1.3.1.01 が含まれています。

IBM WebSphere Commerce Analyzer 5.4

IBM WebSphere Commerce Analyzer は、WebSphere Commerce のオプションとしてインストールされる新しい機能です。IBM WebSphere Commerce Analyzer のエントリー版 (WebSphere Commerce 専用) は、顧客プロファイルやキャンペーン・パフォーマンスのモニターのためのレポート機能を提供します。レポートはカスタマイズできません。IBM WebSphere Commerce Analyzer は、Brio Broadcast Server がなければインストールできません。

Brio Broadcast Server

Brio Broadcast Server は、照会の処理およびレポートの配布を自動化するバッチ処理サーバーです。Brio Broadcast Server は大量のデータを大勢の人々に配布することができますが、セキュリティ保護が製品に組み込まれて、管理者はデータベースへのアクセスおよび文書の配布を厳重に制御できます。

IBM SecureWay Directory Server 3.2.1

IBM SecureWay[®] Directory は、アプリケーション固有のディレクトリーの急増 (コストの増加の主要な要因となる) を解消するための共通ディレクトリーを提供します。IBM SecureWay Directory は、LDAP のクロス・プラットフォームであり、セキュリティおよび e-business ソリューションに対して、高度にスケーラブルで、堅固なディレクトリー・サーバーです。WebSphere Commerce に付属の SecureWay のバージョンは 3.1.1.5 ですが、現在では、Web からダウンロード可能な IBM SecureWay Directory Server 3.2.1 がサポートされています。

Segue SilkPreview 1.0

Segue SilkPreview は、アプリケーション開発の総合的な結果分析とレポートのための情報リポジトリーです。

WebSphere Commerce 5.4 Recommendation Engine powered by LikeMinds

Macromedia LikeMinds は、個々の Web 訪問者に対して商品推奨とターゲットを絞った販売促進を行います。これは、共同フィルター操作および市場バスケット分析に基づく、Personalization サーバーです。

WebSphere Commerce 5.4 は、以下のものもサポートしています。

- Oracle Database 8.1.7 Enterprise Edition または Standard Edition
- Lotus Domino Web サーバーの 5.0.5、5.0.6、および 5.0.8
- iPlanet Web サーバー Enterprise Edition 4.1.8

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものであり、米国以外の国においては本書で述べる製品、サービス、またはプログラムを提供しない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品、プログラムまたはサービスの操作性の評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。IBM 製品、プログラムまたはサービスに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない機能的に同等のプログラムまたは製品を使用することができます。ただし、IBM によって明示的に指定されたものを除き、他社の製品と組み合わせた場合の動作の評価と検証はお客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権（特許出願中のものを含む。）を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権の許諾については、下記の宛先に書面にてご照会ください。

〒106-0032 東京都港区六本木 3-2-31

IBM World Trade Asia Corporation

Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。

IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

本書は定期的に見直され、必要な変更（たとえば、技術的に不適切な表現や誤植など）は、本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム（本プログラムを含む）との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Canada Ltd.
Office of the Lab Director
8200 Warden Avenue
Markham, Ontario
L6G 1C7
Canada

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのもと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書はプランニング目的としてのみ記述されています。記述内容は製品が使用可能になる前に変更になる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

この製品で使用されているクレジット・カードのイメージ、商標、商号は、そのクレジット・カードを利用して支払うことを、それら商標等の所有者によって許可された人のみが、使用することができます。

商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

AIX	DB2	DB2 Extenders
DB2 Universal Database	HotMedia	IBM
	WebSphere	

Notes、および Lotus は、Lotus Development Corporation の商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Action Media、LANDesk、MMX、Pentium および ProShare は、Intel Corporation の米国およびその他の国における商標です。

SET、SET ロゴ、SET Secure Electronic Transaction および Secure Electronic Transaction は、SET Secure Electronic Transaction LLC の商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

UNIX は、The Open Group がライセンスしている米国およびその他の国における登録商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名などはそれぞれ各社の商標または登録商標です。

索引

日本語、数字、英字、特殊文字の順に配列されています。なお、濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アンインストール

IBM HTTP Server 205

Payment Manager 203

WebSphere Application Server 205

WebSphere Commerce 204, 205

インスタンス、WebSphere Commerce 作成、複数の Commerce インスタンスの 157

複数の開始 160

複数の作成 157

複数を作成するステップ 159

複数を作成するための前提条件 157

メモリー所要量、複数の作成のため 159

問題判別 211

IBM HTTP Server の考慮事項、複数作成について 159, 160

インスタンス、WebSphere Commerce インスタンスの更新 192

インスタンス・ノード、構成マネージャー 93, 105

インストール

インストール前 19

完了、iPlanet Web サーバーの 121, 135

前提条件ソフトウェア要件 21

前提条件となるハードウェア要件 20

その他の要件 23

知識、必要な 19

問題判別用の WebSphere

Commerce ログ・ファイル 209

インストール (続き)

ロータス ノーツ 23

IBM HTTP Server 1.3.19.1 39

iPlanet Web サーバー 53

Oracle に関する必要な知識 19

Payment Server 79

Web サーバーを始動できない 210

WebSphere Application Server 61

WebSphere Application Server の問題 210

WebSphere Commerce 75

インストール前

仮想ホスト名を使用する複数インスタンスの 157

その他の要件 23

ソフトウェア要件 21

知識、必要な 19

ハードウェア要件 20

要件 19

ロータス ノーツ 23

Oracle に関する必要な知識 19

Payment Manager 79, 80

Payment Manager のソフトウェア要件 79

インストール・パス (デフォルト) 4

オークション・ノード、構成マネージャー 100, 116

応答が遅い 211

[カ行]

開始

IBM HTTP Server 182

Payment Manager 183

Payment Manager Engine 184

Payment Manager ユーザー・インターフェース 184

WebSphere Commerce インスタンス 101

鍵管理ユーティリティ 153

鍵ファイル、実動のために受け取って設定する 153

鍵ファイル、実動のためにテストする 154

仮想ホスト名、前提条件 157

仮想ホスト名、複数インスタンスに使用 157

仮想ホスト名、複数インスタンスの開始 160

仮想ホスト名、複数インスタンスを作成するステップ 159

管理コンソール 4

管理用タスク

構成マネージャー・パスワードの変更 187

Payment Server のセットアップ 198

WebSphere Application Server へのポート・ホスト別名の追加 191

WebSphere Commerce インスタンスの更新 192

規則、このマニュアルで使用する 3

構成、構成マネージャーでのストア・サービス・ノードの 118

構成作業

構成マネージャー・パスワードの変更 187

iPlanet Web サーバー 53

WebSphere Commerce のインスタンス 91

構成設定、変更 192

構成マネージャー

インスタンス・ノード 93, 105

インスタンス・プロパティ・ノード 101

オークション・ノード 100, 116

キャッシュ・ノード 117

構成設定の変更 192

コンポーネント・ノード 115

作成、インスタンスの 91

構成マネージャー (続き)

- ストア・サービス・ノードの構成 118
- セッション管理ノード 108
- データベース・ノード 94, 101
- トランスポート・ノード 118
- パスワードの変更 187
- メッセージング・ノード 99, 107
- メンバー・サブシステム・ノード 106
- ライセンス・ユーザー管理ノード 119
- レジストリー・ノード 115
- ログ・システム・ノード 98, 117
- Commerce アクセラレーター・ノード 116
- Payment Manager ノード 97, 106
- Web サーバー・ノード 95, 103
- WebSphere ノード 96, 103
- 構成マネージャーでの Commerce アクセラレーター・ノード 116
- 構成マネージャーでの Web サーバー・ノード 103
- 構成マネージャーでのインスタンス・プロパティ・ノード 101
- 構成マネージャーでのキャッシュ・ノード 117
- 構成マネージャーでのコンポーネント・ノード 115
- 構成マネージャーでのセッション管理ノード 108
- 構成マネージャーでのトランスポート・ノード 118
- 構成マネージャーでのメンバー・サブシステム・ノード 106
- 構成マネージャーでのレジストリー・ノード 115
- 構成マネージャーのユーザー ID の要件 16
- 構成マネージャー・パスワードの変更 187

[サ行]

- 最新の変更事項 3
- 作成、複数の Commerce インスタンスの 157
- サポートされる Web ブラウザー 6
- 実動鍵ファイル、現行ファイルとして設定 153
- 実動鍵ファイル、HTTP サーバー用に受け取る 153
- 実動鍵ファイル、HTTP サーバー用に作成 152
- 実動鍵ファイル、HTTP サーバー用にテストする 154
- 商品アドバイザー 4
- ポート番号、使用される 14
- 情報
- 印刷可能なドキュメンテーション 213
- 概要、このマニュアルの 3
- 規則、このマニュアルで使用する 3
- 最新の変更事項 3
- 使用、WebSphere Commerce オンライン・ヘルプの 213
- デフォルトのインストール・パス 4
- Commerce の Web サイト 3
- IBM HTTP Server のホーム・ページ 214
- Payment Manager README 80
- Payment Manager のホーム・ページ 214
- README 3
- Solaris Operating Environment ソフトウェア 215
- WebSphere Application Server のホーム・ページ 215
- WebSphere Commerce 213
- WebSphere Commerce のホーム・ページ 213
- 所定稼働環境 217
- セキュアな実動鍵ファイル、HTTP サーバー用に受け取る 153

- セキュアな実動鍵ファイル、HTTP サーバー用に現行ファイルとして設定 153
- セキュアな実動鍵ファイル、HTTP サーバー用に作成 152, 153
- セキュアな実動鍵ファイル、HTTP サーバー用にテストする 154
- セキュアな実動鍵ファイルの受け取り 153
- セキュアな実動鍵ファイルの作成 152
- セキュアな実動鍵ファイルのテスト 154
- セキュアな実動鍵ファイルを現行ファイルとして設定 153
- セキュアな証明書の要求 153
- その他のインストール前提要件 23

[夕行]

- データベース
- DB2 ユニバーサル・データベース 5
- Oracle 5
- データベース・ノード、構成マネージャー 94, 101
- 停止
- IBM HTTP Server 182
- Payment Manager 183, 185
- Payment Manager Engine、WebSphere Application Server を使った 183
- Payment Manager、StopIBMPayServer の使用 185
- Payment Manager、WebSphere Application Server の使用 186
- WebSphere Commerce インスタンス 101
- デフォルトのインストール・パス 4
- トラブルシューティング
- JSP にアクセスできない 211
- Web サーバー 210
- WebSphere Application Server の問題 210

トラブルシューティング (続き)

WebSphere Commerce の応答が遅い 211

WebSphere Commerce の問題 211

WebSphere Commerce ログ・ファイル 209

[ナ行]

認証局、SSL 証明書の 151, 153

[ハ行]

ハードコピー情報 213

複数の WebSphere Commerce インスタンス

仮想ホストの前提条件 157

仮想ホスト名の使用 157

仮想ホスト名を使用する開始 160

仮想ホストを使用して作成するステップ 159

作成 157

メモリー所要量 159

IBM HTTP Server の考慮事項 159, 160

プログラム仕様 217

ポート番号、WebSphere Commerce によって使用される 14

ポート・ホスト別名、WebSphere Application Server への追加 191

[マ行]

まえがき 3

マニュアルの概要 3

メッセージング・ノード、構成マネージャー 99, 107

問題判別 209

[ヤ行]

ユーザー ID とパスワード

構成マネージャーのユーザー ID 16

IBM HTTP Server のユーザー ID 16

Payment Manager 管理者の役割 17

要求、セキュアな証明書の 153
要件

インスタンスの構成前 87

構成マネージャーのユーザー ID 16

その他の要件 23

ソフトウェア 21

知識 19

ハードウェア 20

ロータス ノーツ 23

IBM HTTP Server のユーザー ID 16

Payment Manager 管理者の役割 17

[ラ行]

ライセンス・ユーザー管理ノード、構成マネージャー 119

ロータス ノーツ 23

ログ・システム・ノード、構成マネージャー 98, 117

ログ・ファイル

ログ・システム・ノード、構成マネージャー 117

createdb.log 209

populatedbni.log 209

populatedb.log 209

WASConfig.log 209

wcsconfig.log 209

wcs.log 209

WebSphere Commerce の問題判別での使用 209

A

Apache.exe 210

B

BankServACH cassette 5

Blaze Innovator Runtime 5

Blaze Rules Server 5

C

Catalog Manager 4

Commerce Accelerator 4

Commerce の Web サイト 3

createdb.log 209

CyberCash cassette 5

D

DB2 ユニバーサル・データベース 5

データベース・ノード、構成マネージャー 94

ポート番号、使用される 14

Payment Manager の 79

DNS (ドメイン・ネーム・サーバー) 157

Domino Web サーバー 5

構成 47

E

Equifax 認証局 151, 153

H

httpd.conf 210

httpd.conf ファイルの VirtualHost セクション 160

I

IBM Developer's Kit Java,

Technology Edition

デフォルトのインストール・パス 4

IBM HTTP Server 5

アンインストール 205

開始と停止 182

IBM HTTP Server (続き)

- 始動できない 210
- デフォルトのインストール・パス 4
- パスワード、設定 190
- パスワード、変更 190
- 複数インスタンスに関する考慮事項 159, 160
- ポート番号、使用される 14
- ホーム・ページ 214
- ホーム・ページ、接続 196
- SSL の使用可能化 151

IBM HTTP Server のユーザー ID の要件 16

「IBM WS Admin Server」サービスの障害 210

Internet Connection Secure Server 153

Internet Explorer 6

IP アドレス、複数インスタンスの 157

iPlanet Web サーバー

- インストールと構成 53
- インストールの完了 121, 135

iPlanet Web サーバー Enterprise Edition 4.1.8 5

J

JSP にアクセスできない 211

L

LDAP (Lightweight Directory Access Protocol)

- ポート番号、使用される 14

M

Macromedia LikeMinds クライアント 5

Microsoft IIS 5

N

- Netscape Communicator 6
- Netscape Navigator 6
- nslookup IP コマンド 158

O

- Oracle 5
 - 知識、必要な 19
 - ポート番号、使用される 14
 - Payment Manager の 79

P

- Payment Manager
 - アンインストール 203
 - インストール 79
 - インストール前 80
 - 開始と停止 183
 - 管理者の役割 17
 - セットアップ 198
 - 前提条件、インストールの 79
 - ソフトウェア要件 79
 - 停止 185
 - ノード、構成マネージャー 97, 106
 - ポート番号、使用される 14
 - ホーム・ページ 214
 - Payment Manager Engine の開始 184
 - Payment Manager の停止 185
 - Payment Manager ユーザー・インターフェースの開始 184
 - PaymentServlet.properties ファイル 82
 - PMRealm.jar ファイル 82
 - PSDefaultRealm 82
 - RealmClass プロパティ 82
 - StopIBMPayServer コマンド 185
 - WCSHostName プロパティ 82
 - wcspmrealm.jar ファイル 82
 - WCSRealm 82
 - WCSWebPath プロパティ 82

Payment Manager (続き)

- WebSphere Application Server を使用する Payment Manager の停止 186
- WebSphere Application Server を使った Payment Manager Engine の停止 183
- Payment Manager 管理者の役割 17
- Payment Manager ノード、構成マネージャー 97, 106
- Payment Manger Realm クラス 82
- PaymentServlet.properties ファイル 82
- PMRealm.jar ファイル 82
- populatedbnl.log 209
- populateddb.log 209
- PSDefaultRealm 82

R

- README ファイル 3
- RealmClass プロパティ 82

S

- 「service specific error 10 (サービス固有エラー 10)」メッセージ 210
- SET 5
- Solaris Operating Environment ソフトウェアの情報 215
- SSL (Secure Sockets Layer)
 - IBM HTTP Server のための使用可能化 151
 - IBM HTTP サーバーで使用可能にする
 - 暗号化の概念 151
 - 鍵管理ユーティリティ 153
 - セキュアな実動鍵ファイルの受け取り 153
 - セキュアな実動鍵ファイルの作成 152
 - セキュアな実動鍵ファイルのテスト 154
 - セキュアな実動鍵ファイルを現行ファイルとして設定 153

SSL (Secure Sockets Layer) (続き)
IBM HTTP サーバーで使用可能
にする (続き)
セキュリティの概要 151
要求、セキュアな証明書の
153
SSL の暗号化の概念 151
SSL のセキュリティの概要 151
StopIBMPayServer Payment Manager
コマンド 185

V

VeriSign 認証局 153
Verisign 認証局 151
VisaNet cassette 5

W

WASConfig.log 209
wcsconfig.log 209
WCSHostName プロパティ 82
wcpmrealm.jar ファイル 82
WCSRealm 82
WCSWebPath プロパティ 82
wcs.log 209
Web サーバー
問題判別 210
Domino Web サーバー 5
IBM HTTP Server 5, 190
iPlanet Web サーバー Enterprise
Edition 4.1.8 5
Microsoft IIS 5
Web サーバー・ノード、構成マネー
ジャー 95
Web ブラウザー、サポートされる
6
WebSphere Application Server
インストール 61
管理コンソール、WebSphere
Commerce インスタンスの開始
と停止 101
デフォルトのインストール・パス
4
ポート番号、使用される 14
ポート・ホスト別名の追加 191

WebSphere Application Server (続き)
ホーム・ページ 215
メッセージング・ノード、構成マ
ネージャー 99, 107
問題判別 210
リモート Oracle 126, 139
Payment Manager の要件 79
Payment Manager をインストール
するためにセキュリティを使
用不可にする 80
「service specific error 10 (サービ
ス固有エラー 10)」メッセージ
210
WebSphere ノード、構成マネー
ジャー 96
WebSphere Commerce
アンインストール 204
応答が遅い 211
開始と停止 181
管理用タスク 191
組み込まれている製品 4
構成前 87
作成と更新、インスタンスの 91
使用、オンライン・ヘルプの
213
情報源 213
デフォルトのインストール・パス
4
入手方法、印刷可能なドキュメン
テーションの 213
プログラム仕様と所定稼働環境
217
ポート番号、使用される 14
ホーム・ページ 213
問題判別 211
Web サーバーを始動できない
210
WebSphere Commerce Analyzer
オープン 195
パスワード、変更 189
WebSphere Commerce インスタンス
インスタンス・ノード、構成マネ
ージャー 93, 105
オークション・ノード、構成マネ
ージャー 100, 116
開始と停止 101

WebSphere Commerce インスタンス
(続き)
更新 192
構成前 87
構成マネージャーでの Commerce
アクセラレーター・ノード 116
構成マネージャーでの Web サー
バー・ノード 103
構成マネージャーでのインスタ
ンス・プロパティ・ノード 101
構成マネージャーでのキャッシ
ュ・ノード 117
構成マネージャーでのコンポーネ
ント・ノード 115
構成マネージャーでのストア・サー
ビス・ノードの構成 118
構成マネージャーでのセッション
管理ノード 108
構成マネージャーでのトランスポー
ート・ノード 118
構成マネージャーでのメンバー・
サブシステム・ノード 106
構成マネージャーでのレジストリ
ー・ノード 115
作成
仮想ホスト名を使用して複数
を 159
複数の開始 160
メモリー所要量 159
IBM HTTP Server の考慮事項
159, 160
作成ウィザード 93
作成と更新 91
データベース・ノード、構成マネ
ージャー 94, 101
メッセージング・ノード、構成マ
ネージャー 99, 107
ライセンス・ユーザー管理ノー
ド、構成マネージャー 119
ログ・システム・ノード、構成マ
ネージャー 98, 117
Payment Manager ノード、構成マ
ネージャー 97, 106
Web サーバー・ノード、構成マ
ネージャー 95

WebSphere Commerce インスタンス
(続き)

WebSphere ノード、構成マネージャ
ー 96, 103

WebSphere Commerce、インストール
75

WebSphere ノード、構成マネージャ
ー 96, 103



Printed in Japan

日本アイ・ビー・エム株式会社
〒106-8711 東京都港区六本木3-2-12